

日本古代建築における様の研究

Study on the *Tameshi* of Ancient Japanese Architecture

2014 年 2 月

小岩 正樹

Masaki KOIWA

日本古代建築における様の研究

Study on the *Tameshi* of Ancient Japanese Architecture

2014 年 2 月

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

小岩 正樹

Masaki KOIWA

目次

序論

第1章	本論文の研究目的と背景	5
第2章	本論文の研究方法与構成	9

本論

第1章	日本古代の建築の様に対する解釈	15
第2章	実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式	23
第3章	実忠の東大寺における造営事績とその活動形態	43
第4章	天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係	69
第5章	思託の西大寺八角塔の様	81
第6章	国分寺および大安寺造営における図と様の関係	101
第7章	古代における駅家建築の様	109
第8章	石山寺造営における長上と将領の作材	119
第9章	石山寺造営における良弁の改作指示	127
第10章	巡礼記にみる建築の様態の記述	135

結論	143
----	-----

図版出典・初出一覧	151
-----------	-----

序論第1章 研究の目的と背景

本研究は、奈良時代を中心とした古代日本の建築を研究対象とし、「様（ためし、よう）」と記録に残される計画資料の内実や授受関係、機能の検討を通じて、当該期における建築建造の状況を示し、その社会的特徴について解明することを目的としている。

建築造営の歴史的背景を検討することは、建築史学のうちでも建築生産史学と呼ばれる。特に古代文明における建築造営では多くの組織と技能が関与し、人員や材の徴発などが集権的な政治体制のもとで造営が進められるため、研究は当時の国家機構までを想定する必要がある。そのなかで本研究が対象としている日本古代の建築生産は、国史などの文字資料が残存する点、建築遺構が兼存する点、現在に到るまでの文化的な継続が認められる点などから、古代社会の例として建築史上貴重な研究分野である。この日本古代と対象とし、造営工程において中心的な位置を占めた可能性が高い計画資料「様」に焦点を当て、建築生産史研究の推進と拡張を試みるものであり、ひいては東アジア木造建築文化圏における建築様式の伝播や、それぞれの地域での発展過程の解明に展望を与えるものと目論まれる。

1.1 本論文の研究背景

近年の日本建築史学は、百年以上続けられた研究史のなかで遺構の確認やその価値判定を含めた通史の編年作業が一通り完成し、今後は史的解釈に基づいた学術研究の一層の深化が求められる状況にあると言えるだろう。本研究が対象としている古代建築の生産史では、主な研究として、古くは部民制などの大和王権時代の手工業生産体制の研究^{注1)}、律令時代の竹内理三氏による寺院経営史としての造寺史研究^{注2)}、福山敏男氏による正倉院文書の造営関係文書の復原^{注3)}、遠藤元男氏による一連の職人・工匠の研究^{注4)}、渡邊保忠氏による通史的な『日本建築生産組織の研究』^{注5)}などを中心として通説が確立し、その後も、浅香山木氏による『日本古代手工業史の研究』^{注6)}、沢村仁氏による延喜式木工寮条文の研究^{注7)}、岡藤良敬氏による造石山寺所関係研究^{注8)}などが発表され、櫛木謙周氏の研究があるが、以後は大枠としては進展が見られなかった。このようななかで、本研究は以下の諸点を考慮し、日本古代建築史学における学術上の萌芽的、発展的研究を意識している。

まず、現代ではアジア圏における研究活動の交流が活発化し、改めてこの地域における歴史的な文化交流活動について問い直す機運が高まっていること。次いで、日本の古代建築史学が遺構や資料の確認などの基礎的な研究蓄積を完了した現在、より広い視座の獲得や積極的に解釈を試みる姿勢が必要とされているが、建築生産史では、設計から施工にいたるまで、広く社会的な関

係性について考察する必要があるため、既往の研究蓄積を多く活用することができる利点があること。さらに、古代の建築生産において利用されていた「様」と呼ばれる計画資料は、従来の研究評価が途上であったが、実は建築造営の全体像を俯瞰することのできる対象として、研究推進上極めて貴重な資料であると見込まれることが挙げられる。

1.2 本論文の研究目的

以上のような視点に基づいて、本研究は「様」に対する考察を中心とする。「様」について改めて述べると、古代日本において造形物の製作時に介された資料と推測されているものであり、建築を含め、絵画や彫刻、兵器、衣服などの形状の伝達に使用されたことが判明しているが、いずれも文書資料中に登場する語として確認されるに過ぎない存在である。これまで美術史と建築史の分野を中心として研究が行われてきたが、美術史学では「様」の遺物と目される絵図があるために、その使用を含めた製作の過程まで研究が進められていることに対し、建築史学では「様」の実物への推測が模型、図面、仕様書など一定せず、建築の造営に果たした意義を計りかねているのが現状である。

このようななかで、本研究は、建築史における「様」の実物の比定と同時に、それが帯びていた機能としての規範性を明らかにすることを目指している。つまり「様」とは、特定の資料形態のことを指すのではなく、ある状況下においてはじめて呼称されるものと仮定をたて、その状況に対し検討を加えることで、規範性や手本などとしての性格があったことを実証するものである。

本研究では8世紀を中心とする奈良時代を検討の時代としているが、この時期には短期間に多くの造寺活動が行なわれたことが知られている。その造営活動の背後に「様」の機能を確認することができれば、ひとつの建築造営史上の特徴として位置付けることができ、古代日本の社会において「様」を介して建築造営が行なわれていたという建造プロセスを示すことができる。

1.3 研究の特色と意義

・学術的特色と研究の独創性

歴史的建造物の建造過程を考察する建築生産史では、文字資料である歴史的な記録文書を基に研究を進める文献学が中心であるため、実際の建築の形態については検討できないことが一般的な傾向である。これに対し、本研究課題も建築生産史学に分類されるが、「様」という形態決定に際して介されていた計画資料を扱うことで、文字資料と古代建築の遺構の形態との関係を結ぶことができる。すなわち、日本古代の建築について文書と遺構の双方から複合的に研究を進めることが可能である。

また当該研究の独創性としては、まずは、従来その存在は知られていたが評価が定まっていなかった「様」に着目した点が第一に挙げられる。既述の通り「様」を通じて建築の造営を考察することは、施主の意図、造営の過程、工事組織間の関係などを明らかにすることができ、総合的に造営を俯瞰することができる。古代の建築生産史研究に長らく進展が見られなかった状況で、「様」に焦点を当て改めて研究の深化を試みる点に独創性がある。

しかし本研究課題は、古代建築の建造過程の解明のみにとどまらず、建築様式史についての研究推進も見込まれる。研究代表者が専門とする建築史学は、歴史的建造物の編年史の構築が主たる目的であり、形態比較、様式検討はその大きな要素となっているが、これに対し本研究課題では「様」の機能や実際に利用されていた状況を検討することで、古代日本において神社仏閣などの建築様式が定まる仕組みについて検討することができる。すなわち、建築変遷史への学術的貢献について有効な研究と言える。

・波及効果・普遍性と文化・社会的な貢献

これまでの研究内容から「様」は異なる地域において授受されていたことが判明しており、国内における文化的中心地から地方への伝達のみならず、古代韓半島から日本へも「様」が渡されたことが確認されている。一般に建造物の建築工事は多種の専門技術者が組織されて実施されるが、特に古代の東アジア文明圏では、仏教文化の伝播に伴い、技術者や僧侶などが国境を越え、活発に人的交流が行なわれた結果、都市や建築が造営された歴史がある。したがって、古代日本における「様」を通じて建築生産史研究を進めることは、古代の東アジア地域における建築の伝播について考察することができ、日本の建築文化の形成過程の解明のみならず、周辺文明圏との比較考察も可能となる。特に古代中国の隋王朝や唐王朝時代の資料にも「様」の記録があるため、本研究課題の成果は古代東アジア文明圏の建築造営の一般的な特徴として提示することが見込まれる。

注

- 注 1) 例えば、平野邦雄「生産の組織」(豊田武編『体系日本史叢書 産業史』I、山川出版社、1967年)／直木孝次郎 1919「伴と部との関係について」(『日本書紀研究』3、塙書房、1968年)／弥永貞三 1915「仕丁の研究」(『史学雑誌』60-4、1951年4月)／上田正昭 1927『日本古代国家論究』(塙書房、1968年11月)など。
- 注 2) 竹内理三「造寺司の社会経済史的考察 - 造東大寺司を中心として -」(『宗教研究』新 10-2・10-4(74・76)、1932年11月)
- 注 3) 福山敏男「奈良朝末期に於ける某寺金堂の造営 - 法華寺阿弥陀浄土院か -」(『建築学研究』55、1932年1月、のち「奈良時代に於ける法華寺の造営」、『日本建築史の研究』、桑名文星堂、1943年10月)／同「奈良時代に於ける石山寺の造営」(『宝雲』5・7・10・12、1933年2月-1934年5月)
- 注 4) 遠藤元男 1908『日本職人史の研究 論集編』(雄山閣、1961年1月、のち同『日本職人史の研究』II、

雄山閣、1985 年 3 月) など

注 5) 渡邊保忠『日本建築生産組織に関する研究』(私家版、1959 年)

注 6) 浅香年木『日本古代手工業史の研究』(法政大学出版局、1971 年 3 月)

注 7) 沢村仁『延喜木工寮式の建築技術史的研究ならびに宋营造法式との比較』(私家版、1963 年)

注 8) 岡藤良敬「律令体制下の手工業技術者 (I)」(『長崎造船大学研究報告』6、1965 年 9 月) など

序論第2章 本論文の研究方法与構成

本論文の研究方法について述べるに当たっては、まずは建築生産史学について述べる必要がある。なぜならば、建築生産史学とは、その学自体がひとつの方法的視点を含んでいるためであり、本論文の目的とは、建築学全般に対しての、その方法論あるいは理論の適用による寄与を念頭に置いているためである。

建築生産とは、一般には、建築が生み出されるにいたるまでの過程を対象に、多数の主体によって連続的になされる建築行為を指し、そこに組織や制度、職能といった社会的な特徴が現れる。本論文において建築生産史と述べるものは、歴史的にみた社会状況を念頭に置きつつ、建造物の造営に関係する情報を多角的に得ることで、その史的事情や過程を解明し、それぞれの建造物が内包する意味を深化させ、建築の概念を拡張させるひとつの建築史学の方法と考えている。つまり、建築様式史があくまで完成後の建築の意味を評価するものであることに対し、建築生産史は完成までにいたる状況を対象とする点が大きく異なる。そのため、具体的な建造物の姿が登場しない場合が多いが、建造物の形姿なくしても、つまり実際の建築物の形態が史料制約により不明である場合などでも、建築史学の俎上に載せることができる。具体的な形姿を基盤とする建築様式史と重層的に建築史を編むこともできるだろう。

このような視点は、これまでの建築生産史に携わってきた先学たちによっても、提唱されてきた概念である。以下は渡邊保忠氏が『日本建築生産組織に関する研究』にて示された見解である。

本論文の意図する日本建築生産史は、建築学における理論的背景の学としての建築史という新しい意義に即して、既往の様式建築史から脱皮する前提的な研究課題の一つであると考えられる。すなわち建築生産史は、建築様式の変化を、工匠組織や工匠技術の変化との関連において考察しようとするものであり、言い換えれば、建築における生産力の発展変化を体系的に考察して、それを既往の様式建築史の研究成果に関連づけようとするものである。(渡邊保忠『日本建築生産組織に関する研究』)

本来的には、そのような生産活動の様相をふまえたうえでの「様式観」が求められることを説いており、建築様式史が、建築形式史と、ほぼ変わらないことに対する批判であり、現在でも日本の伝統建築に対する様式概念について検討する上では、有効な示唆である。特に奈良時代の建築界においては、次代の平安時代と比べると、いくつかの例外や萌芽はあるものの、やはり仏教

建築伝播による形式性の打破には至らないと認めざるを得ない。

しかし、これに対する本論文の相違点についても、やはり先学の記述を繙き示したい。

一般概念において、生産力は、労働者の熟練の平均度、科学ならびにその技術的応用の発達段階、生産過程の社会的組織、生産手段の範囲とその作用能力などの事情によって決定されているものである。これを建築生産において言葉を換えていえば、建築工匠の技術水準、建築術（大工技術・設計術）の発達段階、建築工匠組織、大工手工具およびその他の工具の種類と性能などが、建築の生産力を決定している諸要因であるが、それは、直接的に影響する要因であって、同時に、その社会一般の生産力が間接的に建築の生産力を規制していることも忘れてはならない。

したがって建築生産史の研究は、その時代の生産力一般の発展を背景として、建築生産力を直接決定づけている諸要因の発展変化を考察しなければならないことは、いうまでもない。しかしながら、これらの諸要因のうち、主として狭義の技術概念に属するものの、研究は、遺構の解体修理等を通じて精密に研究を行わねば体系化しえない制約があり、またその研究機会が制約されているため未だ体系的に考察する段階に至っていない。

それゆえ、本論文は、前掲の発展の諸要因のうち、建築の生産組織を研究の主たる対象として、生産史的考察を行っている。このように研究の対象を一応限定しているが、生産力を決定づけている諸要因は、また同時に互いに密接に関連し合っていて、一つの要因の発達段階は他の要因の発達段階を決定づけているものであるから、生産組織の体系的考察は、それと相互に密接に関連しているところの技術の、時代的特質の把握を可能ならしめるものといえよう。（渡邊保忠『日本建築生産組織に関する研究』）

ここには、渡邊氏が想定する「諸要因」について、理論としての体系化を図ることの困難が示されている。すなわち、組織の研究とならざるを得なかった事情が示されている。その結果、以下のような生産像が描かれる。

飛鳥時代の仏寺の造営が、少数の工人の渡来によって実現しえたのは、それまで直接建築とはかかわりをもたなかったが、組織化さえすれば、すでに新様式の建築に適用しうるだけの、木工、金工、陶工、石工などの基礎的な個々の生産諸技術が、準備

されていたからであり、これこそが、大陸建築の導入を可能にさせた技術的基盤だったといえる。

したがって、渡来工人がはじめにまず行わねばならなかった仕事は、日本に潜在する諸技術を引き出し、これを組織化して、それぞれの工人のもつ技能を段階に応じて建築へ参画させることであった。(渡邊保忠「大陸建築様式の社会的背景と6世紀の日本」)

古代的な建築生産は、高度な技術体系をもつ建築の上部組織と、大量の民衆労働力との結合があるときのみ生産力の上昇をみたのであり、この生産の展開の仕方が古代を特徴づけるものであった。(渡邊保忠「古代的建築生産の形成過程」)

古代の建築生産は、ただ単に建築官司の上部組織のみで展開されたのではなく、律令機構が有機的に活動してはじめて、生産力の上昇がありえたのであった。(渡邊保忠「律令的建築生産の展開」)

結果的には、組織化、構成、機構、制度、という概念でもって、生産活動が説明されている。しかしこれは、必ずしも氏が問題提起した「変化の原因を主題とする動的な把握へ進むべき」とする「内的因子」への考察までは踏み込めていないといわざるを得ない。なぜならば、組織や制度とは、氏の言うところの生産構造の「上部構造」であり、本来的に氏が着目していた「生産力」とされる要因自体については解明できないためである。

渡邊保忠氏がこのような方法をとらざるを得なかったことが、上記の氏自身が述べるとおりではあるが、まずは把握しやすい「組織」に着目し、その組織の形態の変遷を通じて、建築の歴史を描くという、先駆的研究が取り組まなければならない制約があったためであろう。

次いで、建築史学の方法として、永井規男氏の見解を述べたい。

建築は、他の多くの製作物がそうであるような、製作者から使用者あるいは鑑賞者へという一方的な授受関係を前提として作られるものではなく、常に製作者と使用者との多面的な相互交渉の反復の上にたって作られる。この意味で、建築生産はそれ自体がひとつの社会的関係なのである。この社会的関係は、建築生産の規模の増大に比例してより複雑なものになる。建築生産の物理的な側面だけに限ってみても、多種多様の建築材料を入手すること、それらを建築現場に運ぶこと、木工事・屋根

工事・壁工事など職種別に技術者・労働者を編成し、一定の秩序に従って作業を行わせることなど、いずれの場合でも容易ならぬ社会的関係が引き起こされるのである。このようにして複雑にからみ合うことになる諸関係を組織だて、ひとつの方向に作用させること、このことが、必然的に建築生産を運営する上での第一義的な問題となる。(永井規男「歴史のなかの建築生産システム」)

ここにおいては、「関係」を機軸にして、建築生産の像を描くことが示されている。組織の検討のみでは建築生産の完成性を把握することの困難からの脱却が図られており、本論文もその研究姿勢および方法の流れを引き継いでいる。

建築史の分野においては、古代における建築生産組織の研究は、具体的な建造物の実物から判明する形式・様式や技術、すなわち「もの」は、検討の対象にしづらいという性格がある。大きな前提としては、古代では現存する建築や当初部材がごく少数に限られている点があり、明瞭さを示すことの困難が常につきまとうことは否めない。しかし、例えば一般に考古遺物となる古代瓦の瓦当文様から造営組織や過程が判明するような状況があることと比較すると、もちろん瓦は建造物の一部ではあるものの、古代建築において生産状況と建造物とを即応させる方法は、なかなか見出しがたい。言うまでもなく、年輪年代法の開発とその研究の深化による判定は、重要な方法として学会に寄与していることは疑いないが、このような有効な方法はごく稀である。

あるいは、「もの」ではなく、文字史料の残存状況に限られる点に困難があることも一因である。例えば、中世以降の棟札史料のように、造営に携わる人や組織と、具体的な建造物とが直接的に関係づけられる状況とは異なり、古代においてはそれぞれの建築造営に関する史料がほとんど現存していない(極めて例外的に、天平宝字年間の石山寺造営記録、法華寺阿弥陀堂の造営記録、興福寺西金堂造営記録が、正倉院文書に残されている。これより、本来は官の主導による造営では、同様の造営記録があることが一般的であったと推測される。そのため、ほとんどの造営記録が現在にまで伝わっていないこととなる。)。したがって、造営の過程を動的に追える史料がないため、工匠やその集団が具体的にどのように活動したのか、明瞭に確認することは困難である。

ただし、官司として造営機関が存在したことや、その構成員として所属する工匠の階梯などは、令制の制度面の記録から窺える。また、国史などの記録類にも、ごく簡潔な記述に限られるが、存在などが確認される。すなわち、特定の造営主体があることやいることは確認できるが、具体的にどのように建築を造営したのか、把握することが難しい。

それは古代建築生産史においては、研究分野や研究者の分離という問題点を抱えることとなる。単純化して述べると、建築物は建築学、造営事情は文字史料が中心となるため史学、というような、

学問領域の分化が生じかねない。上記において、建築生産史学では、必ずしも具体的な建築物の形姿がない状況でも建築に関する考察が可能となると述べたが、当然ながらその弊害もある。そのような広く事情を解明すべき学問領域でありながら、上記のような事情から、研究が限られてしまうという困難がある。そのため、可能な限りの情報を博搜して、複合的に検討する。

本研究は文字史料をあつかうため、仏教建築導入期に相当する奈良時代以降の古文書が中心となる。まずは文献の確認を行うが、建築の「様」が記載された史料は、編纂作業を経てまとめられた国史や寺史などの史書と、建築造営の際に現場にて取り交わされた符帳などの書付の、二種類の性格へ分類できる。前者は造営過程における計画時の段階、後者は施工時の段階について「様」の機能の解明が期待でき、それぞれの側面から研究を進めた。原史料は、その多くが活字印刷された排印本にて出版されているが、史料の写真版である影印本は少数が刊行されるに過ぎないため、原典閲覧のため各地の所蔵文書館を訪問して、文書一式の複写などを実施して進めた。

次いで、文献調査の成果を踏まえ、次年度では建築遺構の調査を通じて実際の規範性のあり方について検証を加える。文字史料にて確認される「様」の記述に直接対応する建築遺構はいずれも現存していない。しかし「様」の規範性を追及する本研究においては、各遺構間にて全体および部分を問わず建築形式に共通する要素があり、その互いの取捨選択の様子を抽出することに成功すれば、時代的な評価として規範の存在を認めることができ、「様」の性格付けへとつながるものとする。検討は、既存の調査図面や写真資料を収集して行うほか、現地確認調査を実施して進めた。

文書に記述された建築の「様」について検討することは、とりもなおさずその建築形式の比定が前提であり、その上で規範性についての比較がはじめて可能となる。しかし記述には詳細な形式が含まれないことが多く、また日本における古代建築はその多くがすでに現存しないため、建築形式の考察にあたって情報が十分でない恐れもある。このような情報の不足に対応するため、関連する美術史や考古学などの隣接分野における研究状況も多く確認し、補足して進めている。

参考文献

- 1) 渡邊保忠著・渡邊保忠先生著作刊行委員会編『日本建築生産組織に関する研究 1959』（明現社、2004年12月、初出1959年）
- 2) 大河直躬『番匠』（法政大学出版局、1971年5月）
- 2) 永井規男「歴史のなかの建築生産システム」（新建築学大系編集委員会編『新建築学大系 44 建築生産システム』、彰国社、1982年10月）

本論 第1章

日本古代の建築の様に対する解釈

日本古代の建築の様に対する解釈

「様」は書料中に登場する語であり、これまで美術史や建築史の分野を中心に造形物に関係する語として研究されてきた。特に著名な例としては、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』にある「金堂ノ本様奏上」^{注1)}、また『令義解』や『令集解』の註釈にある「様者、形制法式也」や「様、物之形様也」^{注2)}という記述が挙げられよう。ただしその用いられかたは多義的であり、大きく分類しても、美術工芸や建築の造作に関係する場合のほか、「婦女衣服様」^{注3)}、「金銀鈿作唐様大刀」^{注4)}などは物の様式という側面が強く、あるいは「其様神妙也」^{注5)}とあるように物の様態を意味する場合も見られる。また必ずしも造形物のみが対象とは限らず、「様工」^{注6)}や「心内ニ思様」^{注7)}という記述もあり、ほか護国寺本『諸寺縁起集』にある「又様云」^{注8)}のように引用のもとになったものを指す場合もある。

このなかで、特にその意味を明瞭に把握し難いものが、造形物の作成に関係した場合である。既往の解釈を挙げると、まず建築史の分野では、足立康氏は思託による『延暦僧録』の「従高僧沙門釈思託伝」^{注9)}に、ある西大寺「八角塔様」について、「雛形の類」、すなわち「建築物ではない特殊の小八角塔」とされ、さらにこれを『西大寺資財流記帳』にみる四王堂内に安置された八角五重小塔に比せられた^{注10)}。また福山敏男氏は『東大寺要録』の「東大寺権別当実忠二十九箇条事」^{注11)}に登場する東大寺小塔殿様を取上げ、「様はタメシとよみ、手本とか試作の模型とかいう意味」とされ、「元興寺極楽坊の五重小塔などは五重塔の様の一例」^{注12)}と判断されている。この元興寺極楽坊五重小塔は、古代における小建築として玉虫厨子の宮殿部や海龍王寺五重小塔とともに著名だが^{注13)}、内部構造を含む造作という観点を含めても、「様」と考えてよいかどうかは、近年では慎重な態度が取られている^{注14)}。また一方で、福山氏は薬師寺本『薬師寺縁起』に引く内裏記の記述「美福門薬師寺南大門様」を挙げ、様を形式とも解釈される^{注15)}。次いで太田博太郎氏は、個々の様の事例に即して設計図や部材の荒い原図としてより実施工事に供した計画資料と解釈され、場合によっては模型とも述べられる^{注16)}。また永井規男氏は東大寺小塔殿様を引き、これを雛形模型とされて雛形を介した造営手順を推測される一方で、「形制法式」との記述から図面や仕様書なども含むとされている^{注17)}。

以上は様の同定が主に目指されていることに対し、造仏や作画を対象とした美術史の分野では、実際の遺物として正倉院中倉の造鏡様や造花様^{注18)}が想定されることもあって、制作過程の背景も含めた研究が進んでいる。家永三郎氏は写しとしての伝統的な規範性をもつものとして様について言及され^{注19)}、次いで平田寛氏もやはり図形の統一性を保つための性格を強調し、特に本様を取上げ、手本や見本・原図としての規範性について述べられている^{注20)}。また稲木吉一氏は、様が一

般に図絵である説を挙げられ、さらに様を下図、本様を手本との区別を示される^{注21)}。紺野敏文氏は、特に請来された様について、規範・典例とすべきもの、または先例という語義にならい、造形のもとになる様体のものとされている^{注22)}。

本研究の目的は、以上のような美術史における解釈に対して、建築史においても様の生産史的な意義について再検討を試みることにある。建築史における課題は、造営に先駆けた計画の段階にて登場する資料であることは判断できるが、それが現代の設計図書のように、実施工事を精確に反映しているものであるかという点で解釈が異なる。すなわち、実施の可否や建築の様式なども含めて、様をもとに造営の検討がなされたことは確実であろうが、それが反映される施工との関係によって、結果として試作品と解釈するか、より独立性の高い造形資料であるか、判断が困難となっている。また、建築物において確実に様と判断される史料が現存していない点も、先述の通り様の実物について諸説が生じている背景といえる。この点は、例えば中国隋朝の宇文愷伝には、明堂について伝来する図をまとめ、その様を木を以て為すとあるため^{注23)}、様は模型や絵図などのある特定の資料形態と捉えるよりは状況に応じて解釈することが適当と考える。稲木氏は、建造物の様の解釈が模型説と設計図説に二分される状況を指摘されるが、両者ともに明確な根拠がなく、様は平面および立体を問わず、有形物の制作の前段階においてそのありさまをかたちにしたものとされており、これを「形制法式」の図化として結ばれている。しかし「形制法式」の語義には、スタイルなどの単なる形態のみならず、規定および規範性という概念も含まれるため、様の比定と同時にその生産的な意義の解明も必要と考える。したがって本研究では、まずは様の形態を追及することよりも、建築造営における様の性質と機能を主たる論点として、特にその規範や手本としての側面について検討を加えてゆく。

史料に見られる様の例は平安時代に入ると増加するが、奈良時代以前においても比較的まとまって見ることができる。このうち造形物に関するものについて一覧を表に挙げた。さらに建築の造営に関係するものは、元興寺縁起や思託伝および実忠伝に見られる造寺における記述と、天平石山院造営における符牒とに大きく分けることができるが、これは前者が史書であることに対して、後者が実際の施工時に交わされた書面であり、文書の性格としても異なる。今後はこの両者を中心に考察を進めたい。

なお様の音韻としては、『令義解』が引く營繕令の条文「凡營造軍器皆須依様」に「タメシ」とふられる^{注24)}。ただし、先の「ようす」などの意味の際には「有様」に「アリサマ」とあり^{注25)}、また「様々」は「ヤウ〜」^{注26)}、「仏光ノ様」は「ヤウ」と読む^{注27)}。様の意味によって差があるが、ここで検討を試みる様はまずは「タメシ」の音としている。

注

- 注 1) 『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（松田和晃編著『索引対照 古代資財帳集成 奈良期』、すずさわ書店、2001年2月）
- 注 2) 『令義解』（『新訂増補国史大系』第22巻、国史大系刊行会、1939年4月）、『令集解』後篇（『新訂増補国史大系』第24巻、吉川弘文館、1955年3月）、「営繕令」の条
- 注 3) 『続日本紀』養老3年の条（『新訂増補国史大系』第2巻、国史大系刊行会、1935年12月）
- 注 4) 「東大寺献物帳」天平勝宝8年6月21日付、『正倉院文書』（『大日本古文書』4ノ133）
- 注 5) 『七大寺巡礼私記』（藤田経世編集『校刊美術史料 寺院篇』上巻、中央公論美術出版、1972年3月）
- 注 6) 「様工」は請負工人と解釈されており、以下にその主な研究を挙げる。河本敦夫『天平芸術の創造力』、黎明書房、1949年4月；直木孝次郎「様工に関する一考察」、『奈良時代史の諸問題』、塙書房、1968年11月；浅香年木「様工集団とその長の性格」、『日本古代手工業史の研究』、法政大学出版局、1971年3月；岡藤良敬「様および様檜皮葺工」、『福岡大学人文論叢』4-3、1973年12月；米倉久子「様工試論－羽栗大山等の仕事を中心に－」、『福岡大学大学院論集』26-1、1994年8月
- 注 7) 『諸寺建立次第』超昇寺の条、（上述『校刊美術史料 寺院篇』上巻）
- 注 8) 『諸寺縁起集』護国寺本（上述『校刊美術史料 寺院篇』上巻）
- 注 9) 『日本高僧伝要文抄』巻三（『新訂増補国史大系』第31巻、国史大系刊行会、1930年7月）
- 注 10) 足立康「西大寺八角七重塔に就いて」、『東洋美術』12、1931年。なお、田中重久氏は両者は別であるとし、改めて様を西大寺八角七重塔の雛形とされている（たなかしげひさ「西大寺創立の研究」、『奈良朝以前寺院址の研究』、白川書院、1978年8月）
- 注 11) 「東大寺権別当実忠二十九箇条事」、『東大寺要録』巻七、（筒井英俊編集校訂『東大寺要録』、初版：全国書房、1944年1月、復刻版：国書刊行会、1971年12月）
- 注 12) 福山敏男「西大寺の創建」、『仏教芸術』62、1966年10月
- 注 13) 奈良国立文化財研究所編集・発行『小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－』飛鳥資料館図録第12冊、1984年3月。ほかに正倉院所蔵の紫檀製小塔残欠（浅野清「正倉院紫檀塔の残欠について」、『奈良時代建築の研究』、中央公論美術出版、1969年11月）や、平城宮跡出土の小建築片（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XI 第一次大極殿地域の調査』、1982年1月）も確認されている。
- 注 14) 例えば、鈴木嘉吉「元興寺極楽房五重小塔」（『大和古寺大観 第三巻 元興寺極楽房 元興寺 大安寺 般若寺 十輪院』、岩波書店、1977年6月）、藤村泉「建築模型の歴史－その製作意図－」（『月刊文化財』226、1982年7月）ほか。なお藤村氏は様を模型と積極的に判断されている。
- 注 15) 福山敏男「薬師寺の歴史と建築」、『寺院建築の研究 上』、中央公論美術出版、1982年6月、（福山敏男・久野健著『薬師寺』、文化史懇談会編『日本美術史叢書』1、東京大学出版会、1958年11月）
- 注 16) 太田博太郎「古代建築の生産」、『奈良六大寺大観 東大寺一』付録VI、岩波書店、1970年4月初版、2000年11月補訂版
- 注 17) 永井規男「歴史のなかの建築生産システム」、新建築学大系編集委員会編『新建築学大系 44 建築生産システム』、彰国社、1982年10月
- 注 18) 帝室博物館編『正倉院御物図録』第6輯（1931年4月）に所収されている、第7図「墨画鏡背図」、および第9図「版画宝相華文図」。また建築装飾でも天井や須理板などの花様があったことが記録されている（『大日本古文書』16ノ224）。
- 注 19) 家永三郎『上代倭絵全史』、高桐書院、1946年10月（改訂版：墨水書房、1966年5月）
- 注 20) 平田寛「絵仏師の技法」、『絵仏師の時代〔研究篇〕』、中央公論美術出版、1994年2月；同「本様と今案」、『デアアルテ』13、1997年3月
- 注 21) 稲木吉一「上代造形史における『様』の考察」、『仏教芸術』171、1987年3月
- 注 22) 紺野敏文「請来『本様』の写しと仏師（一）－飛鳥仏の誕生と止利仏師－」、『仏教芸術』248、2000年

1 月

注 23) 『隋書』卷六十八、「列伝」第三十三、(『和刻本正史 隋書(二)』、古典研究会、1971 年 8 月)

注 24) ほかに『日本書紀』推古天皇 14 年条の「今朕為造丈六仏、以求好仏像、汝之所献仏本、則合朕心」にある「本」に「タメシ」とふられる場合もある(『新訂増補国史大系 日本書紀 上』第 1 巻、吉川弘文館、1951 年 9 月)。

注 25) 『建久御巡礼記』元興寺の条に引く智光の伝(上述『校刊美術史料 寺院篇』上巻)

注 26) 『建久御巡礼記』法隆寺の条、久原文庫本と前田家本との相違による(上述『校刊美術史料 寺院篇』上巻)。

注 27) 『諸寺建立次第』大安寺の条(上述『校刊美術史料 寺院篇』上巻)

表1.1 奈良時代の古記録にみられる「様」の事例

分類	本文	言及年	所収
印	是日、遣使七道、宣告依新令為政、及給大租之状、并頒付新印様	大宝元年 (701)	『続日本紀』 六月巳酉条
服装	始制定婦女衣服様	養老3年 (719)	『続日本紀』 十二月戊子条
尺	頒尺様于諸国	養老4年 (720)	『続日本紀』 五月癸酉条
衣服	自今以後、天下婦女、改旧衣服施用新様	天平2年 (730)	『続日本紀』 四月庚午条
	五日南 ^様 仏所、充墨端一折、即充調大山也	天平17年 (745)	『正倉院文書』 経師等調度充帳
建築	戊申年送六口僧、名令照律師弟子惠念、令威法師弟子惠勲、道嚴法師弟子令契、及恩率首真等四口、工人、并金堂、本様奏上、今此寺在是也	天平19年 (747) 奥付	『元興寺伽藍縁起并 流記資材帳』
	教輪師借帙一枚 雲間緋裏鐵縁拾組緒 右為様差宝進沙弥令請如件 七月十三日	天平勝宝2年 (750)	『正倉院文書』 経疏櫃帙等借用帳
絵様	装潢十人(中略)三人繼塔基様紙	天平勝宝4年 (752)	『正倉院文書』 写書所食口案帳
絵様	画様高善君万呂 厨子帳 天平勝宝四年潤三月十八日始 第一厨子 花嚴宗 充弓削大成 潤三月十八日充様料紙冊八帳 阿部万呂 高善公万呂 能登男人 河内廣道 高益国 第二厨子 法性宗 充簀秦麻呂 閏三月十八日充様料紙冊八帳 笠間家足 秦稻村 簀秦大市 柏原佐美万呂 (後略)	天平勝宝4年 (752)	『正倉院文書』 充厨子彩色帳
調度	厨子壺口 赤漆文槻木、古様作、金銅作鉸具	天平勝宝8年 (756)	『正倉院文書』 東大寺献物帳
刀	金銀鈿作唐様大刀一口	天平勝宝8年 (756)	『正倉院文書』 東大寺献物帳
調度	大唐古様宮殿画屏風六扇	天平勝宝8年 (756)	『正倉院文書』 東大寺献物帳
調度	経台一基 右、為用様、依紀判官宣、充造鑄所	天平勝宝8年 (756)	『正倉院文書』 東大寺政所符
絵様	絵師九人 三人絵瓦様 六人絵軸	天平勝宝8年 (756)	『正倉院文書』 写書所食口帳
仏像	謹進 糸六十勾 右、為造千手千眼菩薩、進如件、 九月廿六日豊成謹状 謹状 三郎侍者 千手千眼像知識所造長一丈 余義仁様 千手千眼経五十卷 金光明経五十卷 以前同願	天平勝宝年中 (749-757)	『正倉院文書』 藤原豊成糸進状

分類	本文	言及年	所収
絵様	天井并須理等花様	天平宝字 4 年か (760?)	『正倉院文書』 (法華寺造営関係)
貨幣	勅、錢之為用、行之已久、公私要便莫甚於斯、頃者、私鑄稍多、偽濫既半、頓將禁断、恐有騷擾、宜造新様与旧並行	天平宝字 4 年 (760)	『続日本紀』 三月丁丑条
兵器	迎藤原河清使高元度等至自唐国、(中略) 事畢欲歸、兵仗様、甲冑一具、伐刀一口、 槍一竿、矢二隻、分付元度、(後略)	天平宝字 5 年 (761)	『続日本紀』 八月甲子条
	古様錫杖杓枝 (中略) 新様錫杖杓枝	天平宝字 5 年 (761) 撰	『法隆寺縁起并資財帳』
建築	一、釘六十三隻 八寸八隻 六寸冊隻 五寸十五隻 右、依員檢納如件、但不如様之	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 造石山寺所符
建築	一、可作三丈殿材 桁 古麻比 扱 右材、依員并様、早令作、々畢即次下桁戸 歩板等令作	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 造石山寺所符
調度	一、机板十枚、且令作進上、依先様耳	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 造石山寺所符
兵器	造東海、南海、西海等道節度使料綿襖冑各 二万二百五十具於太宰府、其製一如唐国新様	天平宝字 6 年 (762)	『続日本紀』 正月丁未条
建築	右大徳下坐之更改事、宜承知狀、如先様勿令作、但 尻如先令作、而広五寸 ^厚 高五寸令作	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 石山院務所符
調度	一、応鑄 御鏡四面 各徑一尺 厚六分 副様一枚 但絵着緒所文者	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 石山院牒案
建築	一、可令作戸二具 右、依先様、早速令作進上	天平宝字 6 年 (762)	『正倉院文書』 「造石山寺所符」
仏像	画七仏薬師仏様 功三人	天平宝字 7 年 (763)	『正倉院文書』 造東大寺司告朔解
調度	五月九日借下屏風參牒 二牒薄墨馬形一牒散楽形 右、為様下造置寺司	神護景雲 4 年 (770)	『正倉院文書』 雙倉北雜物出用帳
建築	景雲年、勅西大寺、造八角塔様	神護景雲年中 (767-770)	『延暦僧録』第一 「從高僧沙門釈思託伝」
建築	一、奉造東西少塔殿事、 右以去神護景雲年中、為安置御願少塔、勅令進殿様、 而大工等造様甚醜、依此法師実忠、改大工等作様、 更様造出五尺余上、奉造如前 依此様諸寺皆營造也	神護景雲年中 (767-770)	『東大寺要録』卷七 「東大寺権別当実忠 二十九箇条事」
仏像	一、奉固大仏御背所々破損并左方御手絶去事 (前略) 爰僧実忠、独策愚誠、率工匠等、自身往至 於伊賀杣、造出応奉固様、并令造雜材木、維時去延 暦廿年中也、以後廿二年申上、件調度材木運上、随 様奉固嚴飭如前	延暦 20-22 年 (801-803)	『東大寺要録』卷七 「東大寺権別当実忠 二十九箇条事」
建築	但長門国駅館者、近臨海辺、為人所見、宜特加勞、 勿減前制、其新造者、待定様造之	大同元年 (806)	『日本後紀』 五月丁丑条

本論 第2章

実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式

実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式

1. はじめに

本研究は、『東大寺要録』^{注1)} 卷第七雜事章第十に所収されている東大寺僧・実忠の事績が記された「東大寺権別当実忠二十九ヶ条事」（本稿では「実忠二十九ヶ条」と呼ぶ）のうち、小塔殿の造営の事績を取り上げ、そこに記された様の働きの分析を通じて、実忠の活動と造営の状況を併せて説明することを目的としている。

本研究で取り上げる様とは、文字史料中に古くから登場する語であり、その主たる解釈に、手本、規範、引例などがあるものとして、これまで斯界の認めてきたところである^{注2)}。特に建築物や美術工芸品などの造形物に関係する場合は、造営・製作の場に関係し、建築の場合は雛形たる模型をはじめ、図面、仕様書、寸法書などに比定され、生産過程のなかで機能した建築資料であることは疑いない。しかしながら、その手本や規範とされる性格が果たした具体的な生産の状況は必ずしも明らかにされておらず、そのため様の解釈にも曖昧な点が残されており^{注3)}、個別の事例に則して検証する試みが必要である。

一方、実忠および「実忠二十九ヶ条」を対象とした研究も、すでに諸先学による厚い蓄積が培われてきている^{注4)}。実忠については、「実忠二十九ヶ条」以外にも『正倉院文書』写経所文書中にしばしば活動の様子が窺えるように、その足跡を伝える史料が比較的多いうえ、「実忠二十九ヶ条」には実忠以外の人物や造東大寺司の組織、奈良時代末期から平安時代初期にかけての東大寺をめぐる情勢も看取できることによる。実忠自身の活動のうちでは、特に「実忠二十九ヶ条」に多く記される造営の事績が目立つ。しかし、その活動の状況については、既往の研究では、「実忠が造営に携わる」、「造営事業を担う」など、なお曖昧な描写にとどまり、実忠が造営において具体的に果たした役割や、寺院組織や造営組織のなかでどのように活動し得たかなど、必ずしも説明されているとはいえない。

以上を踏まえ、本研究は、小塔殿の造営を具体的な対象として取り上げ、様の作成や授受関係などの生産過程の復元を通じて、建築造営における様の働きを明らかにし、同時に実忠を含む造営の関係者や関係組織の参画の状況を明らかにすることを目的としている。研究は、小塔殿建築の事例からの検討と小塔殿の建築造営体制の検討に分けて行う。本稿は前者に対応するものであり、諸寺に設けられた小塔殿建築の記録を比較検討することで様の影響性について考察する。後者については次稿で扱うものとし、造営への参画者の関係性を明らかにしつつ、実忠が果たした役割・職掌を説明する。

2. 「実忠二十九ヶ条」と研究方法

2.1 「実忠二十九ヶ条」における小塔殿の記事

まずは、本研究で対象とする小塔殿の様が記録された「実忠二十九ヶ条」中の条文を以下に挙げる。

一、奉_レ造_二東西少塔殿_一事。

右以_二去神護景雲年中_一。為_レ安_二置御願少塔_一。勅令_レ進_二殿様_一。而大工等造様甚醜。依_レ此法師実忠。改_二大工等作様_一。

更様造出五尺余上。奉_レ造如_レ前 依_二此様_一 諸寺皆營造也

条文は「実忠二十九ヶ条」の第8条にあたり、大意としては、「称徳天皇発願の小塔を安置するための殿の様を上進する勅が下り、大工らが造った様が醜かったために、実忠がその様を改めて造った」となり、続けて「諸寺はこの様によって小塔殿を造営した」と記される。小塔とは、恵美押勝の乱を契機として称徳天皇（乱の勃発時は重祚以前の孝謙太上天皇）の発願によって造顕され、内に百万塔陀羅尼經を納めた百万塔であり、『続日本紀』宝亀元年四月戊午条は百万塔の完成と諸寺への分納を伝えている^{注5)}。その小塔の安置を目的とする建築が小塔殿もしくは小塔堂と呼ばれたことが知られるが、後述の通り諸寺のうちには小塔殿以外の名を持つ堂に納めた例も見られる。第8条の条文では、小塔殿の造営の中でも特に様をめぐる状況に焦点が向けられており、その作成を実忠が担った点に事績としての主眼があったと認められる。この様の解釈としては、福山敏男氏は「大工等の作った『様』（雛形）を実忠が改作したものに抛り、東大寺はじめ諸寺の小塔殿が造立されたという」とされ^{注6)}、この例をひいて一般に様は手本や試作の模型の意と説かれた。太田博太郎氏は、この様は「立面図乃至模型」とし、やはり「これによって諸寺に小塔殿を造ったとみえている」とされている^{注7)}。森郁夫氏は「模型」と解釈され^{注8)}、稲木吉一氏は、「実忠二十九ヶ条」第5条の大仏修理のために作られた様を検討し、これと同様に「設計図的な下図」と解釈されている^{注9)}。

2.2 「実忠二十九ヶ条」の史料批判について

ところで、この「実忠二十九ヶ条」は実忠の個人としての業績が顕彰されている史料であり、内容が故意に誇張されている疑いもある。例えば牧伸行氏は、「実忠二十九ヶ条」の末文が「牒如_レ右」と「牒」して結ばれている点からも、寺家別当への就任を意図した上表文との可能性を挙げられており、実忠が自らの業績を強調したと見られている^{注10)}。強調的な表現が即虚偽につながる

とは限らないが、「実忠二十九ヶ条」を対象とするには、まずは内容の真偽について検証が求められる。

松原弘宣氏は、この小塔殿の記述は大仏殿以外の東大寺の諸建造物造営に関して記された条文のグループ（7～10条）に分類されており、この一群は事績がほぼ年代順に「実忠二十九ヶ条」上に掲載されていることから、ほかの条文のグループと比較して大同4年（809）には記されていたと判断されている^{注11)}。すなわち、末尾に「実忠二十九ヶ条」の成立と記されている弘仁6年（815）の時点に作文的に記されたものでなく、全面的に信頼するには疑問が残るにせよ、まったくの作為的なものではないとされる。佐久間竜氏は、その史料価値を評価しながらも、「当年」や「今」と記載されている年が条文間で不統一である点、年数計算の不整合さ、「権別当」と「修理別当」との記述の不一致などを問題とし、弘仁6年以後に後継者たちによって関係史料が収録整備されて成立した可能性を挙げられているが、やはり本人によって直接記された部分を中心となったことを推測されている^{注12)}。

「実忠二十九ヶ条」の史料批判については、当然ながら記載内容を解説しながら同時に検証してゆくしかない。本稿においても第8条を中心に検討を加えるが、条文全体に関して始めに指摘しておく。

2.2.1 条文構成の検討

まずは、記事内容による条文の構成について考察する。29条分の分類は諸氏それぞれ行われてきているが、中心的な事績となる条文群を、造営関係、寺務関係、教学関係とする項目の立て方は共通しており、そのほかの条文を、東大寺関係以外、私献、独立した項目などへ分類する見方にも大差なく、認められるところである。これに加えて本稿にて指摘する点は、具体的な造営の事績に分類されている条文群の構成が、東大寺大仏を中心とする対象物の空間的な位置・立地の順序による区分と、対象物に関わる技能の差による区分によってなされ、それぞれが時間順に沿って列記されている点である。すなわち、まずは東大寺に関する造営が第2条～15条、他寺の造営が第25条と隔てて掲載され、前者は、木工・建築の造営に関わる事績が第2条～10条、土木造成の事績が第11～15条に分類されて、さらに前者は、大仏と大仏殿（第2～5条）、大仏殿院（第6条）、寺内のほかの建築（第7～10条）という順にて収められる。対象物の序列があるという点は、時間的な順序と逆行して、第5条の大仏修理が第7条や8条に先行して述べられ、また第9条の東大寺正面側に相当する南や西の大垣が第10条の北大門の造成よりも前に挙げられる点に見ることができる。技能・造営対象の職掌の種類で分けている点については、第12条は土塔であるために同じ仏塔であっても第7条の木造七重塔とは区別され、第11条の池の造成と合わせて

記される点に示されている。また第13条の造瓦別当としての事績も、瓦という建築の関係物でありかつ焼成した瓦は僧房という東大寺内の建築のためであるが、良土を探し瓦窯にて瓦焼成を行うことが土木造成の範疇として見なされたのだろう。

このように造営関係の条文では、構成・整理の法則に一貫性が見られ、そこに構成の意図を認めることができる。なお、この構成の法則によって、第8条は東大寺内の大仏関係以外の建築の条文群に分類される。したがって、文中の「小塔殿」とは「諸寺」の中でも東大寺の小塔殿に主眼が置かれていることが推察できよう。

2.2.2『正倉院文書』との照合

次いで、「実忠二十九ヶ条」記載の事項は、『正倉院文書』写経所文書中の史料と照合がとれるものが多いため、その点に関して改めて確認したい^{注13)}。

第1条の実忠による造東大寺司政の参画とは、財政上の経営に関わることであり、収支を管理して財務改善に成功したことが記されているが、その初年である天平宝字4年(760)とは、藤原仲麻呂の自筆とされる勅書によって、それまで主に造寺料として利用されていた東大寺封戸5千戸が、营造修理塔寺精舎分1千戸、供養三宝并常住僧分2千戸、官家修行諸仏事分2千戸と、分割して用途が定められた年である^{注14)}。なお、後世において、このうちの修理料1千戸は造寺所(下政所=下司、後に9百戸となる)へと引き継がれて造営関係の財源に充てられ、2千戸は三綱(上政所=上司、後に1千8百戸となる)が管理することになる^{注15)}。東大寺封戸の用途指定の背景としては、光明皇太后追善供養の財源の確保や^{注16)}、官家功德分封物の創出が指摘されているが^{注17)}、まずは勅書にある通り、大仏殿を中心とする造営事業が一段落したことをうけて、以後の東大寺運営体制を整備する点が基本にあると考えて良い。同時にこの時期に東大寺経営の中心が造東大寺司から東大寺三綱へと移りつつあることが指摘されており^{注18)}、財源運営に関しては官人のみではなく僧侶の参画が見られ始める。もっとも、この第1条の場合は僧侶のなかでも三綱ではなく、良弁の目代という立場の実忠が行っている。これは良弁が造東大寺司を管理運営しえたことを意味し、これより三綱および造東大寺司の双方を監督しうる「造寺別当」の黎明としての良弁の姿が導き出される^{注19)}。

「実忠二十九ヶ条」にはこの用途指示に関係する直接的な文言は見られないものの、第1条の文面にある通り、「奉仕造寺司政」「検校造寺政」の職務のなかには造東大寺司が担っていた財務管理が含まれる。したがって実忠の財務運営は、同年に行われた封戸分割の影響を受けたことは間違いなく、第1条は分割後の経営に関係したものと考えられよう。実忠と造東大寺司との関係は次稿にて述べるものとし、本稿では、既往研究でも指摘されている東大寺運営の変化の状況に沿っ

たものとして、「実忠二十九ヶ条」第1条の記事内容の動向が合致している点を指摘する。

良弁の目代という立場については、天平宝字6年(762)に上院務所から造石山寺所へ宛てた牒では、実忠が良弁の宣によって造営の催促を指示している^{注20)}。目代とは、「目の代わり」、すなわち代理であることが第一義であるため、実忠が良弁の目代であったという点は保証されよう。ただし、実忠の署名には職位としての目代の記載は見当たらず、三綱の代理としての目代である寺目代では書かれている点と対照的である^{注21)}。これは、良弁が当該期の東大寺において職位としての「別当」を名乗ることはなかったため、その下にある実忠もまた正式な職位である「目代」とは署名しなかったものと考えられる。

第16条では神護景雲元年(767)から宝亀4年(773)にかけて東大寺少鎮に就き、造寺を検校したことが記される。少鎮としての実忠の署名は『正倉院文書』の写経所や造東大寺司に関係して多く見られるが、年代の判明する記録は第16条の期間と一致している。加藤優氏によると、東大寺における鎮は称徳朝の時期に重なるように確認することができ、少鎮実忠のほかに、大鎮の文室真人浄三、中鎮の平栄が知られている^{注22)}。その役目は、三綱と同じく寺務の執行・運営と考えられるが、文書の署名の位置より三綱より上位の僧職と判断できるため、寺内を統治し、寺務全般を監督する性格も帯びていたと見られている。実忠が東大寺三綱の就任より先にその上位の鎮に就任しているのは、目代に続いて、やはり良弁の影響が認められるところである。

第19条の「造寺司知事政」は10箇年という期間のみが記され、具体的な年代が明記されていないが、知事としての実忠の署名は延暦23年と大同2年(「上座兼知事」とある)に見られるため^{注23)}、この前後の期間の事績を記述していると考えられる。本条に記載されている「造寺司」とは、造東大寺司は延暦8年に廃止されているため、その後継機関である造東大寺所を指す(造東大寺所は「造寺所司」「造司」「造司所」などと表された)。すなわち、造東大寺所知事の期間は、「上座」として署名のある延暦15年(796)を上限とし^{注24)}、「修理別当」とある大同4年(809)を下限とするうちの^{注25)}、いずれかの10年間を想定しうる。

これら寺務を担う職位への就任は、それぞれ『正倉院文書』中の関係史料にて照合されることとなり、史料性を疑うことはできない。就任時期の切り替わりが整合的過ぎる点はやや作為的とも捉えられようが、時期が互いに矛盾することはない。

2.2.3 造営に関わる記事の各条間の比較

次いで、造営に関する職位と具体的な事例とを比較する。実忠が造営に携わった役職としては、時代順に第1条の「良弁の目代としての造寺司政への関与」、第16条の「少鎮としての検校造寺」、第13条の「造瓦別当」、第19条の「造寺所知事」が挙げられる。それに対して個別の具体的な造

営事項は、第2条～15条および第25条である。この両者の時期を照合すると、第3条の光背の構立の時期は第2条の伝える光背の完成した宝亀2年(771)からさほど下らないと考えられるため、第6条を除く計14ヶ条分は合致していることが分かる。第6条の大仏殿歩廊(回廊)の幡懸けの木作りが除かれる点は、「延暦年中」のいずれかであるため詳細な年代が不明であることによるが、上述の通り実忠が造寺所の知事を務めた時期は延暦16年以後と考えられるため、記載された「延暦年中」が延暦16年から延暦25年(大同元年)の期間のいずれかであったならば合致し、ほかの14ヶ条分が合致する傾向から考えればその蓋然性が高い。逆に、実忠がこれらの造営関係の職務から外れる期間である延暦年間の前半期には、具体的な造営の事績は書かれていない。すなわち、具体的な造営対象を記した条項は、造営に関係する職務への就任の時期に対応していることが認められる。造営関係の職位に関する条文では経営や運営の観点からの内容に留まり、具体的な造営の内容に関する記述はないが、他の個別の造営事例の条文と対応していると考えられる。

2.2.4 『東大寺要録』の他記事からの検討

以上のほか、東大寺内における実忠自身の評価と連動して「実忠二十九ヶ条」が評価されてきた事実があり、それは『東大寺要録』をはじめとする寺内編纂文書の他の多くの記事から窺える。『東大寺要録』巻第四諸院章第四の二月堂の条では、実忠による創建が書かれるが、実忠が十一面悔過と涅槃会に供奉した年紀は、第22条と第23条のそれと年数計算が整合しない点まで同じであり、書写関係の範疇にあったことを推測させる。また巻第五別当章第七においても実忠に関わる記述が見られ、良興別当の任中記に天平宝字8年(764)として東塔露盤の構上と東西小塔院の創建、永興別当の宝亀2年(771)に大仏殿の副柱、空海別当の弘仁年間における修理別当就任の記載があり、上記の各僧の別当就任には疑問がありながらも^{注26)}、それぞれの実忠の事績は「実忠二十九ヶ条」と照合する。また、巻第六末寺章第九の新薬師寺の条では、実忠が新薬師寺の西に石塔を建てたことが記され、『東大寺別当次第』大僧都良恵の任中記では土塔を作るとあるが^{注27)}、これは第12条と対応し、さらに現在の頭塔に比定できることが知られている^{注28)}。そもそも焼失した実忠自筆と伝えられる「実忠二十九ヶ条」は、二月堂内陣にて礼拝の対象とされた朱唐櫃に納入されて重視されたことは寺内周知の事実であった^{注29)}。これらは「実忠二十九ヶ条」の影響関係であり、成立の確証性を支持する根拠ではないが、このような寺内における評価は「実忠二十九ヶ条」の史料性を一概に否定しうることを阻むだろう。そのほか、登場する組織や人物の職位など、固有の文言では、正確に合致する箇所もある^{注30)}。既往研究においても指摘されてきた、文面の「今」や「当年」の年が一致しない点や、実忠の評価に誇張された割合が含まれる可能性などの疑問は残るものの、上述の傾向を考慮すると「実忠二十九ヶ条」の記載内容の大枠はまったくの架空の創作

ではないものと判断できる。したがって、第8条の記載内容についてもある程度の信頼性を仮定しつつ、そのうえで検証と考察を始める。

2.3 造営の工程と研究方法

さて、構築物の造営に際しては、工程の順序や職掌による生産の体系がある。企画構想から始まり、設計計画を経て実施施工に至る一般の生産の工程を、まずは第8条が述べる状況に従って当てはめて考えると以下となる。

- 1 : 小塔殿の様を進上する勅が下った
- (2 : 大工が作るようになった)
- 3 : 大工が様を作成した
- 4 : 大工の様が醜いと判断された
- (5 : 実忠が作るようになった)
- 6 : 実忠が作り改めた
- (7 : 実忠の様が認められた)
- (8 : 実忠の様を諸寺にて共有した)
- 9 : 実忠の様によって諸寺で施工した

上記において括弧が付されているものは、工程として想定されるべき段階でありながら直接は条文に記されていないため、復原して記したものである。この第8条において、情報伝達媒体である様の機能としては、工程の段階と伝達の間柄によって以下の3つに分類できる。第一は様の作成の段階であり、勅によって大工や実忠が様を作成して進上したという点に相当し、第二は様の譲渡であり、実質的に造営を行う個別の諸寺へと様が渡る段階に相当し、第三は実施施工であり、実際の造営組織のなかで計画から実施へと具体的に実現へ向けた情報が伝わる段階である。本研究では、この様によって進行した工程を検証し、造営活動の状況を復原することが目的となる。以下に本研究の論点を整理する。

①設計計画と実施施工との関係について（工程8、9）

百万塔は宝亀元年（770）に頒下されたことに対し、小塔殿の様が発願されたのが神護景雲年中とある。したがって、「実忠二十九ヶ条」の記述は、諸寺に分納される以前に小塔殿の造営が進んだこととなり、時期として合致している。しかしこの第8条では造営工程の全体が記されている

わけではなく、様の作成の記述に主眼が置かれる一方で、実施施工の状況については明瞭に記されているわけではない。東大寺における小塔殿の施工の状況のみならず、その他の諸寺の小塔殿についても、実忠の様が諸寺に渡ってそれをもとにそれぞれ施工したように読めるが、検証が必要である。

②様を作成する主体について（工程 3、6）

職掌として、様を作成することができた主体について検討する。様の作成は当初は大工が担当したが、これは当然ながら所管部署たる工匠が担ったことを表しており、その後に変更がなされて、結果として実忠が進上した。情報媒体としての様がいずれの資料形態をとっていたかは正確には特定できないが、「醜」と判断できるだけの情報があつたため、寸法書付けなどの文字のみの資料などではなく、図や模型といった具体的な形姿が示されたものと考えて良い。具体的な形を示す建築資料の作成には相応の技術が必要であるため、様も実忠という僧侶ひとりのみでは作れないと推測されよう。実忠もまた個人単体としてではなく、なんらかの組織に含まれる、もしくは工匠を率いて協働のうえ臨んだことが推察される。

③造営を判定する主体について（工程 4、5、7）

工程中、様の作成者が大工から実忠へと変更されたため、そこには様に対する監督があつたことが窺える。具体的には、大工の作成した様が「醜」と判断され、また実忠が作成の機会を得て、最終的に実忠のものが採用された。すなわち、令制上の所管たる造営官司が否定されているのであり、そこに即座に実忠が自主的なかたちで参入することができたとは考え難い³¹⁾。その間の造営組織の事情について検討する。

なお、「実忠二十九ヶ条」を通じて、実忠は造営に携わった事例が多いといえども、工程の初期の段階から関わるのではなく、途中からの企画構想や設計計画への参画や、計画が決定された後の施工段階からの従事などが多い。この点は、僧侶としての実忠と造営機関である造東大寺司との関係から論じられ、②および③に関係する。

以上、三つの論点を挙げたが、本稿ではこのうちの①について検討し、②および③については①の検討を経て次稿にて報告を行う。

3. 小塔殿の建築形式と様について

3.1 諸寺における小塔殿建築の記録

では、各記録に残る小塔を安置した小塔殿の建築形式について検討を加える。建築が確認され

る諸寺の事例は表2のものに限られるが、以下にその様子を順に述べてゆく。

1) 東大寺

東大寺には東西両小塔院が置かれ、それぞれが小塔殿をもつ二院形式であったことが知られる。『東大寺要録』では、「実忠二十九ヶ条」の第8条にある「東西少塔殿」に加え、上述の諸院章第四における「東西小塔院」および「東西小塔堂」の縁起が記され、特に後者では神護景雲元年(767)に造営されたと記されている。『正倉院文書』所収の「北倉代中間下帳」では、神護景雲2年(768)の条に「東小塔殿」の前の御在所の装束に白練糸丸幕を充てた記録があるため^{注32)}、この時点には東小塔殿が竣工していたことが分かる。

下って永承3年(1048)3月には、『東大寺別当次第』の権少僧都深観の任中記に、小塔殿が壊れたため五間を三間として補修した旨が記録され^{注33)}、『東南院文書』中の「東大寺修理所修理注進記」によれば天喜5年(1057)に壁一間を修理したことが知られる^{注34)}。これらは東西いずれの小塔殿を指しているものかは記されていない。

その後、『東大寺別当次第』の権律師定海の任中記には、大治5年(1130)4月28日に小塔堂が顛倒し、以後廃絶したとあるが、東西いずれかは明記されていない。『東大寺要録』の別当章では、同じく定海の任中記に保延年間(1135-40)の東小塔堂の顛倒と廃絶が記されている。両者は同じことを指すのか、あるいは大治は西の小塔堂を指し、続く保延年間に東小塔堂も廃絶したことを言うものか、判断はできない。

2) 元興寺

元興寺では、古くは『続日本後紀』および『元亨釈書』の承和元年(834)の護命の卒伝中に小塔院の存在が認められ^{注35)}、元興寺法相教学の碩学であり僧綱において僧正まで務めた護命が止住した院として知られる。また、『東南院文書』所収の長元8年(1035)11月の「堂舎損色検録帳」(以下「損色検録帳」と呼ぶ)には、「西小塔院」の「小塔堂」として破損状況が詳細に記録されている^{注36)}。この小塔堂は五間四面の堂と判断でき、礼堂が設けられていた。次いで保延6年(1140)の巡礼に基づく大江親通の『七大寺巡礼私記』において、百万塔が安置された建築は五間四面瓦葺の吉祥堂とされているが^{注37)}、これに先立つ嘉承元年(1106)の大江親通の『七大寺日記』では、この吉祥堂は三間四面とされ、百万塔が納められているとは述べられていない^{注38)}。その後の『諸寺建立次第』、『諸寺縁起集』護国寺本および菅家本とも、五間四面の吉祥堂に百万塔が安置されたと記している^{注39)}。そのほか、『東大寺要録』巻第二供養章第三の「元興寺小塔院師資相承記」では、婆羅門僧正がもたらした仏舍利を小塔院に納めたことを伝えるが、建築の具体を示す記述はない。

元興寺小塔堂の問題は、「損色検録帳」にある小塔堂が以後に見られる吉祥堂と同建築であるかという点と、吉祥堂の記録のうちに光明皇后御願によるとある点であり、いずれも建築が百万塔のために造営されたかどうかが問題となる。

前者については、「損色検録帳」には一棟しか記載がなく、また寺内全体の堂宇が損壊していた元興寺の窮状を見ると、長元以後嘉承までに小塔堂を廃して新たに別の建築である吉祥堂を造営できたとは考えがたいため、同じ堂として良いだろう^{注40)}。「損色検録帳」は別当と三綱による注進のため、そこに記載された「西小塔院」や「小塔堂」があくまで正式な名称であり、吉祥天信仰に伴って吉祥堂とも呼ばれたものと思われる^{注41)}。

後者については、光明皇后の御願や菩提僊那に伴う仏舎利奉納の伝承は、小塔院が百万塔の発願以前に存在し新たに百万塔のために堂を造営したとは限らない可能性を示す。しかし、元興寺伽藍の造営は8世紀後半までかかったことが知られ、特に五重塔については、発掘調査によって塔跡心礎付近より「神功開宝」が発見されているため、天平神護元年（765）以降の建立が認められる^{注42)}。「西小塔院」は「損色検録帳」に「東塔院」とあるこの東の塔に対応して計画されたと考えられるため^{注43)}、やはり「小塔院」「小塔堂」は、天平宝字8年（764）発願の百万塔を安置する目的で設けられたと考えて良いだろう。

以上より、「損色検録帳」の小塔堂は奈良時代に造営され、それが長元の時点で破損していた状況を表していると考えられるため、本稿では長元の記録のものが検討対象となる。

3) 西大寺

小塔安置建築の具体的な形式が窺える記録のうちでもっとも古いものが、西大寺小塔院の桧皮葺堂である。すなわち宝龜11年（780）12月25日勘録の奥書をもつ『西大寺資財流記帳』に、小塔院の4棟の記述がある^{注44)}。これより、百万塔を造営した称徳天皇の勅願寺でもある西大寺では、正面桁行が七丈におよぶ桧皮葺の堂で、床が張られた形式であったことがわかる。その後の記録には西大寺の小塔院は登場しないため、早くに廃絶した可能性がある。

4) 興福寺

『興福寺流記』では東院の東瓦葺堂が小塔が安置された建築と記録されるが^{注45)}、これは延暦の資財帳である「延暦記」から引かれたものである。『興福寺流記』は「宝字記」や「弘仁記」などを主要な史料としているが^{注46)}、東院東瓦葺堂の条は「宝字記」からの引用はなく、「延暦記」と「弘仁記」からの引用に限られるため、この堂が天平宝字以後から延暦までの期間に成立したと考えられる^{注47)}。「延暦記」にて「小塔堂」と呼称されていることと合わせると、この堂は百万塔を

安置することを目的に造営されたものと考えて良く、創建時の建築形式が知られよう。ただし、『興福寺流記』のほかの建築では、間数、長さ、広さ、高さの規模の記述が揃うものも多いが、この堂にはない。

5) 薬師寺

薬師寺の小塔院は記録には見られないが、薬師寺本『薬師寺縁起』によると、小塔は西院の正堂に安置されたとある^{注48)}。堂には床が張られ、三面に庇が設けられた。護国寺本『諸寺縁起集』にも同文が掲載される。しかし、『諸寺建立次第』の薬師寺の項に引く「薬師寺縁起」には、東院に小塔が安置された様子が書かれており、西院の記述はない。これは菅家本『諸寺縁起集』についても同様である。福山氏は、神護景雲年間の実忠による小塔殿の様の作成にともない薬師寺にも作られた小塔殿が、後に弥勒画像などが置かれて西院正堂と呼ばれるようになったと解釈されている^{注49)}。

6) 四天王寺

『天王寺秘決』では、冒頭の「天王寺別院事」に小塔を安置した「万塔院」が挙げられる^{注50)}。また「塔四天王事」^{注51)}では小塔殿の存在を示す「大同縁起」の記録を引いている。したがって、四天王寺にも小塔院が設けられ、小塔殿があったことが確実である。しかし、その形式については一堂のみが造営されたことのほか詳らかでない。

7) 法隆寺

法隆寺では『斑鳩古事便覧』「伝法堂」条に百万塔についての記述があり、東院夢殿や西院金堂などを含め、寺内にて分置していたことが知られる^{注52)}。ただし『斑鳩古事便覧』が撰述されたのは天保7年(1836)と時代が下っているため、宝亀の小塔奉納に伴う建築の状況は不明である^{注53)}。

以上1)から7)の通り、断片的にも形式が分かる小塔殿は、東大寺、元興寺、西大寺、興福寺、薬師寺のものを数えることができるが、これを建築形式の項目ごとにまとめたものが表3である。このうち、実忠の改めた東大寺小塔殿の様と時代が近いものは西大寺と興福寺の記録であり、特に小塔安置を目的として専用に造営されたと考えられる確実な堂は西大寺のものに限られる。

3.2 小塔殿の建築形式の比較検討

小塔殿の建築形式について考察した堀池春峰氏は、詳細な形式は不明としながらも、実忠の考

案した様式による「塔の形式」をもつものとし、『大日本古文書』では天平宝字 4 年 (760) 頃と判断されて収録されている「桴領調足万呂解」の「小塔料木事」は、この小塔殿のための文書であるとされている^{注 54)}。さらに『元興寺古図』に図示された「小塔院二層八角宝塔」を参考として引かれているが、実忠に由来する小塔殿は八角であるよりも「五間四面」の記述から、方形の小塔形のものであったとされる。しかし上述の通り西大寺の小塔院では建築は塔の形式でないことは明らかであるため、以下に各寺院の堂の形式について比較検討を行う。

まず規模に関しては、小塔院を東西二院として小塔殿を二棟設けるか否かという点に差が見られ、東大寺が二院であることに對し、元興寺では「西小塔院」とあるが東小塔院の存在は確認できず、西大寺では一院のみである。また建築の規模も東大寺が五間、元興寺が七間なので一致していない。西大寺では、檜皮葺堂の桁行七丈は前方にあった細殿と同じく各柱間一丈と考えられ^{注 55)}、元興寺と同じ五間四面となる。桁行と梁行をともに一丈等間とする五間四面堂は、当麻寺曼荼羅堂の前身遺構^{注 56)}や石山寺本堂^{注 57)}などの類例が見られるが^{注 58)}、ほかに寸法が判明する小塔殿である興福寺の場合は梁行が四丈八尺とあるため、西大寺の堂と異なる大きさである。すなわち、諸寺の小塔殿は柱間間数も実際の寸法直にも差が認められる。

次いで、西大寺の場合は堂の前方に別棟の細殿を設けるが、興福寺の小塔堂では「板庇」の存在が記載されており、正堂が瓦葺であるためこの庇は孫庇と考えられる。元興寺の「損色檢録帳」の小塔堂では「南礼堂也」とあるため、堂の南の庇を広めたか^{注 59)}、孫庇形式が考えられるが^{注 60)}、いずれにせよ破損の状況からは一つの棟の瓦屋根の下にあったことが窺え、西大寺とは異なる形式と見られる。福山氏は西大寺の小塔院の建築が「双堂」であることを踏まえた後、「東大寺の実忠が作った殿の様(模型)によって諸寺の小塔殿は作られたというから、西大寺のも実忠型であったろう」とされるが^{注 61)}、以上を見るに統一した形式にて造営された様子はない。そのほか、屋根も檜皮葺と瓦葺があるため、各堂の姿にはそれぞれ差があっただろう。

しかし、一方で諸寺の小塔殿建築がまったく異なっていたと言えない可能性もある。ひとつは床が張られる点であり、記述がなく判断できない東大寺以外では共通している。西大寺では堂と細殿ともに板敷きとあるが、これは東大寺法華堂の当初形式^{注 62)}と同様に、連続する床で繋がれた可能性も想定される^{注 63)}。

ほかに、実忠の様が依拠された可能性として内作が挙げられる。「実忠二十九ヶ条」に見る実忠の業績は、副柱を入れて補修することや、仏像の補修、天井切り上げなど、建築の部分的な工作に関わるものも多いため、建築の全体形式もさることながら、内部への配慮もあったのではないだろうか。また、多数の小塔を安置するには、莊嚴も含め工夫が必要であろう。諸寺に施入された小塔の数には不明な点が多いが、実際に小塔の安置を考えると、現存小塔のうちの最小の「百万

小塔」の型では底面径約 10.5 cm^{注64)}、すなわち諸記録にある三寸五分であり、仮に西大寺小塔院桧皮葺堂の「長七丈広四丈」の規模を想定しても、総床面積でも 2 万 2 千基ほどしか安置できない^{注65)}。この点に関しては、法隆寺のように寺内にて所々に分置した例もあるように、安置の仕方には困難があったことを窺わせる。内部の荘厳についても様が使われた事例として、『正倉院文書』天平勝宝 4 年 (752)「書写所解案」にある「装潢(中略)三人繼塔基様紙」が挙げられる^{注66)}。この様について福山氏は「塔の初重の内部の荘厳のための、すなわち打出仏像の類、あるいは装飾文様のようなもの下絵を指すのであろう」とし^{注67)}、稲木氏はこれを引いて、様は絵画や工芸の下絵にとどまらず、建造物の内部装飾も含めた大規模な制作下図としての可能性をも提示されている^{注68)}。

以上、限られた記述の中ではあるが、各寺における小塔を安置した建築の状況を比較検討した結果、互いの形式に差があることが認められた。具体的な建築形態が異なることは、統一した形式で画一的に造営された訳ではないことを示している。

3.3 小塔殿の造営工程と様

ここで、小塔殿の建築形式に差がある事実と実忠の様との関係について、上記 2.3 で述べた工程の段階と授受関係を踏まえて、造営の状況を整理しつつ検討する。

まず、実忠が作成したという様は、「五尺」という記載に表されているように寸法計画が定められ、「醜」とされた形姿を克服したものであったため、具体的な形態が表現されていたと判断できる。そしてその具体的に示された建築の形姿とは、造営過程に提出されたという事実や「五尺」という寸法値の大きさから、小塔殿の完成後の姿を表す意図があったことは間違いない。したがって、実際の施工の段階において、様を反映することができるだけの情報量は含まれていたと考えてよい。

その上で、「依_レ此様_ニ諸寺皆營造也」とする文言について検証する。この文言を受けて、堀池氏は「諸寺に於ては多少その規模・様式は異なっていたかもしれないが」「十大寺はこれを模範として造営した」として様を「モデルケース」と呼び^{注69)}、田中重久氏は「東大寺に、天下の諸大寺が悉く倣っていると威張っている文章で、史実ではない」と述べ^{注70)}、上記文言を創作文と解釈される。両氏とも、規模や葺材、院数に差があることを認めながらも導かれる見解が異なるため、改めて状況を復原しつつ検討することが必要だろう。

「諸寺」とは、東大寺を含む寺々のことを指す^{注71)}。そのため、諸寺の小塔殿の建築を互いに比較したが、その建築形式に統一性は見られなかったため、実忠の様は一律に反映されたわけではないと判断せざるを得ない。しかし、床が張られる点には共通性が窺え、実忠の様が影響した可

能性もある。さらに、東大寺小塔殿については実忠の様が反映されたと考えられる。第8条の記事の内容は様の作成が中心だが、項目題が「造東西少塔殿事」とあり、あくまで小塔殿の造営一般を指している意図があるだろう。また、2.2.1にて述べた通り、第8条が「実忠二十九ヶ条」の構成上において東大寺の建造物に関わる条文群へ分類されることから、完工した東大寺小塔殿を第一に述べていると推察される。そのほか、『東大寺要録』巻第四諸院章第四の東西小塔院条には、「実忠和上所_レ建也」とある。小塔殿の施工は工人を抱えた担当官司である造東大寺司によるはずだが、一般に由来を記した寺伝においては堂塔を「造寺司が建てた」などとは記述しないため、ここでは実忠の様が影響したことを指すと考えてよい。なによりも、「実忠二十九ヶ条」第16条によると当時実忠は少鎮の立場から造寺の検校に当たったとあるため、東大寺内の造営全般を検校した実忠の様が、実際の小塔殿の造営には反映されなかったとするのは不自然である。

以上のように、諸寺においては実忠の様の反映には差があったことが推察される。そこで改めて「依_二此様_一諸寺皆营造也」とされる文言について検討すると、記述内容は事実を表していない創作と見る疑問も生じよう。もし、これを創作された付加的な文言だと考えるならば、これを除くと第8条は東大寺の小塔殿のみに限った話ということとなり、実忠の様の情報が諸寺へ渡ったと考える直接的な根拠はなくなる。しかし、東大寺内の造営に限る話であったならば、諸寺へ小塔を分置させることを意図していた称徳天皇が、特に東大寺のみの小塔殿の様を勅願するとは考えがたい。やはり諸寺への小塔施入の一環として、小塔殿の様の情報も諸寺へ伝える意図があったと考えることが自然である。しかしながら、諸寺にはそれぞれ寺務組織や造営組織があり^{注72)}、たとえ様の情報が伝達されたとしても反映できるとは限らず^{注73)}、そこに差が生じたと考えられる。そもそも小塔殿に差があることは小塔安置の仕方について認識に差があることを意味しており、勅願による小塔が施入されながらも諸寺個別の対応があり得たことを示している。上記文言の真偽は、諸寺の小塔殿が様に依った程度により判断されるが、この程度には幅が認められることから、丁寧に描写した精確な表現ではないとは言い得ても、根拠のない創作文として一概に否定することもできない。

したがって、これらの状況から判断する限りでは、実忠の様は規模や審美に関わる形姿を伴う完成像が表され、勅願により進上されたが、諸寺においては必ずしもその通りに規定して施工されたとは限らず、影響の程度にはそれぞれ幅があったと考えられる。

4. 結語

以上、「実忠二十九ヶ条」第8条に記された小塔殿様を対象に、奈良諸大寺の小塔殿の記録を踏まえながら、小塔殿建築の生産過程の状況を復原した。史料上の制約があるものの、実忠による

小塔殿の様は、東大寺では施工へと反映されたと考えられる反面、諸寺全般においては一律に反映されたとはいえ難い状況を確認することができた。この状況を踏まえ、次章では、上記 2.3 の②および③にて述べた通り、実忠を取り巻く建築生産関係について検討を行う。

注

- 注 1) 本稿における『東大寺要録』は、東大寺所蔵本を底本とした筒井英俊校訂『東大寺要録』(国書刊行会、1971.12)に従っている。
- 注 2) 諸橋轍次『大漢和辞典』における用例としては、法、手本、雛形などが挙げられ、近年の解釈としては、例えば阿部猛編『古文書古記録語辞典』(東京堂出版、2005 年 9 月)における手本、引例、故事などがある。
- 注 3) 様に関する既往研究の整理と課題については、拙稿「建築における様の解釈について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2006.9)にまとめた。
- 注 4) 実忠を中心的な対象とした研究のうち、特に本稿に関わるものを以下に挙げる。 筒井寛秀・杉山二郎「実忠和尚覚書 - 造仏所研究のうち(二) -」、『美術史』49、1963.6 / 森蘊「実忠和尚の業績」、『奈良を測る』、学生社、1971.9 / 松原弘宣「実忠和尚小論 - 東大寺権別当二十九ヶ条を中心にして -」、『続日本紀研究』177、1975.2 / 佐久間竜「実忠伝考」、『名古屋大学日本史論集』上、1975.7、のち『日本古代僧伝の研究』(吉川弘文館、1983.4)に「実忠」として所収 / 山岸常人「東大寺二月堂の創建と紫微中台十一面悔過所」、『南都仏教』45、1980.12、のち『中世寺院社会と仏堂』(塙書房、1990.2)所収 / 牧伸行「東大寺と実忠」、『日本古代の僧侶と寺院』、法蔵館、2011.4
- 注 5) 百万小塔および小塔殿の研究は平子鐸嶺による『百万小塔肆攷』(1908.7)が早い、分置した諸寺やその数については解釈が別れる。
- 注 6) 福山敏男「東大寺の規模」、角田文衛編『新修 国分寺の研究 第一巻 東大寺と法華寺』、吉川弘文館、1986.7、もと『国分寺の研究 上巻』(考古学研究会、1938.8)および『奈良朝の東大寺』(高桐書院、1947.4)所収を改訂
- 注 7) 太田博太郎「古代建築の生産」、『奈良六大寺大観 東大寺一』付録 VI、岩波書店、1970.4 初版、2000.11 補訂版
- 注 8) 森郁夫『日本古代寺院造営の研究』、法政大学出版局、1998.2。なお、思託の作成した八角塔様については「建物の設計図なり雛形」とされている。
- 注 9) 稲木吉一「上代造形史における『様』の考察」、『仏教芸術』171、1987.3
- 注 10) 前掲牧「東大寺と実忠」
- 注 11) 前掲松原「実忠和尚小論 - 東大寺権別当二十九ヶ条を中心にして -」
- 注 12) 前掲佐久間「実忠伝考」
- 注 13) 例えば足立康氏は、東大寺東塔の落成年代について、「実忠二十九ヶ条」の第 7 条に実忠が天平宝字 8 年(764)に露盤の据え付けを完了したとあることを受けてこの時をもって竣工年と判断されているが、これは『正倉院文書』の天平宝字 6 年 3 月朔日の「造東大寺司告朔解」に露盤の製作に関わる記事が見られることを関係づけている。足立康「東大寺東塔の落成年代」、『仏教芸術』19、1933.10、のち『足立康著作集 3 塔婆建築の研究』(中央公論美術出版、1987.12)所収
- 注 14) 『大日本古文書』4 / 426
- 注 15) 大河直躬「造東大寺所と修理所(平安時代の東大寺造営組織について)」、『建築史研究』35、1965.1
- 注 16) 岸俊男『藤原仲麻呂』、吉川弘文館、1969.3
- 注 17) 清田美季「奈良・平安時代の寺院政策と天皇 - 檀越としての天皇と官家功德分封物 -」、『南都仏教』96、2011.12

- 注 18) 岸俊男「越前国東大寺領庄園の経営」、『史林』35-2、1952.8、のち『日本古代政治史研究』（塙書房、1966.5）所収
- 注 19) 加藤優「良弁と東大寺別当制」、奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会編『文化財論叢』、同朋舎出版、1983.3
- 注 20) 『大日本古文書』5 / 132-133
- 注 21) 吉永壯志「八・九世紀の目代」、『続日本紀研究』384、2010.2
- 注 22) 加藤優「東大寺鎮考 - 良弁と道教の関係をめぐって -」、『国史談話会雑誌』23、1982.2
- 注 23) 『平安遺文』25 号および 32 号
- 注 24) 『平安遺文』14 号
- 注 25) 『平安遺文』25 号
- 注 26) 前掲加藤「良弁と東大寺別当制」
- 注 27) 堀池春峰「東大寺別当次第」、『新修 国分寺の研究 第一巻 東大寺と法華寺』、吉川弘文館、1986.7
- 注 28) 先行した下層頭塔を上層頭塔へ改造したとされる。『史跡頭塔発掘調査報告』、奈良国立文化財研究所、2001.2
- 注 29) 堀池春峰「二月堂炎上と文書聖教の出現」、『書陵部紀要』22、1970.11。のち『南都仏教史の研究』上 東大寺篇（法蔵館、1980.9）所収
- 注 30) 佐伯今毛人の職位は当該時期に頻繁に変更となるものの、正確に記されている。これは次稿にて詳述する。
- 注 31) 清水善三氏は「本来ならば大工等の仕事」であったものを実忠が担当したのは「偶然的な事態に付随するもの」とされ（清水善三「平安時代初期における工人組織についての一考察」、『南都仏教』19、1966.12）、牧氏は「造営に対する造詣の深さが指導者達の知るところであったあったために、実忠が指名されている」とされている（前掲牧「東大寺と実忠」）。確かに両氏の述べられる通り、大工の様が醜くなければ実忠が作成することはなかったわけであり、また実忠に深い造詣がなければ担当することも、もしくは担当させられることもなかった。いずれにせよ、ここではどの「指導者達」による「指名」の判断がされ、機会が生じたかという点について検討する。
- 注 32) 『大日本古文書』16 / 589
- 注 33) 前掲堀池「東大寺別当次第」
- 注 34) 「東大寺修理所修理進進記」、『東南院文書』卷十三（『大日本古文書』東大寺文書一）
- 注 35) 『続日本後紀』承和元年九月戊午条（『新訂増補国史大系』第三卷、吉川弘文館、1966 年 8 月）／『元亨釈書』元興寺護命条（『新訂増補国史大系』第三十一卷、吉川弘文館、1965.6）
- 注 36) 「東大寺三綱堂舎損色検録帳」、『東南院文書』卷十三（『大日本古文書』東大寺文書一）
- 注 37) 『七大寺巡礼私記』（藤田經世編『校刊美術史料 寺院篇 上巻』、1972.3）
- 注 38) 『七大寺日記』（前掲『校刊美術史料 寺院篇 上巻』）
- 注 39) 『諸寺建立次第』、『諸寺縁起集』護国寺本、『諸寺縁起集』菅家本（いずれも前掲『校刊美術史料 寺院篇 上巻』）
- 注 40) なお岩城隆利氏は、中近世の史料では小塔院と吉祥堂が別個に並列する記載が多く見られることから、中世のある時期に小塔院とは別に吉祥堂を造営したことを推測されている。例えば『大乘院寺社雑事記』において、文明 15 年（1483）における元興寺諸堂の記録のなかに「小塔院ハ吉祥堂之別院也」とあること（文明十五年九月十三日条）、永正 2 年（1505）の御影供の記事では護命の木像と絵が吉祥堂と小塔院とに分かれて置かれていたこと（永正二年五月四日条）などが挙げられる。岩城隆利『元興寺の歴史』、吉川弘文館、1999.11
- 注 41) 前掲岩城『元興寺の歴史』
- 注 42) 太田博太郎「元興寺の歴史」、『大和古寺大観 第三巻』、岩波書店、1977.6 ／『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告』11、奈良県、1930.3

- 注 43) 前掲岩城『元興寺の歴史』
- 注 44) 西大寺所蔵本『西大寺資財流記帳』（山口英男「『西大寺資財流記帳』の書写と伝来」、佐藤信編『西大寺古絵図の世界』、東京大学出版会、2005.2）。なお、小塔院の記載は、内閣文庫本、西大寺本とも同文である。
- 注 45) 『興福寺流記』（『大日本仏教全書』興福寺叢書第一）
- 注 46) 澁谷和貴子「『興福寺流記』について」、『仏教芸術』160、1985.5 / 小林裕子『興福寺創建期の研究』、中央公論美術出版、2011.1
- 注 47) 菅家本『諸寺縁起集』では、東院東堂は天平宝字 8 年（764）の建立とあるが、この紀年は百万塔の発願に仮託されたものだろう。また、菅家本『諸寺縁起集』東院東堂の条は、同じ東院の西松皮茸堂の記録とともに、後から補われたものでもあることが藤田経世氏により指摘されている（菅家本『諸寺縁起集』解題（前掲『校刊美術史料 寺院篇 上巻』）。
- 注 48) 『薬師寺縁起』薬師寺本（藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇 中巻』、1975.3）
- 注 49) 福山敏男「薬師寺の歴史と建築」、『福山敏男著作集一 寺院建築の研究 上』、中央公論美術出版、1982.6
- 注 50) 『天王寺秘決』は尊経閣文庫本によると『提波羅惹寺摩訶所生秘決』が原題である。棚橋利光編『四天王寺古文書』第一巻、清文堂出版、1996.3
- 注 51) 「塔四天事」は、法隆寺俊厳書写の『天王寺秘決』では「塔内四天事」とある。『大日本仏教全書』112「聖徳太子伝叢書」収録の「太子伝古今目録抄」より。
- 注 52) 『斑鳩古事便覧』（法隆寺昭和資財帳編纂所企画『法隆寺史料集成』15、ワコー美術出版、1984.5）
- 注 53) 榊原史子は、上述の四天王寺『天王寺秘決』（嘉禄 3 年・1227）と法隆寺『太子伝古今目録抄』（顕真撰述、嘉祿 4 年～寛元頃・1238-1247 頃）が、互いの寺院への対抗意識に基づいて撰述されたとされる（榊原史子「『天王寺秘決』の成立と『太子伝古今目録抄』への展開」、『ヒストリア』224、2011.2）。『天王寺秘決』では第一の項目に別院が挙げられ、撰述者が別院に大きな関心があったことを意味しており、さらにその冒頭に「万塔院」が挙げられる。これに対して、『太子伝古今目録抄』は特に『天王寺秘決』に触発されて撰述されながらも、小塔院や殿に関する記述は見られない。そのため、法隆寺ではこの撰述の時点で小塔に伴う施設はなかった可能性が高い。
- 注 54) 堀池春峰「恵美押勝の乱と西大寺・小塔院の造営」、日本歴史考古学会編『日本歴史考古学論叢』、吉川弘文館、1966.11、のち『南都仏教史の研究』下 諸寺篇（法蔵館、1982.4）所収
- 注 55) 古代仏堂の柱間寸法に関する考察は、例えば大岡実『南都七大寺の研究』（中央公論美術出版、1966.10）など。
- 注 56) 当初は五間四面の建築であったが、建立後さほど期間をおかず孫庇が設けられたと考察されている。『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』、奈良県教育委員会事務局文化財保存課、1960.10
- 注 57) 天平宝字 6 年になった改作では礼堂はなかった。福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」、『日本建築史の研究』、桑名文星堂、1943.10
- 注 58) 正面桁行柱間が一丈等間であるのは、当麻寺前身堂では部材を転用した遺構の桁行が一丈等間であったことによる可能性もある。また石山寺も、やはり桁行が一丈等間であった前身遺構の柱位置を踏襲したと推測される。この西大寺小塔院の場合は、堂の前に細殿があるため、正面中央間を脇間より広くする意義が薄いと考えられた可能性がある。仏堂の正面性については、藤井恵介「平安初期礼堂試論」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』F、1990.10）がある。
- 注 59) 井上充夫・高橋偉之「礼堂の諸形式について（その 2）」、『日本建築学会関東支部研究発表会梗概集』、1956.6
- 注 60) 前掲太田「元興寺の歴史」
- 注 61) 福山敏男「西大寺の創建」、『仏教芸術』62、1966.10。なお古史料にある「双堂」が指す形式の解釈に関しては井上充夫氏および海野聡氏による考察があり、両氏に従えばこの西大寺小塔院の建築は古

史料が示すところの「双堂」形式には当てはまらない。井上充夫「双堂への疑問」、『建築史学』11、1988.9 / 海野聡「双建築の再検討」、『仏教芸術』320、2012.1

注 62) 浅野清『奈良時代建築の研究』、中央公論美術出版、1969.11

注 63) 宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」、『日本古寺美術全集 第六巻 西大寺と奈良の古寺』、集英社、1983.1

注 64) 金子裕之「百萬塔」、法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝 昭和資財帳 第五巻』、小学館、1991.6

注 65) 百万小塔の製作年代は、現存するものについては墨書より天平神護3年（神護景雲元年・767）から神護景雲2年（768）と判断されており（前掲金子「百萬塔」）、小塔殿の様が勅願された時点では小塔の寸法はすでに定まっていたことが確実である。

注 66) 『大日本古文書』12ノ309

注 67) 前掲福山「東大寺の規模」。この様については、足立氏は「七重塔の絵図」（前掲「東大寺東塔の落成年代」）、太田氏は「塔すなわち建築の設計図」とされている（前掲「古代建築の生産」）。「塔基」の解釈としては、時代は下るが『七大寺巡礼私記』の元興寺の条に「塔基四方浄土造様、山タタミタル様」とあり（この「様」は様態を示す意であり、本研究で扱う「様」とは異なる）、また『七大寺日記』の大安寺の条に「塔基勝鬘夫人ノ出家鉢木像アリ」とあるため、塔の初重を指す。したがってこの場合の様の解釈は福山氏の通りと考えられよう。

注 68) 前掲稲木「上代造形史における『様』の考察」

注 69) 前掲堀池「恵美押勝の乱と西大寺・小塔院の造営」

注 70) 田中重久「木造八万四千小塔と小塔殿・東西両院の正堂」、『奈良朝以前寺院址の研究』、白川書院、1978.8

注 71) 田中氏は上述の通り東大寺の影響力を示すものと解釈されているが、「実忠二十九ヶ条」が実忠の個人としての顕彰文であることから見ても、この文言は「東大寺」と「他の諸寺」という比較ではなく、「様の制作者である実忠」と「様の受け手」、すなわち「東大寺を含む諸寺での造営」への影響性を示すことをより強く意図したと捉えた方が適切であろう。

注 72) 例えば、西大寺小塔殿の造営は造西大寺司が担当しただろう。造西大寺司は、『続日本紀』神護景雲元年二月戊申条に長官以下官人の任命が見られ、実忠が様を進上した時には発足していた。

注 73) 諸国の国衙、国分寺、諸道の駅家建築などについても差は認められる。

本論 第3章

実忠の東大寺における造営事績とその活動形態

実忠の東大寺における造営事績とその活動形態

1. はじめに

本章は、『東大寺要録』^{注1)} 卷第七雑事章第十に所収される東大寺僧・実忠の事績が記された「東大寺権別当実忠二十九ヶ条事」(以下「実忠二十九ヶ条」と呼ぶ)のうち、造営関係条文を取り上げ、建築生産の観点から実忠の造営活動を明らかにするものである。「実忠二十九ヶ条」が対応する奈良時代後期から平安時代初期にかけての東大寺では、孝謙・称徳朝における藤原仲麻呂や道鏡の台頭、光仁朝という天智系皇統への移行や桓武朝の遷都といった情勢の影響を受けるとともに、造営面に関しても、聖武朝から続く造営事業の収束、東大寺造営組織としての造東大寺司の廃止と造東大寺所(東大寺造寺所とも)の発足、別当の確立にみる寺院運営体制の整備など、多くの変化を迎えることが知られている。「実忠二十九ヶ条」が収める造営関係条文では、それら変遷の影響が反映されるかたちで造営の事情や関係した組織や人物が記され、さらに造営の具体的なプロセスが関係者を交えて描写される。その状況下において実忠がなした活動形態を提示することが本章の目的である。

実忠の事績に焦点が当てられた先行研究は多くあるが、本章の論旨に深く関係するものを後掲の参考文献欄に挙げた^{注2)}。特に実忠の造営活動の多くを検討対象としたものに、清水氏、松原氏、佐久間氏、牧氏の各論があり、特に松原論文は「実忠二十九ヶ条」の史料批判を踏まえて事績を総合的に検討した先駆的研究である。本章は、これら先行研究の成果と関連研究を踏まえ、改めて造営関係条文の記述内容の検証を行い、登場する組織や人物と実忠との関係を示して、造営事績に見られる実忠の活動形態の解明を試みるものである。

2. 東大寺造営組織と実忠

2.1 造東大寺司と実忠

まずは、東大寺の造営担当官司である造東大寺司と実忠との関係について考察する。造東大寺司は令外官ながら四等官制が敷かれ、標準として長官1名、次官1名、判官と主典はそれぞれ2～4名が置かれており、その下に多くの史生や舎人が配されていた。また工匠としては、木工の工人では大工・少工・長上工・上番工らが所属していたことが知られており、大工は益田縄手、少工は小田広麻呂、長上工は船木宿奈麻呂などの名を挙げることができ、そのほか正倉院文書には、単に「木工」や「司工」とのみ記された上番工たちの名も見られる^{注3)}。これら官人は、「実忠二十九ヶ条」の文中では「造寺司官人」「大工」「長上」などと記載されて登場する。

また、「実忠二十九ヶ条」では、「大仏師従四位下国中連公磨」とある国公麻呂や、「造寺司左大

弁佐伯宿禰」と記される佐伯今毛人といった特定の人物も、造東大寺司の工人とともに記載されている。国公麻呂（君麻呂、公万呂にもつく）は、『続日本紀』天平宝字 5 年（761）10 月壬子朔条にあるように造東大寺司の次官に任ぜられているが、かねてより盧舎那仏の造立に携わったことが知られている^{注4)}。『続日本紀』天平 17 年（745）4 月壬子（25 日）条にある正七位下から外従五位下への大幅な昇叙をはじめ、天平 18 年（746）11 月 1 日の「金光明寺造物所告朔解案」（『大日本古文書（編年）』9 卷 300 頁から 301 頁。以下「大日古」9 ノ 300-301 のように示す）に本官の官職として記される「造仏長官」は大仏の造立を担当した造仏司の長官を指すため、造東大寺司次官への就任以前から大仏造営に当たったことを示している。その後、天平勝宝から天平宝字を経て大仏のおおよその造立完了を迎え、またその間に生じた阿弥陀浄土院造営の完了をもって造仏司は停止され、公麻呂は造東大寺司次官へ就任したことが指摘されている^{注5)}。

佐伯今毛人は造東大寺司の長官や次官を務めた^{注6)}。造東大寺司設立の初年と考えられる天平 20 年（748）には、すでに造東大寺司の次官として見えるが（「大日古」10 ノ 377）『続日本紀』延暦九年（790）十月乙未（3 日）条の薨伝では、天平 15 年（743）以降東大寺造営に携わったと記されている。天平 21 年（天平感宝元年・天平勝宝元年・749）4 月の叙位では六階昇叙となり（「大日古」25 ノ 88）、もともとこの時の叙位では造東大寺司の官人は二階加賜と特別であるが（「大日古」25 ノ 101、115）、今毛人の昇叙は顕著であり、功績の大きさが窺える。その後も次官に就任し続け、天平勝宝 6 年（754）12 月 30 日にも次官であったが（「大日古」13 ノ 14）、翌月の天平勝宝 7 年（755）正月 25 日には長官として自署が見える（「大日古」13 ノ 14）。すなわち、両名とも造東大寺司と関係が深く、長年にわたって造営に携わった人物である。以上の関係者をもとに、造東大寺司が登場する条文を建築の生産関係としてみてゆきたい。

2.1.1 造東大寺司の経営と実忠

まず、経営や運営管理の側面については第 1 条が該当する。第 1 条「為故僧正良弁賢大法師目代、奉仕造寺司政事」では、天平宝字 4 年（760）から天平神護 2 年（766）にかけて、実忠は良弁の目代として造寺司政を検校し、出納を管理して運用財政の改善に功績があったと記される。用物が少なく用度に堪えられなかったという状況を、実忠は「調用租米^{僧か}」を検収し、毎年の残物が多く倉を満たすまでに改善して、造東大寺司の官人たちに知らしめたと述べられる。

律令官司である造東大寺司への経営面における僧侶の関与としては、天平宝字末年頃から越前国東大寺領庄園の管理の主体が造東大寺司から東大寺三綱へに移る傾向にあることが岸俊男氏によって指摘されており^{注6)}、これは越前国庄園のみならず、東大寺全体の経営が三綱をはじめとする僧侶へ移ることを意味しており、寺院経営の流れとしては、『類聚三代格』所収の天平神護 2 年

(766) 8月18日付の太政官符にあるように、諸国国分寺田の経営を従来の国司委託の方式から三綱経営へ改めたことと大きくは同調する。

この時期の造東大寺司経営に関係する事項として、東大寺造営がおおよそ一段落しつつある状況を迎えて、天平宝字4年(760)の7月に寺封5千戸を、営造修理塔寺精舎分1千戸、供養三宝并常住僧分2千戸、官家修行諸仏事分2千戸に分けて使途が明確化され、以後の運営の整備が図られた点が挙げられる(「大日古」4ノ426)。また、天平勝宝8年(756)から翌年にかけては反藤原仲麻呂派の造東大寺司官人の更迭があり、天平宝字7年(763)頃からはその反動があるという、時勢に関係する構成員の変動も指摘されている^{注7)}。第1条に記された実忠が造東大寺司政へ関与したという時期は、このような転換期に相当している。ただし、僧侶の立場からの関与とはいえ、実忠は三綱として、あるいは三綱の指示としてではなく、あくまで良弁の目代として造東大寺司経営に関与している。良弁は本条文に「寺内一事已上政知」と記され、東大寺全般の監督を任されたことが知られるが、これは後世に成立する「寺家別当」の初期的なかたちとして、律令官司である造東大寺司と僧侶組織である寺家の双方を統括する特別な立場であったと指摘されている^{注8)}。実忠の活動は、このような良弁の権限に裏打ちされてのことである。

実忠と良弁の関係が実証的に示されるものとしては、実忠が石山院務所へ宛てた上院務所牒が挙げられる(「大日古」5ノ132-133)。これによると、実忠は天平宝字6年(762)3月2日に反故紙と木工浄衣料としての租布20段を舎人の秦足人に付して送り、また良弁の宣によって造営を催促させている。この3月2日の上院務所牒に対応するものとして、造石山寺所の秋季告朔解には確かに租布20段が雑工等の浄衣料として用いられたことが記されており、「大僧都御所より充て給う」とある(「大日古」16ノ241)。そのため上院務所とは、大僧都御所とも表される通り、良弁が主導した組織と考えられよう^{注9)}。ここで実忠が活動し、造東大寺司の管下にある造石山寺所へ指示したと認められる。

次に、造東大寺司の出納に関する事項については、実忠が直接的に関与したことを示す史料は見当たらないが、良弁は積極的に関与したことが知られている^{注10)}。天平宝字6年2月29日付で造東大寺司が主税寮へ宛てた未進分の備後国封戸租米の支給要請(「大日古」5ノ113)は、正月30日の良弁の状により要請したとあり、造東大寺司の経営に良弁が関与した事実を示している。天平宝字6年2月1日に良弁が造東大寺司政所に充てた牒では、「施行五経布施」は「依常例之、以二千戸封物施行之、更勿擬論」とあり(「大日古」15ノ146、15ノ348)、その書写の費用は東大寺封戸のうちの造営に関わる営造修理塔寺精舎分1千戸ではなく供養三宝并常住僧分2千戸から支出することを良弁が決済したものと考えられる。また、造石山寺所は石山寺の衆僧供養料米を借用しており^{注11)}、天平宝字6年11月30日までかかって返却したことが知られる(「大日古」

15ノ248-250)。石山寺の造営費には近江国愛智郡の封戸が充てられたが^{注12)}、この進上が滞ったために石山寺の供養料を造石山寺所へ充てたのであり、良弁による差配があった可能性が考えられる。また、この近江国愛智郡の東大寺封戸は、のちに上政所の管理となることから三綱が管理した供養料分であったと考えられており^{注13)}、封戸の用途指定に沿うならば营造修理塔寺精舎分に該当するのが自然と思われる造営費を、三綱管下の供養三宝并常住僧分をもって行っていたこととなり、この判断も良弁によるものと思われる。

以上、改めて実忠と造東大寺司の関係について考えると、上院務所は造東大寺司と直接的な所管関係にはない。そのため実忠が上院務所に仕えたことそのものは、造寺司政に関わったことを直接示しているわけではない。しかし実忠は上院務所にて良弁の指示に従って活動していたことが認められ、良弁は造寺司の経営に関与した事例が見られるため、これらの事例では造東大寺司と良弁の間に実忠が関係した可能性もありうるだろう。上記の備後国への未進分租米の請求などは第1条に記された「検収調用租米」の記載に沿うものであり、本条が示すように実忠が造東大寺司の活動であるべき運営の一端を担った蓋然性は高いと言えよう。

2.1.2 造東大寺司の造営活動と実忠

次いで、造営の具体的な活動について、造東大寺司と実忠との関係の観点から述べる。「実忠二十九ヶ条」中の多くの条文が挙げられるが、各条ずつ順に述べてゆく。

第2条「奉仕造大仏御光所事」では、国公麻呂が「此大仏御光不知奉造方」として辞退した盧舎那仏の光背を、良弁の指示を受けた実忠が諸大工等を率いて制作したと記されている。天平宝字7年(763)より宝亀2年(771)まで奉仕したとある。

この「御光所」は、正倉院文書中に散見される「光所」「大光所」「光作所」などに比定される。まず、大仏仏身の鑄造完成に近い天平勝宝4年(752)に「造大仏光所」が見え(「大日古」11ノ8)、造東大寺司次官であった佐伯今毛人の天平勝宝4年閏3月2日の宣によって、写経所が常疏すなわち五月一日経用の紙を充てたことが分かる^{注14)}。御光所は、その後しばらく間をおいた天平宝字6年(762)以降に確認され、天平宝字6年12月17日には写経所の凡紙50枚を「光作所」へ下したことが知られる(「大日古」16ノ23)。また、造石山寺所の天平宝字6年閏12月29日付の秋季告朔解案では、石山寺造営の終了後に残物となる鉄物の銚や唐鋤を「光所」^{注15)}へ充てる書き込みが見られ(「大日古」16ノ240)、実際に天平宝字7年5月6日に奈良へ送っている(「大日古」16ノ439)。

そのほか、年紀を欠きながらも天平宝字6年末から7年頃と想定される以下の史料から御光所の存在が認められる。ひとつは、大日本古文書で「借用銭并所売雜物注文」と名付けられた断簡に「光

所」の活動に関する錢1百文や米・海藻が記される（「大日古」16ノ11）。この断簡は二部大般若經の写經事業に関する会計記録の書付けと考えられる。少僧都慈訓の天平宝字6年12月16日の宣によって開始された大般若經二部の書写は、写經に必要な現物は支給されず、代わりに節部省（＝大藏省）から下された調綿を売却して物資を賄ったことが知られている^{注16)}。この奉写大般若經所の決算報告は天平宝字7年4月23日付のため（「大日古」16ノ376-382）、この断簡は天平宝字6年の12月以降の筆録と思われる^{注17)}。内容は、写經所の未収分の借用記録と見受けられ^{注18)}、御光所が写經所と錢や雑物の借用関係にあったことが窺える。断簡には「東塔所」も写經所と借用関係にあることが示されており、両所とも安都雄足が別当を務めていたため、これら所の用物を融通させたものと思われる^{注19)}。また、この断簡には「十貫実」との記載が見られ、大日本古文書では実忠と目されており、これのみでは御光所と実忠との直接的な関係は示唆できないものの、実忠は写經所や御光所と運営面において近しい関係内にあったことは確認できる。

他方は、同じく錢用記録に関わるもので、大日本古文書において二文字が未判読ながらも「錢一百貫 大光所□□」（「大日古」16ノ12）と見られる。大日本古文書では上記借用関係の記録と類似すると判断されているため、やはり天平宝字6年末から7年にかけての事項であると考えられる^{注20)}。

以上より、天平宝字6年(762)12月の時点では御光所が活動していた事実が知られる。しかし、無年紀ながら天平宝字6年と考えられる造東大寺司の4月の活動報告「造東大寺司解 申四月中作物并散役事」（「大日古」5ノ197）を見てみたい。

すなわち、造仏所の作物のひとつとして「雕穿大仏光 功一百四十七人」と挙げられており、大仏の光背作製が造仏所にて行われていたことが知られる。4月の時点で造仏所が光背作製を担っていたならば、御光所とは業務が重複するだろう。上記の経緯とあわせて考えると、御光所はすでに天平勝宝4年に存在が認められているため、この時期は活動が停滞していたという可能性も考える。そして、その後の12月以降には改めて御光所の活動が確認されるため、その12月以降の機会から実忠が関与したとも推察できなくもない。この間の詳細な事情は明らかにできないが、いずれにせよ、実忠の活動に先行して大仏光背の制作活動が確認される以上は、本来は造東大寺司が行うべき活動を実忠が担った事実を示している。

一方の国公麻呂については、造り方を知らず辞退したと記されている点に着目したい。公麻呂は、史料上は事務官人の立場として見られる場合が多いため、技術的な能力の実態については明瞭ではない。技術者としては、宝龜5年(774)10月3日の『続日本紀』の卒伝では、大仏造営について「公麻呂頗有巧思、竟成其功」と記されており、また「実忠二十九ヶ条」や「大仏殿碑文」では「大仏師」と称されている。一般に仏師とあると仏像の考思・制作者が想定されるものの、公麻呂のそのよ

うな直接的な技能が積極的に認められる史料はなく、議論が分かれる^{注21)}。

そのような公麻呂だが、当然ながら仏像の光背を製造・監督した経験も有していた。天平 19 年（747）1 月 8 日の「金光明寺造物所告朔解案」（「大日古」9 ノ 326-327）では、「造仏長官」すなわち造仏司の長官として、不空絹索観音像の光背に用いる鉄を請求している（「大日古」9 ノ 326）。また、造東大寺司の次官としてあった天平宝字 6 年でも、造仏所では上述のように「雕穿大仏光」と制作が進行しており、同じ造東大寺司管下の造香山薬師寺所でも木造の仏光の制作が見られるため、辞退の理由が「造り奉り方を知らず」とある点はやや不可解である。

実忠と公麻呂との間には確執があったことは、すでに先行研究にて指摘されているが、その背景については、公麻呂を百済系帰化二世の仏師に、実忠を新羅系帰化僧^{注22)}や印度系帰化僧^{注23)}にあて^{注22)}、出自の由来による彼らの造形感覚と技能の差とも論じられている。しかし、この天平宝字 7 年前後では公麻呂は造東大寺司の次官であり、特に、天平宝字 5 年 10 月（761）の公麻呂の造東大寺司次官就任には、大仏造立事業の残務を造仏司から造東大寺司へ引き継がせる意味が含まれていたと考えられるため^{注23)}、残務のうちでも主要な事業である光背制作が、次官の立場にある公麻呂個人の技能的観点から辞退や放棄がなされたと見なすことは問題があるだろう^{注24)}。したがって、公麻呂の技能や出自に帰因することではなく、造東大寺司と東大寺僧侶側との対比と見るのが適切であると考えられる。推論とならざるをえないが、実忠以前に先行した活動が見られるため、ある程度まで進んでいたところを改作の方針となり、公麻呂が辞退したという可能性も考える。御光所が初見される天平勝宝 4 年（752）から、「実忠二十九ヶ条」に完成されたとある宝亀 2 年（771）を造営の期間とみると、実忠が関与し始めた天平宝字 7 年（763）はその中ほどである。また改作という事態についても、良弁が完成した鐘の新規鑄造を指示したという事例が見られる（「大日古」15 ノ 141）。

第 3 条「大仏殿天井切上大光構立事」では、御光所にて製造した光背を収めるため、先に完成していた大仏殿の天井を切り上げて据え付けたことが記される。年代が記載されないが、第 2 条が記す光背が完成したという宝亀 2 年（771）か、あるいはそれ以後さほど時間を経ない時期と想定しうる。盧舎那仏像の体軀にしたがって光背を製造したが、もともと仏像の頭頂が大仏殿の天井に近かったために光背の設置に不都合が生じ、大仏師や大工を召集して、光背の切り縮めを主張する大仏師および大工と、天井の切り上げを主張する実忠との間で議論になったという。第 2 条にある実忠が光背制作に関与し始めたという天平宝字 7 年（763）にはすでに仏像と大仏殿は完成しているため、光背高さの設定を誤ったとも考えられるが、光背を切り縮めると仏像本体との釣り合いがとれないとも本条では記されているので、寸法は適切と認められていたことになる。第 2 条と第 3 条ともに大工が登場するが、第 2 条では大工は光背制作に関与し、第 3 条の大工はその

光背の寸法修正を主張しているため、両名は別人であったと考えることが自然であろう。いずれにせよ、この第3条に登場する大工は、大仏殿の建築を担当したために招集されて天井切り上げに反対したと考えられるが、仏像造作が本務たる大仏師も、仏身と一對となる光背の方の修正を主張している点は、実忠が大仏師の指示のもとに光背を制作していた事実を示している。光背を担当した実忠が、大仏殿を担当した大工と大仏の仏身を担当した大仏師の双方と対峙しつつ独立した主張を通したのであり、造営の対象物や組織の間に実忠が関与していった様子が窺える。

第4条「奉造建大仏殿副柱事」では、宝亀2年(771)に大仏殿の五平の添柱を製造し、構築を成功させたことが記される。実忠自身が杣入りして、計画と材の作りだしを行い、殿内にて据え付けを完了したという。佐伯今毛人や長上大工等が造営を辞したとあるが、その理由までは示されておらず、また副柱が必要とされた理由についても記されていない^{注26)}。前述の大仏光背を殿内に構築した第3条は同時期に当たるため、天井の切り上げの件で大工と見解が対立したことが影響している可能性もあるが、まずは実忠と佐伯今毛人や造東大寺司の工匠の姿勢が対比的に記される点を指摘したい。

第7条「構上東塔露盤事」では、諸工匠が七重東塔への相輪の据え付けを、高所でありかつ重量が大きいために辞退したことに対し、実忠が自ら塔に登って施工方法を考案し、「諸工夫等」を催して据え付けを完了したと記される。相輪は、造東大寺司管下の「鑄所」にて各部材が製作されており、史料が残る天平宝字6年(762)2月から4月にかけて着々と進行していることが確認できる(「大日古」5ノ125、188-189、198-199)。また塔の造営を担当した組織として、回廊などを含む東塔

表1 「実忠二十九ヶ条」における造東大寺司と実忠の活動比較

条文	記述内容の時期	良弁・早良親王	造東大寺司： 四等官	大工	長上工	上番工	役夫
第1条	良弁目代・奉仕造寺司政 天平宝字4年(760) ～天平神護2年(766)	僧正良弁賢大法師 目代	造寺官人 ⇒実忠				
第2条	奉造建大仏御光所 天平宝字7年(763) ～宝亀2年(771)	僧正賢大法師 指示	大仏師從四位下国中連公麻呂 ⇒実忠	諸大工等を率いる			
第3条	大仏殿天井切上・大光構立 宝亀2年(771)か		大仏師大工等 ⇒実忠				
第4条	奉造建大仏殿副柱 宝亀2年(771)	親王禪師并僧正和尚 指示	造寺司左大弁佐伯宿祢并長上大工等 ⇒実忠	諸匠夫等を率いる			
第7条	構上東塔露盤 天平宝字8年(764)	僧正 指示	諸工匠等 ⇒実忠	工夫等を催す			
第8条	奉造東西少塔殿 神護景雲年中(767-770)		大工等 ⇒実忠				
第13条	奉仕寺家造瓦別当 宝亀11年(780) ～延暦元年(782)	親王禪師 指示	(造瓦所) ⇒実忠				

- ※ 表中において、上段は登場する人物、下段は実忠が関係する行為を表す。「⇒実忠」は、実忠がその位置の上段の人物の職掌を担ったことを示す。
- ※ 第2条および第3条における「大仏師」は官職名であるか検討を要するが、まずは国公麻呂が次官を務めたことを参考に、表中では上記の位置とした。本論第3章第1節を参照のこと。
- ※ 第4条における「造寺司」は、佐伯今毛人が造東大寺司長官や次官への任官した経験があるため、表中では上記の位置とした。ただし、「造寺司」は造東大寺司を指すか検討を要する。本論3.1節を参照のこと。

院全般の造営を担ったと考えられる「東塔所」の存在も確認される。それにも関わらず据え付けが出来ないとある点は計画性を欠いており不可解である。この条文も第3条と同様に職能に関係し、「東塔所」による本部工事である塔身の構築と、「鑄所」の鑄造による相輪の製造との間になんらかの齟齬があり、その間に実忠が関与した可能性もある。いずれにせよ、この事績も工匠がなしえなかった造営を実忠が完遂したことが示されている。

第12条「奉造立塔一基」にある塔は、『東大寺要録』巻第六末寺章第九の新薬師寺の条に「実忠和尚西野建_二石塔_一」とも見られ、いずれも現存する頭塔に比定される。頭塔は、発掘調査より下層遺構の上に後年に上層が築かれたことが判明しており、さらに下層頭塔の石積みには不備が見られるため、報告書ではその補正として上層が構築された可能性も指摘されている^{注27)}。造営が二段階に渡る点からは、異なる造営主体や時期が想定され、それが造東大寺司と実忠に当たる可能性もある^{注28)}。しかし、条文中にもそのような対比は記載されていないこともあるので、ここでは可能性の提示のみにとどめておきたい。

第13条「奉仕寺家造瓦別当事」は、造東大寺司が生産する瓦の質が粗悪だったため^{注29)}、実忠が山城国相楽郡福宏村にて良質の土を見出し^{注30)}、より耐久性に優れた瓦を焼成したとある。瓦の製造は造東大寺司管下の造瓦所が担い、俗人別当や将領、瓦工の存在が確認できるが（「大日古」4ノ372-373、5ノ127-128、191-192、378-379）、これが批判の対象とされたのだろう。「寺家造瓦別当」については、木工所や造仏所などの造東大寺司管下の所では一般に造寺司官人が別当を兼任したため^{注31)}、東大寺僧が造東大寺司造瓦所の別当に就任したとすると特異であり、疑問が残る^{注32)}。また「寺家」との記載からは、官の造瓦所とは別に東大寺が経営する造瓦組織も想定でき、この別当を実忠が務めた可能性も考えられる。いずれにせよ、本条にある造瓦活動の具体は不明ながらも、実忠の活動が造寺司の不備を補う点が示されていることは認められよう。

2.1.3 造東大寺司の官人・工人与実忠

以上の通り、造東大寺司が登場する条文では、否定的な対象として造東大寺司が記述されている。さらに否定されるにとどまらず、本来ならば造東大寺司の事務官や技術者（工人）の職分であるべき活動を実忠が行ったことが記されている。この関係を二つの視点からまとめたものが表1である。ひとつは、造東大寺司の事務官人や工人の「大工（少工）-長上工-上番工-役夫」という工匠階梯のなかで、実忠が果たした役割・立場が造東大寺司の職制にどう相応するかという点である。同時に、このような組織と実忠の立場の中で、実忠個人が具体的に発揮した能力の種類点である。

条文の相互比較の結果、まずは実忠の果たした役割や技能の範囲が、それぞれ異なりながらも多岐にわたる点が認められる。経営、計画、施工、杣入りなど、各造営の状況に合わせて対応し

えたことが分かる。また、工人との関係に対しては、工匠階梯に則した整合性が認められる。第2条の光背作成では仏師が否定されるが、その代わり建築木工である「諸大工等」を率いたとあり、第3条の光背設置の是非の検討では、据え付けの際の活動や工人は直接は記していないため、主たる関心がその方針決定にあり、同時にそれが大仏師・大工の職掌に含まれることも知られる。第4条では、辞退した大工や長上より工匠階梯が下位にあたる匠夫を率い、大仏殿の添柱の設置計画から、柱材の製作、施工にいたる補修工事を担う。第7条では、相輪自体の製作には関与していないものの、辞退したという工匠より下位の工夫らを率いて据え付けを完了しており、特に「催す」との表現から将領の職掌の性格も窺える^{注33)}。このような関係の傾向から見て、第8条の小塔殿の様の作製に関しては、第3条と類似して、小塔殿建築の方針の決定が主眼にあると言える。また工匠階梯の点からは、具体的な形姿をもつ小塔殿の様の作成や実施施工などは、大工以下の諸工人が従ったとも言えよう。

以上、造東大寺司と実忠の関係について述べたが、造営活動の運営が官から寺家へと移行する時期の情勢に合致するものとして、事務官や工匠の職能が、僧侶である実忠によってなされた点を見ることができる。これは「実忠二十九ヶ条」に通底する特徴として、まずは実忠の造営に関する姿勢を挙げておきたい。

2.2 造東大寺所と実忠

東大寺の建築造営を担った組織は、縮小する造営事業に対応するかたちで、造東大寺司から造東大寺所へ、さらに東大寺修理所へと変遷する^{注34)}。実忠は、その造東大寺司と造東大寺所の双方に関与したことが知られ、前節に続いて以下では実忠と造東大寺所との関係について検討する。

造東大寺司は『続日本紀』延暦8年(789)3月戊午条が示す通り^(16日)廃止を迎えるが、造東大寺所は延暦15年にはその存在が確認できるため(『平安遺文』14号文書。以下「平」14のように表す)、後継機関と見られている。特に営造修理塔寺精舎分1千戸は、1百戸が新薬師寺修理料として割かれるものの^{注35)}、残りの9百戸が造東大寺所管理へと引き継がれたことが認められ^{注36)}、また、造東大寺所は東大寺以外の造営も担当するなど(「平」30)、やはり官司としての造東大寺司の側面を残した組織である。ただし、造東大寺所の主導は官から寺家へと移ることが知られており、造東大寺所には四等官は置かれず、管理にあたる知事は東大寺僧から選出される。

これら造東大寺司と造東大寺所という東大寺造営組織は、両組織が異なった性格を持つ以上、対する実忠の態度にも差が生じる。

まず運営管理の側面については、第19条に実忠は造東大寺所の知事に就任したとあるが、実際に知事職にある実忠の署名が関係文書に認められる。延暦23年(804)に山城国相楽郡にあった「造

東大寺地」の相換文書には三綱・別当・他の知事僧とともに実忠の自署が見られるが（「平」25）、僧位は大法師位にあり知事僧の中でも首班的な存在であったことが窺える。大同2年（807）には実忠は「上座兼知事」にあり（「平」32）、三綱と造寺所の双方とも運営する任にあった。知事を務めた実忠は、後の大同4年（809）には「修理別当」にあることが確認されるが（「平」25）、修理別当の職名は本史料以外には見当たらないため、造営に造詣の深い実忠が特別に就いた職であったと推察される^{注37)}。また、この時期は寺院別当制の確立に向かう過渡期に相当するが、いわゆる寺家別当である「別当」修哲と並んで「修理別当」実忠が存在したことから、実忠が関与した時期の造東大寺所は完全に三綱の運営下にあるのではなく、実忠の下である程度は独立した活動が認められていたと考えられる。

もっとも、対外関係などの正式な場面においては造東大寺所は三綱や別当の下にあったと考えられ、上述の造東大寺司から引き継いだ「造東大寺地」の相換文書においても東大寺三綱や別当の署名が見られ、監督されたことが分かる。また、実忠が造東大寺所の知事であった平城朝の初期に、東大寺に宛てられた太政官牒からも窺える。大同元年（806）には「一事已上聴使檢校」として檢使が派遣されたが（「平」28）、その中にはかつての造東大寺司長官であった吉備泉や造西寺司次官兼木工寮少工の秦都伎麻呂が含まれており、造寺に関する檢校も行われたはずであるが、「太政官牒東大寺三綱」と三綱のみに宛てられている。また、大同2年（807）には工人の出向に関する太政官牒が見られ、御在所の修理のための木工6人の進上や（「平」30）、東大寺大仏修理のために造東寺司から送られた仕丁12名を返送させる指示があったが（「平」31）、いずれも造営に関わることながら三綱に宛てられている。しかし、先の造東大寺所が管理した寺地の相換では、別当や三綱のみでなく知事僧の署名も含まれており、また後世には三綱政所＝「上司」と造東大寺所＝「下司」が並立する点や^{注38)}、承和5年（838）の知事補任の僧綱牒では直接造東大寺所に宛てられている点など（「平」4442）、造寺所が寺内において独立した側面も有する事実を示している^{注39)}。

次いで、造東大寺所の設置時期における実忠の具体的な造営活動について取り上げる。

第10条の北大門の造立では、延暦20年（801）に寺内に散在した材木を利用して完成させたことが記されている。「東大寺山界四至図」では、他面の門や築地と同様の描写方法にて北築地や門の位置が描かれ、「東大寺寺中寺外惣絵図」では五却院の向かいに三間二間の北大門跡が描かれている^{注40)}。発掘調査では、北面築地や北大門の遺構そのものは未確認ながら、北大門近接地から出土した瓦からは平安時代前期の造営が裏付けられるとされている^{注41)}。また材木に関しては、実際に東大寺内には余剰の材木があったことを示す事例がある。年代は遡るが、上述の通り天平宝字6年（762）には石山寺造営の残材を奈良へ送っており、また延暦24年（805）4月24日に東大寺に宛てられた太政官牒は、某所三重塔の造営に使用するために東大寺内にあった雑材を検録すると

あるため(「平」26)^{注42)}、残材が他の造営へ融通された可能性は高い。特に後者の太政官牒には「伝聞、儲置雑材多在彼寺」とあるが、本条と比較的年代も近い。

第9条では、西の大垣や中大門、南大垣について、延暦23年(804)に検校を加え固め造ると記される。『日本後紀』延暦15年(796)8月甲子条に「大和国山崩水溢、東大寺牆垣倒頽」とあるため、それに対応するものと考えられる。西面の発掘調査では築地の基礎地業が確認されており^{注43)}、特に転害門南の焼門(西面中門)との中間地点では築地基礎部の築土や堀込地業が認められ、この築地の基礎地業は実忠によるものと推察されている^{注44)}。そのほか、食堂の前の寺域の土木造成に関する第14・15条についても、地形の測量から実際に土地造成や河川流路の改変があったことが指摘されており、実忠によるものと考えることができる^{注45)}。

以上、造東大寺所に関係する事績を見たが、これら条文の大きな特徴として、直接的に組織や人物が記載されていない点が挙げられる。すなわち、「実忠二十九ヶ条」のうち造東大寺司の存続する時期では、造東大寺司の官人や工人たちを否定的な存在として挙げ、活動内容を比較する記述が多く見られたが、造東大寺所の時期の事績ではそのような比較はなくなる。これより、実忠の造営上占めた立場とは、造東大寺所では知事に補任されその構成員として活動しえたことに対し、造東大寺司に対する実忠の関与は、官司と僧侶という関係から、あくまで組織外からのものであったと考えられる。

3. 特定の人物と実忠

「実忠二十九ヶ条」の造営に関する条文は、造東大寺司や造東大寺所という造営組織と実忠との関係のみで記されているわけではない。特に、具体的な名が挙げられている国公麻呂と佐伯今毛人、また良弁と早良親王といった人物との影響関係があったことが窺える。以下はこれら人物たちの造営への関与の仕方について述べる。

3.1 「実忠二十九ヶ条」における国公麻呂と佐伯今毛人

「実忠二十九ヶ条」に記された国公麻呂と佐伯今毛人の造営への関わり方についてはすでに前章において述べた。ここで改めて取り上げる理由は、両人とも造東大寺司に長らく奉職しながらも、それぞれが登場する条文の時点では造東大寺司を離任していたと考えられることによる。その場合、この両人と実忠との関係は前章で述べた造東大寺司と実忠の関係のみでは不足することとなる。

国公麻呂は、「実忠二十九ヶ条」の第2条に「大仏師従四位下国中連公麿」と記されている。官位は、天平神護3年(767)2月4日に正五位下から従四位下へ越階して昇叙となり^{注46)}、これは第2条の

期間中(天平宝字7年・763～宝亀2年・771)に当たる。また官職としては、天平宝字5年10月(761)に造東大寺司次官に任ぜられ、天平神護3年7月13日にも次官として見えるが(「大日古」5ノ668)、翌月の8月29日(8月16日に神護景雲元年へ改元)には阿部毛人が次官に任じられているため、その間に離任したと見られる。なお、宝亀5年(774)10月3日の『続日本紀』の卒伝には「散位従四位下」とある。したがって、第2条の指す光背制作を開始した天平宝字7年では正五位下・造東大寺司次官であったが、完了したという宝亀2年の時点では従四位下でありつつ造東大寺司を離れており、第2条の公麻呂の職位の記載は宝亀2年の状況と合致していることが分かる。そのため、「大仏師」も実際の呼称と考えられ、正式な官職名ではなく公麻呂に対する尊称と考えられる^{注47)}。これにより、続く第3条に登場する「大仏師」も公麻呂を指すと想定しうる。

次いで、佐伯今毛人は第4条に「造寺司左大弁佐伯宿禰」として登場する。今毛人は長らく造東大寺司次官を務めた後、天平勝宝7年(755)1月に長官となったことを述べたが、天平勝宝9年(757・天平宝字元年)3月には長官であるものの(「大日古」13ノ217)、同年閏8月には坂上忌寸犬養が長官にあるため(「大日古」25ノ228)、その間に離任している。また天平宝字7年(763)1月9日に長官に再任するが、藤原宿奈麻呂(良継)の密謀により解官となり、4月には市原王が就任している。その後、太宰府への赴任などをへて、神護景雲元年(767)2月に造西大寺司の長官に就任し、遣唐大使に任ぜられる宝亀6年(775)6月19日まではその任にいたと考えられる。また左大弁については、神護景雲元年8月29日に任命されているが、宝亀8年10月に左大弁は参議藤原是公が兼任することとなったので、この時までには外れていたのだろう。なお、第4条の宝亀2年に比較的近い時期である宝亀3年8月28日時点での官職は「左大弁兼造西大寺司長官播磨守」であった(「大日古」4ノ197)。したがって第4条の宝亀2年の時点では左大弁の任にあったと考えられるため、「実忠二十九ヶ条」では正確に記録されていることとなる。このような状況より、第4条の佐伯今毛人の官職名として記されている「造寺司」も、前後の時期に任官が認められる造西大寺司長官を指し、その任にありつつ東大寺へ派遣されて検討に参画したと考えられる^{注48)}。

これら両名が「実忠二十九ヶ条」中に特定の個人として挙げられるのは、造営に深く携わってきた経験によるためと考えられよう。その経験を有する両名が否定的に記されることは、組織上、職制上の側面のみでなく、実状、見識、技能などの観点から、実忠の造詣の深さが強調されることとなる。いずれにせよ、官制上は造東大寺司から離れたと考えられる国公麻呂や佐伯今毛人が造営に関与していることは、造東大寺司や三綱以下の寺家だけではない枠組みで造営が進められたことを示している。「実忠二十九ヶ条」に大工や長上と記されている工匠たちも本属が造東大寺司とは限らず、散位や木工寮、ほかの造寺司など、造東大寺司以外から参画していた者がいたこ

とも考えうる^{注49)}。

3.2 「実忠二十九ヶ条」における良弁と早良親王

その一方で、「僧正」と記された東大寺創立に功績のある良弁と、良弁が入滅に際して後事を託したとされる「親王禅師」とある早良親王もまた名が挙げられ、実忠に対して指示などを下している。

良弁は、天平勝宝3年(751)4月に少僧都として見え、天平勝宝8年5月には看病禅師の功として大僧都に就任している。僧正就任の時期については諸説あり、『僧綱補任』では宝亀2年(771)とし、『東大寺要録』や『七大寺年表』では宝亀4年(773)とされるが、岸俊男氏は天平宝字8年(764)の9月11日から13日の間と導かれている^{注50)}。なお、『続日本紀』における宝亀4年閏11月24日の入滅時の記載では僧正と記される。いずれであったとしても「実忠二十九ヶ条」に登場する良弁は、僧正就任以前の記事においても「僧正」と記されていることとなる。しかし、良弁が三綱や造東大寺司を監督してひとり東大寺を代表するという立場に就きえたのは、僧綱位のような令制上の職務によるものではない。公的に示されたかたちとしては第1条の通り寺務統括の勅が挙げられるが、それまでの寺内経営や教学振興の手腕に加えて、聖武朝以来の天皇家との密接な関係に基づく結果であると考えられる^{注51)}。

表2 「実忠二十九ヶ条」における造営関係

類	条文		先行活動			契機			実忠活動		
			否定対象	造 寺 司	結果	関与	良弁	親王	僧職等	実行	
第1類	第1条	良弁目代・奉仕造寺司政	造東大寺司官人	◎		良弁	◎	○	良弁目代		
	第2条	奉仕造大仏御光所	国公麻呂	◎	辞退	良弁	◎	○	良弁目代・少鎮	諸大工等を率いる	
	第4条	奉造建大仏殿副柱	佐伯今毛人・大工長上	◎	辞退	良弁・親王	◎	◎	少鎮	諸匠夫等を率いる	
	第7条	構上東塔露盤	諸工匠	◎	辞退	良弁	◎	○	良弁目代	工夫等を催す	
	第13条	奉仕寺家造瓦別当	造東大寺司造瓦所	◎	悪	早良親王	×	◎	造瓦別当		
第2類	第11条	堤作池		○		良弁	◎	○	良弁目代		
	第12条	奉造立塔		○		良弁	◎	○	少鎮		
	第25条	奉立西大寺御齋会廻幢		○		勅旨	○	○	少鎮	東大寺工等を率いる	
第3類	第6条	大仏殿歩廊等懸幡木造		×	か		×	×	か	造寺所知事	
	第9条	固造西大垣中・大門南大垣		×			×	×		造寺所知事	
	第10条	造立北大門		×			×	×		造寺所知事	
	第14条	填固食堂前庭		×			×	×		造寺所知事	
	第15条	食堂前谷治水		×			×	×		造寺所知事	
	第19条	奉仕造寺司知事政		×			×	×		造寺所知事	
	第3条	大仏殿天井切上・大光構立	大仏師・大工	◎	商量	(第2条の継続)	○	か	○	少鎮	朝廷へ奏聞
	第5条	大仏御背等修理	勅旨・僧綱・諸大寺三綱・老宿大法師	×	商量	(独策)	×	×	×	造寺所知事	工匠等を率いる、様を造る
	第8条	奉造東西少塔殿	大工	◎	醜		○	○	○	少鎮	様を造る
	第16条	奉仕少鎮政・檢校造寺		○			○	○	○	少鎮	内裏へ奏聞し一切経を奉請

※ 表中の記号は以下を示す。◎ : 条文の年代の時点で存続・生存し、かつ条文中に記載される。
 × : 条文の年代の時点で存続・生存しない。
 ○ : 条文の年代の時点で存続・生存するが、条文中には記載されない。

早良親王は、「実忠二十九ヶ条」にて「親王禅師」と表される通り僧籍にある^{注52)}。「大安寺崇道天皇御院八嶋両処記文」^{注53)} および『東大寺要録』巻第四諸院章の絹索院条によると、生年11の時に出家し、はじめ東大寺の等定を師として絹索院に寄住したが、神護景雲2年(768)かその翌年に大安寺東院に移住したとある^{注54)}。したがって、「実忠二十九ヶ条」に登場する早良親王はすでに東大寺を離れていたことが知られる。そのような早良親王が東大寺全体を導きえたことの令制上の根拠は明瞭ではないが、良弁から後事を託されたと伝えられ^{注55)}、親王という尊貴性と、さらに光仁朝側と東大寺側の双方から折衝的役割が期待されての立場と認めることができる^{注56)}。

以上の両名は、俗官である造東大寺司のみならず僧侶組織である東大寺三綱を超えて東大寺運営を領導したが、良弁と早良親王ともに時の朝廷との深いつながりが認められる。

4. 実忠による造営参画の契機

以上、「実忠二十九ヶ条」の造営関係条文について、造営関係者ごとに分けて、記載内容の検証とともに状況を復原した。その過程にて、造営事業の有無、その年代、関係者の関与の妥当性や職位など、検証した事項については明らかな矛盾を指摘することができず、かえって他史料との照合がとれる点が多いことが判明したと言えよう^{注57)}。本章ではこれらの関係者の「実忠二十九ヶ条」中での記載のされ方を横断して整理し、実忠との関係性を考察する^{注58)}。

4.1 造営関係条文における由来・契機の傾向と分類

牧伸行氏は「東大寺の中で実忠が造営事業を行えたのは、果たして実忠の技術が優れていたということもあるが、むしろ東大寺内の指導者との繋がりの方が重要な要因といえるのではないだろうか」と述べられるが^{注59)}、実忠が具体的な造営の企画・設計・施工に関与することのできた契機は、先述の通り良弁や早良親王による影響が見られるほか、第25条のように勅旨によるものもある。そこで、前章までに取り上げてきた組織および人物と実忠との関係について、造営関連の条文を対象として表2に示す。表では、実忠が造営に参画するに至る契機があるか否か、および造東大寺司の存続期間か否か、という点から条文の分類を行った。その結果、大きく3つのまとまりが見られた。第1類は、実忠以前に他者による活動があったが解決できず、否定的に描かれ、なんらかの契機があつて実忠が参画したものであり、第2類は、実忠以前の他者による活動が記されていないが、契機があつて実忠が参画したもの、第3類は、実忠以前の活動と契機ともに記載がないものである。

注目される点は、契機の記載の有無と、造東大寺司の存廃との関係であり、組み合わせとしては本来は4通りあるはずが、契機の記載がある条文は造東大寺司は存続しており(第1類と第2類)、契機の記載がない条文では、後述する例外的な第3、5、8、16条を除いて、造東大寺司が

廃絶後の造東大寺所の時代（第3類）という、2通りにまとまる傾向が見られる。第1類の条文では、先行する活動とは造東大寺司であり、必ず否定的に描かれたうえで実忠が登場することを第2章で述べたが、その際に良弁や早良親王の契機によって実忠が関与できたことが記されている。第2類の条文では、造東大寺司は直接は記載されていないものの存続していた期間に相当しており、実忠が参画するには、やはり良弁や早良親王によって契機が与えられたことを示す。第3類は、良弁および早良親王の没後のため両者による契機はないことは当然であるが、造東大寺司の廃止後であり、実忠は造寺所知事に就任してその職務として関与したため、第三者による契機は必要なかったと考えられる。第6条の懸幡の木作りは「延暦年中」と書かれるが、このような記述の傾向から判断すると第3類に含まれる条文と考えられ、造東大寺司廃止後の造東大寺所の時代で、かつ実忠が知事に就任していた延暦後年と推察できる。

このように実忠の造営事績を示した条文群は、造営の関係性に基づく類型が存在していると認められよう。特に、造東大寺司の存続した時代の造営は、必ず契機をうけてから実忠が参画したという点が重要であり、実忠は必ずしも最初から造東大寺司を領導して造営したわけではなく、造営を成功させる職能・技術などを有していたが、第三者による契機があつてはじめて具体的な企画・設計・施工について関与したことを示している。

4.2 造営関係条文における特殊な由来・契機

次いで、前節の造営関係条文の傾向分類にて取り上げなかった第3、5、8、16条について述べる。

第3条は、大仏の光背を大仏殿内に構築する造営であり、第2条の光背自体の制作から継続する活動であるため、実忠が携わることは自然なこととして特別な契機は不要であったと考えられる。かえって大仏師や大工が招集されており、第8条でいうところの大工が先に様を作製しその後実忠が登場する状況とは逆である。光背の殿内への構築は結果的には実忠の意見が通るが、それは「朝廷」へ奏聞を経ることとなされた。すなわち、第三者による関与としては奏上による裁定を仰いだこととなる。良弁ならびに早良親王は本条文中には記載されていないが、ほぼ同時期の第4条の副柱建立では両名とも登場するため、検討の場から外れていたとは考えがたい。奏聞についても、後述の第16条のような「内裏」に奏聞して一切経を奉請したような直接的な繋がりではなく、僧綱や勅使を通じて太政官を経るなどの式に則ったことが考えられ、その過程においては東大寺を監督した良弁や早良親王は関与しただろう。しかし「実忠二十九ヶ条」の記載において両名は記されないのは、あくまで最終的な裁定を下した朝廷こそが優先されたためと考えられる。

第5条は大仏の補修に関する事績であり、朝廷からの勅使に加え、僧綱、諸大寺三綱、宿老大法師などが3年を経ても解決できなかったところ、延暦20年(801)に実忠が独自に工匠を率いて

伊賀の杣に入り、様を作製して材の荒削りを指示し、翌々年にはその材を寺に運上して様にしたがって完了させたと記される^{注60)}。前節で挙げた条文分類の第2類に近いが、造東大寺所の時代ながら否定される対象が登場する点が異なる。否定対象があるのは、大仏の補修が造東大寺所の職務の範疇では収まらず、造寺所以外の関係者が参画する大規模な造営であったからであろう。実忠は、造寺所知事という立場からのみではなく、すでに三綱就任も経験し、かつ過去に東大寺造営を手がけてきた僧侶として、この検討に加わっていたと考えられるが、決して実忠に委任されたわけではなく、かつての良弁や早良親王のような推挙者はいなかったことを表している。したがって、実忠が造営を担うことができたのは、様が建議にかけられて認可を得たという過程が想定される。この場合の様は、具体的な実施施工に繋がる資料であることは明らかであり^{注61)}、事前に勅使をはじめとする朝廷の裁定を経て造営が進められたと考えられる。

第16条では、実忠は神護景雲元年(767)から宝亀4年(773)にかけて東大寺の少鎮に就任し造寺を検校したとあり、条文の具体的な内容としては、内裏に奏して一切経一部を奉請し、春秋二節に官家功德分封物を利用して読経を行ったことが記されている。鎮は三綱と変わらず寺務運営の職務を担ったと考えられるが、文書の署名の位置から見て三綱より上位の僧職と見られ、佐久間氏は別当格ともいいうると評している^{注62)}。一方の「検校造寺」については、条文中に造東大寺司への関与や造営活動が直接は見られないものの、東大寺においては神護景雲4年(宝亀元年・770)から奉写一切経所にて先一部一切経の書写が認められ^{注63)}、文書や帳簿に少鎮としての実忠の署名が多く見られるため、この写経事業の運営を指すものと考えられる^{注64)}。また、実忠が奉請したという一切経は、五月一日経に比定する見解^{注65)}と、称徳朝の先一部一切経とする見解^{注66)}が見られるが、本条文は、鎮への就任・一切経の奉請・写経事業の運営という複数の事績が合わさったものであり、第20条にて実忠が宮禅師であったことから示される通り、いずれも称徳朝との深い繋がりの上に活動した状況が表れたものであろう。特に聖武天皇以来の家産的性格を帯びた官家功德分封物を充てて一切経読経会が施行される点は、称徳天皇との関係による^{注67)}。

以上に続き、最後に第8条を分析する。この条文は、否定対象があるにも関わらず契機が記載されていないという特徴があり、契機が不必要のため記載がないと考えられる第3条を除くと、造営関係条文では唯一の例と言える。大工が否定されてその代わりに実忠が参画したことが明記されており、ほかの条文の傾向から考慮すると、何らかの理由や契機があったとしか考えられない。また、良弁と早良親王がいたにも関わらず、文中に登場しないという特徴も有する。これは第3、16、25条と似た状況である。

この第8条の特徴とほかの条文の事例とを照合すると、大工の小塔殿様を否定し、実忠に代え、その改めた様を裁可したのは、いずれも「内裏」「朝廷」と「実忠二十九ヶ条」中に見られる称徳

天皇や道鏡の関与であったと推定できる。そもそも小塔殿造営の発願自体が勅によるものであったため、ごく自然とも考えられようが、第3条において方針が紛糾した際には朝廷に奏聞して裁定され、第16条では称徳天皇と実忠との関連の深さが示され、第25条も当初から実忠に勅が下されており、いずれも実忠と朝廷・内裏の関係が認められる。第25条は西大寺の「御齋会」に使用する幡の軸木を勅によって作るという事績であり、恵美押勝乱の平定祈願に端を発する称徳朝の西大寺造営に実忠が勅によって参画した点は、朝廷との結び付きを示す事例である。またこの際に実忠は「東大寺工」を率いたとあるが、これは造東大寺司の工人たちを示すと考えられる。西大寺の造営は当時佐伯今毛人が長官を務めていた造西大寺司が担ったはずだが、そこに別組織である造東大寺司の工人が参画するには、造寺司が令外官である以上、勅旨や太政官牒を受けてのことだろう。いずれにせよ、大工や実忠のものを問わず小塔殿の様の作製指示や判断には称徳天皇が関与したという点とともに、小塔殿の造営は内裏・朝廷の場において様を通じて是非が検討された点が窺え、また実忠の様が採用された点は、背景として称徳朝における積極的な崇仏方針の姿勢を認めることができるだろう。

もっとも、実忠が関係を深めた朝廷は必ずしも称徳天皇のみに限る話でない。第26条の「近江国志賀山寺奉行功德事」では宝亀5年(774)から継続して「近江国大津宮御宇天皇」を奉るために読経悔過を奉仕したというものであり、天智天皇への冥福祈祷を行っている。光仁朝は天武系皇統から天智系への切り替わりであり、桓武朝においても梵釈寺が創建されるように近江大津を重視する姿勢が続くため、この際の実忠の行動は光仁・桓武朝に沿ったものである点は良く知られている。しかし、これまで述べてきたとおり、実忠の造営活動の多くは称徳朝に見られる点が事績から明瞭である。

5. まとめ

以上、「実忠二十九ヶ条」における造営関係条文から記載内容の検証と状況の復原を進め、実忠の造営上の立場と活動内容について検討を行い、以下の点を明らかにした。

まず、実忠が行った具体的な造営活動の行為としては、財政改善などの造営組織の経営、造営方針の策定、実施計画、施工、修繕などを認めることができ、建築生産に関わる段階・工程の多くに渡っている点が指摘できる。このように多様な活動からは、実忠個人は造営に関する知見や能力を有していたと見なしてよい。

しかし、そのような個人的能力のみによって実忠による造営遂行が説明できるわけではなく、実忠の活動には関連組織や人物との相互関係が影響している点を示した。東大寺に造寺所が置かれた時期には、その構成員である知事僧として造営に参画したが、造東大寺司の時期では、実忠

は官司の構成員には当てはまらないため、造営への参画や遂行には、良弁や早良親王のほか、称徳天皇や光仁天皇、桓武天皇の朝廷や内裏による契機を必要としたことを対比的に示すことができる。すなわち、実忠の造営参画および遂行には、いずれも実忠の立場を裏付ける根拠が存在した点を認めることができる。

そして、実忠とそれら組織・人物とが互いに関係する具体的活動として、造営方針に関しては、造営遂行の指示を受ける、関係者間で議論する、奏聞のうえ判断を仰ぐなどが挙げられ、事前計画に関しては、様の作成と提出、また実施施工としては、工人を率いる、杣入りのうえ山作りを行う、露盤据え付けのために塔に登るなどの行為を見ることができる。実忠は、工程とそれに対応する関係者に則して、状況に応じた活動形態を取ることで造営を遂行したと考えられる。

参考文献

- 1) 筒井英俊校訂『東大寺要録』、国書刊行会、1971.12
- 2) 筒井寛秀・杉山二郎「実忠和尚覚書 - 造仏所研究のうち(二)-」、『美術史』49、1963.6
- 3) 清水善三「平安時代初期における工人組織についての一考察」、『南都仏教』19、1966.12
- 4) 森蘊「実忠和尚の業績」、『奈良を測る』、学生社、1971.9
- 5) 松原弘宣「実忠和尚小論 - 東大寺権別当二十九ヶ条を中心にして -」、『続日本紀研究』177、1975.2
- 6) 佐久間竜「実忠」、『日本古代僧伝の研究』、吉川弘文館、1983.4、初出 1975.7
- 7) 山岸常人「悔過会と仏堂（東大寺二月堂）」第1節、『中世寺院社会と仏堂』、塙書房、1990.2、初出 1980.12
- 8) 森明彦「奈良朝末期の奉写一切経群と東大寺実忠」、『正倉院文書研究』7、吉川弘文館、2001.11
- 9) 牧伸行「東大寺と実忠」、『日本古代の僧侶と寺院』、法蔵館、2011.4

注

- 注1) 『東大寺要録』は東大寺所蔵本を底本とした参考文献1)に依った。
- 注2) 「実忠二十九ヶ条」に関係する先行研究や史料批判などは、前稿「実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式 - 『東大寺権別当実忠二十九ヶ条事』における小塔殿の様の研究 その1-」(『日本建築学会計画系論文集』685、2013.3)においても示した。本稿では前稿にて課題とした小塔殿造営における実忠の活動形態も併せて考察している。
- 注3) 造東大寺司の工匠は、以下に詳しい。 清水善三「造東大寺司における工人組織について」、『仏教芸術』55、1964.8 / 岡藤良敬「造寺司木工について」、竹内理三編『九州史研究』、御茶の水書房、1968.6 / 浅香年木「律令期の官営工房とその基盤」、『日本古代手工業史の研究』、法政大学出版局、1971.3、初出 1958.12
- 注4) 国公麻呂の先行研究のうち、特に本稿に関わるものを以下に挙げる。小林剛「国中連公麻呂 - 日本彫刻作家研究の一節 -」、『文化史論叢』、奈良国立文化財研究所、1955.12 / 浅香年木「国中連公麻呂に関する一考察」、『続日本紀研究』38、1957.1 / 田中嗣人「造東大寺司造仏所と国中連公麻呂」、『日本古代仏師の研究』、吉川弘文館、1983.8、初出 1978.5 / 松山鐵夫「国中連公麻呂」、前田泰次他『東大寺大仏の研究(解説篇)』第1部第1章第7節、岩波書店、1997.2 / 根立研介「国中連公麻呂考」、『正倉院文書研究』8、2002.11。
- 注5) 山下有美氏は、公麻呂の造東大寺司次官への就任は造仏司の停止を示すことを指摘され、さらに風間

氏は、大仏の進捗状況みならず阿弥陀浄土院の造営完了にも拠ることを指摘されている。山下有美「写経機構の変遷」第2節（『正倉院文書と写経所の研究』、吉川弘文館、1999.1、初出1994.11）／風間亜紀子「阿弥陀浄土院造営機構の再検討」（『ヒストリア』207、2007.11）

- 注5) 本稿では、佐伯今毛人に関しては、角田文衛『佐伯今毛人』（吉川弘文館、1963.7）を主に参考とした。
- 注6) 岸俊男「越前国東大寺領荘園の経営」、『日本古代政治史研究』、塙書房、1966.5、初出1952.8
- 注7) 岸俊男「東大寺をめぐる政治的情勢 - 藤原仲麻呂と造東大寺司を中心に -」、注6)『日本古代政治史研究』、初出1956.6
- 注8) 加藤優「良弁と東大寺別当制」、『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集（文化財論叢）』、同朋舎出版、1983.3
- 注9) そのほか、年紀を欠きながらも「石山院牒上 上院政所 受請本久紙事」として紙（反故紙）を請求した牒も見られ（「大日古」15ノ254）、文中には「火急御所能吉申給（略）速給下」とあり、「御所」は「上院政所」を指している。なお鷲森浩幸氏は、この請求をもって実忠が3月2日に秦足人を付して反故紙を送ったと考えられており、2月頃の牒と推定されている（鷲森浩幸「奈良時代における寺院造営と僧」、『ヒストリア』121、1988.12）。その一方で、3月2日には造東大寺司の主典志斐連磨と判官上毛野公真人の署名のある造石山寺所への充文が見られ（「大日古」5ノ133）、これによると造東大寺司は同じく秦足人を付して仏堂（本堂を指す）と僧房の屋根に用いる黒葛を送っている。秦足人は異なる用件の使を務めたこととなるため、この点からも上院務所と造東大寺司とは互いに独立した関係にあると言えよう。
- 注10) 鷲森注9) 論文
- 注11) 鷲森氏の指摘の通り、造石山寺所の天平宝字6年食用帳の4月23日条（「大日古」15ノ398）に「借充上寺衆僧供養料」と見られる。
- 注12) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」第6節、『日本建築史の研究』、桑名文星堂、1943.10、初出1935.5
- 注13) 清田美季「奈良・平安時代の寺院政策と天皇 - 檀越としての天皇と官家功德分封物 -」、『南都仏教』96、2011.12
- 注14) 受使として「息長画師」の名があり、天平宝字2年（758）4月に大仏殿の天井板須理板の彩色画などに携わった息長広長や息長川守などが考えられる。「大日古」4ノ265、269、353、13ノ235
- 注15) 松原弘宣氏は「この『光所』は、仏像を製作する現場というような意味で使用されていて、そこに組織としての『所』という性格を見いだすことはできない」とされる（松原弘宣『所』と『領』、亀田隆之先生還暦記念会編『律令制社会の成立と展開』、吉川弘文館、1989.12）。松原氏は、「光所」は大仏御光所ではなく石山寺の仏像の光背を作製する組織と判断されたと見受けられるが、鉄物は奈良へ移送されているため、「光所」は大仏御光所と考えられる。また、宛先として「光所」とともに記される「院三綱所」も、奈良への移送記録と照合すると、石山寺ではなく東大寺三綱所であることが分かる。石山寺造営の残物は、石山院三綱所や東大寺三綱所、大仏御光所へそれぞれ区別されて送られ、また東塔所もそれ独自の用材が運送されている。
- 注16) 二部大般若經の写経事業に関する論考としては、以下が挙げられる。松平年一「官写経所の用度綿壳却に関する一考察 - 奈良朝に於ける -」、『歴史地理』62-6、1933.12／伊東彌之助「奈良時代の商業及び商人について」、『三田学会雑誌』41-5、1948.5／横田拓実「天平宝字六年における造東大寺司写経所の財政 - 当時の流通経済の一側面 -」、『史学雑誌』72-9、1963.9／吉田孝「律令時代の交易」、『律令国家と古代の社会』、岩波書店、1983.12／黒田洋子「八世紀における銭貨機能論」、『弘前大学国史研究』87、1989.10／山本幸夫「天平宝字六年～八年の御願經書写」、『写経所文書の基礎的研究』、吉川弘文館、2002.2／栄原永遠男「奉写大般若經所の写経事業と財政」、『奈良時代写経史研究』、塙書房、2003.5、初出1980.12／中川正和「奉写二部大般若經所の一考察 - 七六〇年代の写経事業 -」、『七隈史学』3、2002.3／市川理恵「二部大般若經写経事業の財政とその運用」、『ヒストリア』226、

- 注17) この断簡は、大日本古文書では天平宝字6年9月として所収されているが、これと異なる見解もある。直木孝次郎氏は奉写大般若経所の領であった社下月足（社月足や杜下月足とも書く）の活動に則して述べられている（直木孝次郎「難波使社下月足とその交易」、『難波宮址の研究』7（論考篇）、1981.3）。社下月足の項には「六百三文社下月足 難波交易残」と記されるが、「依員納了 四月廿四日」と追記されており、月足は天平宝字6年12月から閏12月にかけて難波で租布調綿を売却しつつ写経所運営の必要物品を購入する交易を行ったことが知られる（「大日古」16ノ73、75、92、109）ため、直木氏は社下月足が納了したという4月24日は天平宝字7年と考えられている。また山本幸男氏は、この断簡は奉写大般若経所が初期に集中して調綿を売却した後の天平宝字6年閏12月末頃に作成された可能性を示されている（山本注16）論文第1節）。
- 注18) 直木氏は、上述の社下月足の「六百三文 難波交易残」について、この断簡に記される人物たちが二部大般若経書写の事業に直接関わりがない者が多いため、この写経事業とは別の機会に（すなわち天平宝字6年末以外の時期に）月足が交易を行った時のものと判断されている（直木注17）論文）。しかし、登場する嶋浄濱、小橋豊嶋、丸部足人、額田部竹志（額田部筑紫）、山辺武羽、社下月足、高橋少録（内史局佐官高橋鎌倉）、阿刀主典（阿刀酒主）、漆部枚人、五百井少録・省掌・村国大録（節部省少録五百井君・節部省省掌財天須古・神祇大録村国連）は、写経生であったり、奉写二部大般若経所の銭用帳（16ノ91-104）や売料綿并用度銭下帳（16ノ78-87）などに見られる人物であり、いずれも写経所に関係した人物と見て良い。ただし断簡とこれら帳とに記された各人の金額は一致しない。この点に関しては、財政収支の記録には帳尻合わせが見られる点や官人への借用は意図的に削除された点が市川氏によって指摘されているため（市川注16）論文）、断簡の記録はそのような事情によるものとも考えられよう。あるいは、この断簡には米や麦、油の売却金額があることから、写経終了後の残務処理として記録されたものとも考えられる。
- 注19) これより光所も安都雄足が別当を務めていた可能性も考えうる。
- 注20) この断簡（正倉院文書続々修41帙7裏）では、「銭一百貫 大光所□□」のあとに「用 / 廿貫実忠所」とあり、続いて記される炭を供した「山守入鹿」こと南山守秦入鹿や、泉津木屋の将領「山辺武羽」と同じく、実忠に20貫が充てられたと考えられる。ただし、「銭一百貫」と「用」との行間は大きく、別の銭用記録の項目と考えられるため、「大光所」に関する100貫と実忠の20貫とを直接的に関係付けること（例えば100貫のうちの20貫を充てたと解釈することなど）はできない。この「実忠所」については、正倉院文書に見られる所のうち「人名+所」の種類のもので捉えられ、松原氏は「中央の官司に上番するのでなく、現場ないし個人の家で作業などを行っている場合」、「個人が果たしている役割・技術とその人物が存在する場所が同じである時」（松原注15）論文）、梅村喬氏は「所の臨時的・短期的な目的を達成するため責任をもつ領などに任ぜられた人々に付された通称」とされ（梅村喬「『所』の基礎的考察 - 正倉院文書の主に造営所の検討から -」、笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 上』、吉川弘文館、1993.9）、山下氏は「僧侶の場合も含めて、その人が担当している職務・業務に密接に関係」する「執務所」と解釈されている（山下有美「写経機構の内部構造と運営」第7節、注4）『正倉院文書と写経所の研究』）。以上より、「実忠所」は「大光所」そのものではないが、その業務には関係したと考えられ、充てられた20貫は大仏光背の制作にも用いられた可能性は高い。
- 注21) 官人としての監督的側面と造形に対する芸術家的側面との比重の置き方に評価が分かれる。小林氏は彫刻作家としての技能手腕を評価し（小林注4）論文）、前田泰次氏は監督者ながらも本来の職能は仏像の原型を造る塑像制作にあるとし、芸術家的職務という技能面を強調され（前田泰次「盧舎那仏鑄造」、角田文衛編『新修国分寺の研究』1、吉川弘文館、1986.7）、松山氏は、技術的指導者として総合的な施工計画乃至監督と同時に原型制作も主導した仏師の立場にもあったとされる（松山注4）論文）。対して浅香氏は、卒伝の記述は手技の面での卓越を示すものではなく、総合的な工事全体の運営手腕に対する評価とされ（浅香注4）論文。のちに「余義仁小論」（『石川工業高等専門学校紀要』2、

1970.3) にて技術面における指導的性格を評価)、根立氏は「技術指導者として造仏を行う造営機構の管理に当たった人物を大仏師と呼んでいた可能性が高い」とされる(根立注4)論文)。

注22) 筒井・杉山氏や森氏は、公麻呂を百済系帰化二世の仏師に、実忠を新羅系帰化僧もしくは印度系帰化僧にあて、対比されている(筒井・杉山参考文献2)／森参考文献4)。

注23) 風間注4) 論文

注25) 清水参考文献3)／松原参考文献5)

注26) 創建時大仏殿の復原研究のうち、特に本稿に関わるものを以下に挙げる。福山敏男「東大寺大仏殿の第一形態」、『福山敏男著作集二 寺院建築の研究 中』、中央公論美術出版、1982.10、初出 1952.4／若木寛「天平の東大寺大仏殿」、『南都仏教』58、1987.7／海野聡「東大寺創建大仏殿に関する復原私案 - 組物・裳階と構造補強 -」、『奈良文化財研究所創立 60 周年記念論文集 (文化財論叢 IV)』、国立文化財機構奈良文化財研究所、2012.10

注27) 『史跡頭塔発掘調査報告』第 VI 章 2、「遺構変遷と年代」、奈良国立文化財研究所、2001.2／岩永省三「頭塔の系譜と造立事情」、GBS 実行委員会編『東大寺の歴史と教学』、東大寺、2003.12。上層頭塔の造立目的は、堀池春峰氏によって称徳朝における国家安泰祈願との指摘がある(堀池春峰「奈良の頭塔について」、『南都仏教史の研究 下』、法蔵館、1982.4、初出 1964.5)。

注28) 古尾谷知浩氏は、天平宝字 4 年(760) 3 月の造東大寺司管下の造南寺所による仏頂経書写のための用度料申請(「大日古」4ノ411-412)を挙げ、「当東大寺南朱雀路壊平為墓鬼霊奉写仏頂経一卷」を、「東大寺の南の朱雀路に当たりて壊平する墓の鬼霊のために」と読み、文中の「墓」を頭塔の位置もしくはその周辺にあった古墳にあてて、下層頭塔の造営と関係する旨を指摘されている(注 27)『史跡頭塔発掘調査報告』第 VI 章 5、「文献史料からみた頭塔」／古尾谷知浩「東大寺と頭塔 - 東大寺の南方への拡大 -」、注 27)『東大寺の歴史と教学』)。一方、堀池春峰氏は、「当東大寺南朱雀路壊平、為墓鬼霊、奉写仏頂経一卷」、すなわち「東大寺南の朱雀路の壊平に当たりて、墓の鬼霊のために、仏頂経一卷を写し奉る」と読み、「朱雀路」の検討から、この造南寺所解は頭塔造営とは無関係との見解を示されている(堀池春峰「東大寺の占地と大和国法華寺についての一試論」、『南都仏教史の研究 上』、法蔵館、1980.9、初出 1948.2)。

注 29) 文中に「造寺固作瓦甚悪」とあるが、堀池春峰氏や井上薫氏は、「固」は「司」の誤記かとされる(堀池春峰「造東大寺瓦屋と興福寺瓦窯址」、注 28)『南都仏教史の研究 上』、初出 1964.10／井上薫「東大寺の造営」、『奈良朝仏教史の研究』、吉川弘文館、1978.10、初版 1966.7)。

注30) 相楽郡福宏村の比定は困難であるが、堀池春峰氏は「実忠二十九ヶ条」に現れる伊賀杣・信楽杣や、『笠置寺縁起』にある実忠と笠置寺との関係から、相楽郡東域の所在を想定されているように見受けられる。(堀池春峰「笠置寺と笠置曼荼羅についての一試論」、『南都仏教史の研究 遺芳篇』、法蔵館、2004.3、初出 1953.4)。なお、本条の年代(宝亀 11 年～延暦元年)では山城国は山背や山代とつくるため(『日本紀略』延暦 13 年 11 月^(8日)丁丑条)、この点にも後世の編纂が窺える。

注31) 中村順昭「造東大寺司の『所』と別当 - 天平宝字六年造東大寺司告朔解の考察 -」、皆川完一編『古代中世史料学研究 上』、吉川弘文館、1998.10／松原注15) 論文／梅村注20) 論文

注32) 造東大寺司管下の所の別当に僧侶が就任した例としては、神護景雲 4 年(770・宝亀元年)から宝亀 2 年にかけての奉写一切経所において、少鎮実忠の下に、造寺司官人 2 名とともに東大寺僧の大法師円智と法師奉栄が別当を務めていた事実が挙げられる。しかし、これは少鎮実忠が特別に内裏より奉請した一切経の写経に関わる組織であるため(後述の第 16 条)、造瓦所のような一般的な造東大寺司の所とは性格が異なる。ほか僧の別当については、神護景雲元年 8 月 30 日付の阿弥陀院宝物目録の署名に「別当僧聞崇」とあるが(「大日古」5ノ671-683)、これは造東大寺司管下の所ではない。

注33) 造石山寺所官人の考中行事に、将領の行事として「令催作〜」「催使〜」などが見られる。正倉院文書続修 9 帙裏

注34) 大河直躬「造東大寺所と修理所(平安時代の東大寺造営組織について)」、『建築史研究』35、1965.1

- 注35) 『東大寺要録』卷第六封戸水田章第八
- 注36) 大河注34) 論文
- 注37) 佐久間参考文献6)。また佐藤全敏氏は、「実忠二十九ヶ条」中にもこの職への補任記事がないため、寺内職と考えられている（佐藤全敏「東大寺別当の成立」、『平安時代の天皇と官僚制』、東京大学出版会、2008.2、初出2003.6）。
- 注38) 大河注34) 論文
- 注39) 永村眞「中世東大寺の形成過程」第1節、『中世東大寺の組織と経営』、塙書房、1989.2、初出1984.9。なお永村氏は「かつては『寺家』三綱所に対し優位を保ち、造寺・寺内経営を主導しあ織に対して相対的な独自性を主張し得たのは、延暦年中より承和初年まで」とされる。
- 注40) 国立歴史民俗博物館編『古図にみる日本の建築』、至文堂、1989.4
- 注41) 奈良県立橿原考古学研究所による東大寺旧境内第81次発掘調査より（『奈良県遺跡調査概報2000年度（第1分冊）』、2001.3）。
- 注42) この延暦24年にも実忠は継続して造東大寺所の知事であったと考えられるため、余材の検録を延暦20年の時の延長として対処したことが窺える。なお福山敏男氏は、『日本後紀』延暦24年5月己卯^(11日)条に見える、三重塔建立を目的とした僧聴福の紀伊国伊都郡への派遣と関係する点を指摘されている（福山敏男「初期天台真言寺院の建築」、『福山敏男著作集三 寺院建築の研究 下』、中央公論美術出版、1983.3、初出1936.6）。
- 注43) 奈良県立橿原考古学研究所による東大寺旧境内第2次、3次、13次、15次、115次調査（『東大寺西面大垣跡発掘調査概報』、1977.1・『奈良県遺跡調査概報』1976年度、1977.3／1979年度（第2分冊）、1981.5／1990年度（第1分冊）、1991.3／2007年度（第1分冊）、2008.3）、奈良国立文化財研究所による第174-9次調査（『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和61年度、1987.6）、奈良市教育委員会による史跡東大寺旧境内第9次調査（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成8年度、1997.3）より。
- 注44) 注43) 『東大寺西面大垣跡発掘調査概報』、『奈良県遺跡調査概報』1976年度
- 注45) 森蘊「東大寺の旧境内」、参考文献4) 『奈良を測る』
- 注46) 『続日本紀』神護景雲元年2月甲申条。本章中の国公麻呂と佐伯今毛人の任官・叙位について、特に出典を示さないものは『続日本紀』^(4日)からとする。
- 注47) 官職名ならば、公麻呂以外にもほかに大仏師がいたことになりうる。しかし、当該期の史料に見られる「大仏師」の事例は、不明瞭な第3条以外はいずれも公麻呂を指す（「実忠二十九ヶ条」第2条、「大仏殿碑文」、「大日古」7ノ494）。また、「大工・少工・長上工」との工匠階梯上の官職名である「大工」の場合と異なり、公麻呂が活動した時期の史料に記載される仏工は「大仏師」、「仏師」、「仏工」であり、「少仏師」などは見られないため、恒常的な令制上の官職名であったとは確定しがたい。
- 注48) 角田文衛氏は、佐伯今毛人は造西大寺司長官の任にありつつも、この「実忠二十九ヶ条」の記載をもって三たび造東大寺司の長官に就いたと指摘される（角田注5) 文献）。しかし、三度目の造東大寺司長官の就任が確証できる史料は見られないため、一時的・限定的な参画と考えられよう。
- 注49) 例えば、かつて大仏殿造営に功のあった猪名部百世や神磯部国麻呂は、論功行賞の際の本属は木工寮である。
- 注50) 「大日古」4ノ195、16ノ371／岸俊男「良弁伝の一齣」、『南都仏教』43-44、1980.9
- 注51) 加藤注8) 論文
- 注52) ほか、早良親王の呼称として「禪師王子」「禪師親王」「皇子大禪師」などが、『東大寺要録』、正倉院文書、大安寺碑文に見られる。親王は延暦4年(785)に没するが、延暦9年(790)の大赦令にて親王号を復されたと考えられるため、弘仁6年(815)成立と記される「実忠二十九ヶ条」に「親王禪師」と記載されることに問題はない。
- 注53) 醍醐寺本『諸寺縁起集』、藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇 上巻』、中央公論美術出版、1972.3

- 注54) 山田英雄「早良親王と東大寺」、『南都仏教』12、1962.11 / 佐久間竜「等定」、参考文献6)『日本古代僧伝の研究』、初出 1972.2
- 注55) 『東大寺要録』巻第五諸宗章第六「東大寺華嚴別供縁起」に、良弁が臨終の際に「華嚴一乗」を崇道天皇へ付属したとある。
- 注56) 本郷真紹「光仁・桓武朝の国家と仏教 - 早良親王と大安寺・東大寺 -」、『律令国家仏教の研究』、法蔵館、2005.3、初出 1991.7
- 注57) 明らかな矛盾点は、上述の良弁が就任前にも関わらず「僧正」と記される点や、複数の条文で「当年」「今」と記された年が一致しない点などが挙げられるが、これらは編纂時の過程で生じうるものであり、記載内容の事実関係を否定させるまでには至らない。記述の不足から詳細の不明瞭さは残されるほか、ニュアンスなどが誇張されている恐れもあるが、これらは反証することもできないため、本稿では考察に組み込まないこととする。
- 注58) 森明彦氏は「実忠二十九ヶ条」に登場する関係者を「肯定的／否定的」と分類してまとめられている（森参考文献8））。
- 注59) 牧参考文献9) 第1節
- 注60) 大仏は、その後の天長4年(827)には背後に山を築いて大規模な補修を行ったことが『東大寺要録』巻第七雜事章第十「大仏後築山事」に示されている。この際に、延暦5年以降破損は次第に拡大していったと説明されているため、延暦20-22年の実忠の補修の効果は限定的であったと考えられる。なお、実忠の補修では山形が作成されたことが知られる（「大日古」25付録ノ4）。
- 注61) 松山氏は本条における様は左手復原のための何らかの原型とされている（松山鐵男「実忠による左手の修理」、注4）『東大寺大仏の研究（解説篇）』）。
- 注62) 佐久間注54) 論文。なお佐久間氏は、東大寺の鎮制はおおよそ称徳朝期に重なるように見られることから、鎮は道鏡政権下において東大寺運営の円滑化のために特に設けられた制度とされる（佐久間参考文献6））。さらに加藤優氏は、道鏡によって良弁の活動が制限された期間に、その代わりとなる寺務運営組織として置かれたと解釈されている（加藤優「東大寺鎮考 - 良弁と道教の関係をめぐって -」、『国史談話会雑誌』23、1982.2）。
- 注63) 柴原永遠男「奉写一切経所の写経事業」、注16)『奈良時代写経史研究』、初出 1977.12
- 注64) 山下氏は、実忠が監督した先一部一切経写経事業では勘経と校経に僧侶が従事したという他に見られない特徴（特に校経への僧侶の参画）を指摘され、このような僧侶による写経活動への関与は、実忠や僧侶別当による写経所の運営面での関与と同調しており、その背景に、道鏡政権に対する東大寺側の対策としての、造東大寺司全体における僧の関与がある点を述べられている（山下有美「写経機構の内部構造と運営」第6節、注4）『正倉院文書と写経所の研究』）。
- 注65) 堀池春峰「光明皇后御願一切経と正倉院聖語蔵」、注28)『南都仏教史の研究 上』、初出 1954.9 / 清田注13) 論文。
- 注65) この場合の実忠は、称徳天皇へ先一部一切経を奉請し、その書写を指揮したこととなる。福山敏男「奈良朝に於ける写経所の研究」、注26)『福山敏男著作集二 寺院建築の研究 中』、初出 1932.12 / 森参考文献8)
- 注66) 実際には宝亀年間は称徳天皇の崩御後にあたるため、光仁朝においても継続されたことを示している。清田氏は、宝亀11年には官家功德分封物の用途指定があるため、その機会に実忠の一切経読経会への支出は規定外とされ、終了したと推測されている（清田注13) 論文）。

本論 第4章

天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係

天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係

1. はじめに

本稿は、古代における建築造営の検討の姿を解明することを目的とし、『東大寺要録』巻第七 雜事章第十にある「大仏後山事」に表された盧舎那仏の修理方法の論議を対象に検討を行うものである^{参1}。この記録は、各人の見解の違いによる修復方法の差は理解できるが、主張からはその方法の技術的優劣は判断できず、方針決定にいたる根拠もまた示されていない。なおかつ衍文や欠文もあり、解読が困難な記録であるものの、伊藤延男氏が詳細な考察を行っており解読に成功していると思われる^{参2}。したがって、記録の技術的な解釈は伊藤氏の見解を出るものではないが、参画した関係者の考察はなお断片的に留まり、造寺体制の関係性としては考察の余地があると見受けられる。そこで、本稿では関わった人物・組織について、職能や立場の観点から複合的に関係性を明らかにし、東大寺の造営状況や、寺院としての運営体制と連関させて述べたい。

2. 論議の概要

対象は、天長4年(827)4月17日付にて僧綱に宛てられた太政官牒に記された議論であり、はじめにその概要を述べる。内容は、東大寺盧舎那仏の修復方針について議論したものであり、意見が二つに割れていたことが窺える。一つは、大仏殿の柱のうち大仏の背後に当たる8本を切り、その空間に山を築いて支えるもの(方針1)、もう一つは、柱を切らずにすむ小山に留めて支木を用いて大仏を支えるもの(方針2)である。問題の焦点としては、大仏殿の柱を切断するか否かが大きく、大仏本体の改鑄方法などが議論されている訳ではない。経緯としては、もともと天長3年(826)4月8日に、右大弁・伴(大伴)国道の裁定により方針1が下されていた。しかし、依然として反対意見もあった様子で、天長4年2月29日に検使である左大弁・直世王、民部大輔・笠梁麻呂、右兵衛権佐・藤原豊主等が奏上するに、大僧都・勤操、前大僧都・護命、律師・泰演、長上工・三嶋嶋継など27人が方針1を上申したとあり、あらためて直世王らは方針1を主張した。これに対して、木工頭・栄井王、皇后宮大夫・藤原吉野、木工権助・益田満足等が、3月29日に反対意見を述べる。柱を切らないことは、東大寺僧の平智、薬上、泰智、および大安寺僧の平法も主張していた。最終的には、中納言兼左近衛大将および民部卿であった清原夏野の宣により方針1が下され、その旨が僧綱に牒せられた。その後の8月には、佐保山稜に藤原愛発が改修の報告のために派遣されている。

すなわち、議政官を含む官人、僧綱、寺僧、工人という多岐に渡った参画者が見えており、このように、造営の議論が詳細に記された記録はなく、貴重である。また、この人員は、『東大寺要

録』巻七雜事章第十「東大寺權別當実忠二十九箇条事」にて述べるところの、延暦 20-22 年（801-803）の大仏修理の検討の場に臨んだ「勅使、僧綱、諸大寺三綱、老宿大法師」にも通じる点に注意しておきたい。以下、それぞれの参画者の立場から述べてゆく。

3. 官人

検使として派遣された官人たちがもっとも表に出て記述されているが、とりわけ特徴的であるのは藤原吉野であり、彼を中心に官人の関係を考察したい参 5。なぜならば、藤原吉野は淳和天皇の近臣であり、淳和が大伴親王として皇太子の時代に春宮少進として仕え、即位後は蔵人頭や右近衛大将などを歴任した「藩邸之旧臣」であることによる。

藤原吉野は、天長元年（824）正月に従五位上に叙位されて以後、同 3 年 8 月に正五位下、4 年 1 月に従四位下へと越階されたため、大仏修理の論議の際はこの位階であった。天長 4 年 2 月には皇后宮大夫となるが、これは嵯峨上皇の皇女でもあった正子内親王が皇后に冊立したことによる補任であり、淳和の信頼の厚さが窺える。吉野は大仏修理の論議の際には議政官ではないが、翌年の天長 5 年には参議に補されており、議政官昇任は時間の問題だったのだろう。栄井王側の奏上では、栄井王よりも吉野の議が目立つのであり、またすでに参議であった直世王と対抗して論陣を張ることができるのは、このような吉野の背景があるためである^{注1}。伊藤延男氏は、吉野は論争に破れながらも、その後も公卿として順調な昇進をしてゆくことを根拠に、本件における政治的背景の無を述べられているが、もともと藩邸の旧臣たる吉野の昇進が、本論争で揺るぐとは考えがたい。かえって、吉野は仁明朝において承和の変にて左遷されるため、仁明、延いては嵯峨天皇時代からの官人たちとは立場を比較して検討する必要があるだろう^{注2}。太政官の首班であった左大臣・藤原冬嗣は嵯峨天皇の側近であり、初代の蔵人頭を務め、弘仁年間を通じて太政官の中樞を占めた。直世王も嵯峨天皇の蔵人頭を務めており、弘仁末にはすでに左大弁になっている。冬嗣は天長 3 年 7 月 24 日に薨去するため、これをもって、反対意見が残っていた修理方法の裁定について、新たな太政官構成のなかで改めて再検討の機会が設けられたとも考えられる。

しかし、潜在的な対立があったとしても、それが表面化しない点は、この時期の両統迭立の性格と合致している。清原夏野や藤原愛発も淳和に重用されたが、清原夏野は藤原吉野の意見を採用した訳でもなく、また藤原豊主も、天皇の護衛役たる近衛少将に補任されたため、淳和に近しいながら、吉野とは別の論陣にいたことになる。栄井王については史料が乏しいが、その子の豊前王の卒伝によると、舎人親王の子孫四世であり、天長 5 年（828）に木工頭のまま従五位上で没したとある。弘仁 5 年（814）1 月に正六位上から従五位下へ昇叙以後、特に大きな昇叙はないため、藤原吉野などと比較するとあまり活躍した様子が窺えない。ただし、延暦以降の木工頭はそれ以

前の時代に比べて諸王の任命が少なくなり、代わって武官や造営官を歴任した官人が任ぜられる傾向からすると珍しい存在である^{参6}。

むしろ、天長の協議において着目すべきは、これら官人のうちに寺院の俗別当を務めたものが含まれる点であろう。伴国道は、藤原三守とともに弘仁14年(823)に置かれた延暦寺の俗別当の初代であり(平安遺文4435号、以下では平4435と略す)、藤原吉野も天長10年(833)時点で延暦寺の俗別当を務め、吉野の子である藤原良近は貞観13年(871)に東大寺の俗別当として見える。直世王は、天長7年(830)に薬師寺最勝会の創始を奏上しており、そのためか、『初例抄』に「俗別当中納言直世王奏聞」と記されている。天長年間には東大寺の俗別当は確認されないものの、承和年間には参議や左大弁の俗別当が見られ、貞観年間には弁官から任用されることが定着する。俗別当は高官が務めたため、同じく高官が補された大仏修理の検使が他寺の俗別当を兼ねることは自然なことであるかもしれない。しかし、検使の官人たちの造営修理に関する活動には、検校というより俗別当にも通じる性格があり、胎動期として位置付けることができる。この点について、以後、造東大寺所を中心とする東大寺の組織に着目しながら述べてゆきたい^{注3}。

4. 東大寺の組織

それでは、大仏修理に関連する寺内の各機関として、造寺所を中心に、別当、俗別当、三綱について考察を加えたい。いずれの機関も天長4年の太政官牒には記載されていないものの、大仏修復について無関係であるはずはない。したがって、本稿では平安時代初期の東大寺の状況を踏まえつつ、造営の場におけるそれぞれの関与を復原してゆく。

造営担当機関である造東大寺所は、延暦8年(789)に停止となった造東大寺司の後身であり、延暦15年(796)にはその存在が確認される^{参7}。四等官が廃止され、運営に当たっては知事僧が置かれるなど、官司から寺家へ管轄が強まった特徴がある。しかしながら、造寺司の財源であった「営造修理塔寺精舎修理分」封一千戸(ただし、延暦12年(793)に新薬師寺修理料として百戸を割き、九百戸となる)を引き継ぎ、三綱が寺内運営として管理した「供養三宝并常住僧分」二千戸とは独立した財源を管理する点、また三綱と造寺所の知事とは異なる職位である点など、三綱と並立的な側面も有していた。すなわち、造寺所は令制官司である造寺司の性格を引き継ぎつつ、11世紀に誕生する寺家工房たる東大寺修理所との過渡的性格を帯びている。以下、その造寺所の関係を史料から追う。

まず土地経営であるが、延暦23年(804)相楽郡蟹幡郷にあった二町余りの「造東大寺地」と記される造寺所の土地の相換について、実忠を筆頭とする知事5名のみならず、別当・修哲、三綱の署名が見られ、大同4年(809)には、その相換地を国衙田数帖から除いたことの確認として、

別当・修哲、修理別当・実忠、知事4名が連署している（平25）。造寺所の土地、すなわちかつての造寺司の土地の経営などは、早くから造寺所の知事のみならず別当や三綱の参画のもとで行われていたことが分かる。

続いて、人事である造寺所知事の補任では、承和5年（838）1月26日の僧綱牒は「造東大寺所別当知事」宛てであるが（平4442）、承和12年5月20日の僧綱牒では「東大寺別当三綱并造寺所」に宛てており、三綱が加わっている（平4451）。これ以後は、宛所の「造寺所」の箇所が「造寺所専当知事」や「造司所」「造司」「造司知事」などに変わるのみで、別当と三綱は必ず宛所に含まれた。ここには、三綱の造寺所に対する優位が見られるが、別当の、三綱と造寺所の双方を含めた寺内への権限の強化もある。すなわち、延暦から承和にかけては別当の確立期であり、以後、寺院経営を中心的に担うべく登場した僧別当は、三綱と造寺所を指揮下におさめ、寺家の代表として仏法興隆と伽藍維持に重要な役割を果たすことになる^{参8}。別当が造寺所をおさめるとは、上記大同4年に寺家別当と並記された、造寺関係を担うと考えられる修理別当の職能も吸収したことを表している。したがって承和5年の知事補任の僧綱牒にある「造東大寺所別当」とは造寺所の別当職が存在したというより、寺家別当のことを指すと考えられ、寺家別当がすでに造寺所の運営に主導的立場を確立していたことを示すだろう。天長の別当については、天長3年（826）9月1日付の正倉院御物出納注文に、別当・施秀、寺主・慈光、都維那・安稱とある（平4429）。施秀は弘仁14年（823）にも別当の座にあったことが知られる（平4425）。すなわち、天長3年4月の伴国道による裁定の際にも継続して別当職にあったため、施秀は直世王の方針1を認めていたことになる。なお、上記の知事補任はいずれも僧綱牒であったが、その後は貞観13年（871）10月30日付の俗別当牒による補任の段階をへて（平4508）、貞観14年（872）6月1日以降は太政官牒による補任へと変化し、『延喜式』玄蕃寮に見える補任手続きの通りとなる。造寺所知事の補任権は太政官に移るのであり、僧綱は審査と上申の役割へ縮小する^{参9}。しかし、いずれにせよ天長の段階では知事僧の補任権は僧綱にあった。

では、これらに対して、僧籍にない造寺所の工人が関与する場合の管理はどうか。大同2年（807）には、御在所の修理のために木工6人を進上する主旨の太政官牒が三綱に宛てられ（平30）、また同年には、大仏修理のために東寺から東大寺に戻っていた造寺所の仕丁12名を東寺に返送することを指示した太政官牒が三綱に宛てられている（平31）。いずれも造営に関わることであるため、造寺所が関与する件であるが、造寺所およびその知事僧に宛てられず、また当時の別当・修哲でもない。つまり、造寺所の工人については太政官から三綱を通じて差配されたことが知られる。また延暦24年（805）には寺内にある材木を検校する検使が使わされたが、「太政官牒東大寺」とある点も上記と同様に考え得る（平26）。

しかし、造寺所側としては異なった状況が見られる。時代が下るが、承和5年(838)8月3日に毘沙門天の像を修理したことの記文では、工人であった長上従八位上・神氏勝(もしくは神氏勝助)、鴨道往、三嶋首麻呂の活動が名を挙げられて記され、別当・円明、知事僧5名のほか、俗別当である参議民部卿・朝野鹿取、内豎・高橋祖嗣および石川真主が連署している(平63)。これは、記文という性格上、対外的に発給する目的ではないため、かえって造寺所の体制の性格が純粹に現れているものと考えられよう。すなわち、造寺所の本務である修理造営の基本体制は、寺家工人、僧俗別当および知事から構成されるところと考えられていたのではないか。石川真主は、太政官符により承和5年から7年にかけて阿波国や因幡国へ赴いて東大寺の寺領を勘糾するが、東大寺の寺領回復に繋がる活動である(平66、72、74)^{参10}。また、承和8年(841)には、越中国の東大寺庄において浪人化した庄民の返還を造寺所が要求し、俗別当・藤原輔嗣が告状を作成している(平68)。造寺司から引き継いだ、造寺所の管理した寺地であったのだろう。知事の任期を4年に定めた承和13年9月25日の僧綱牒は「東大寺別当三綱」に宛てられたが、俗別当・源弘の宣を受けて発給されており、あらかじめ俗別当を通じて寺側に伝わっていたと推測される(平80)。また、造寺所知事の補任も、貞観以降の太政官牒では俗別当の宣を受けて発給されており、これは上述の僧綱の権限の縮小とも繋がる。

このように、寺家は俗別当を通じることで、僧綱や玄蕃寮を介さずに太政官と繋がることになり、天長の仏像修理が議論される過程も、寺家と官人、太政官の関係は、俗別当登場後の状況と類似するのではないだろうか^{参11,12,13}。俗別当は、延暦14年(795)7月の桓武天皇による南都諸寺への専使検校が先駆と見られ(『類聚国史』巻180)、大同元年(806)に東大寺内一切を検校するために吉備泉らが派遣されたことも同じ流れだが(平28)、これら官人の寺院への関与の仕方は、承和以降の俗別当では変化があるだろう。

5. 工人

前節で造寺所を取り巻く状況をみたが、天長の太政官牒には造寺所は直接は記述されていない。しかし、三嶋嶋継は後述の通り造寺所に所属する工人として考えられるため、嶋継の立場を踏まえて造寺所について考察する。

嶋継に関する記録は、『続日本後紀』に、承和の遣唐使に際して造船に携わった補任があるが(承和元年5月13日条:造船次官、8月10日条:造船都匠、8月14日条:阿波権掾を兼任、承和3年9月25日条:修理遣唐舶使次官)、いずれも東大寺とは関係ない。造寺所の工人という点は、『東大寺要録』が引く「日本感霊録」の伝承が根拠であり、それによると大同年中に童子として仕え、弘仁2年(811)に夢の中で浄行禪師より手鉏を授けられて工匠術の精進に努めた結果、造寺所の

長上となり、弘仁 14 年（823）に従五位下を授かったという。ただし、文中にある「弘仁二年壬辰」の干支は「辛卯」が正しく、史料の信憑性が疑問視されるが、壬辰は翌年の弘仁 3 年（812）にあたるので「弘仁三年壬辰」の誤写と考えれば信憑性を疑うほどではない。童子として東大寺に奉仕した大同年を「奈良太上天皇之代」と記し、伝記中の年代の下限は五位を与えられたという弘仁 14（823）年 3 月 8 日であるため、平城上皇が崩御した天長元年（824）7 月 7 日までの間に書かれたものとする、一応はつじつまが合う。また「日本感霊録」に「長上」とある点は、本稿で検討している天長 4 年の太政官牒にある嶋継の肩書きと一致しており、弘仁 14 年（823）の時点で授けられたと記述されている五位も、上記『続日本後紀』承和元年（834）5 月 13 日条にある「外従五位下」と齟齬がない点など、相応の信用性を有している。したがって、嶋継は東大寺を出自とし、また、そのため天長 4 年の時点では、嶋継は造寺所に属していたと考えられる。浅香年木氏は、嶋継を天長の時点でも木工寮に属する工人と解釈されているが¹⁴、もし嶋継が木工寮に属していたならば、木工頭・栄井王や権助・満足と対峙して勘進できたとは考えがたい。さらに、先の造寺所の運営状況を照らし合わせると、嶋継が造寺所の工人である以上、嶋継以外の造寺所の工人や知事も同じ立場にあったと考えるのが自然であり、これらが「廿七人」に含まれているものと考えられる。僧綱と嶋継が併記されるのは、僧尼監督を担う令制機関で、僧位としては五位以上の官人に相当する僧綱と、外位ながらも五位という令制位階を帯びた官人としての嶋継とが、共通して見なされたのではないか。造東大寺所造が東大寺司の職掌と財源を継承している以上、その工人たちにもかつての「司工」すなわち官工としての側面も残されており、寺内工房と見られる東大寺修理所が成立するまでは、その工人は官工か寺工か明瞭に分けられないのではないだろうか。そのため、嶋継の承和期における造船次官補任など、別官司へ転出も柔軟に行い得たと考えられる。

なお、木工寮の権助であった益田満足は、連姓を有するため、天平期の造東大寺司の工人であった益田連縄手の家系に連なると推定される。天長 4 年（827）1 月には、外従五位上から外正五位上へ昇叙し、天長 9 年（832）1 月には、従五位下となる（『類聚国史』巻 99）。この時期の木工寮では、天長 3 年（826）7 月 25 日に停止された修理職の木工寮への併合があった（『狩野文庫本類聚三代格』）¹⁵。修理職は弘仁 9 年（818）に設置されたが、もともと延暦 24 年（805）に停止され木工寮に付されていた造宮職の職掌を受け継ぐものであり、職員も造宮職にほぼ準じるかたちとなっていた。すなわち、延暦に吸収された造宮関係組織が改めて修理職として独立し、造営が一段落したためか、再び木工寮に併合されたことになる。この間に、修理職として置かれていた職員も木工寮に戻され、工人も木工寮へ吸収されたと考えられる。満足は、その直後の 1 月に 2 階級昇進に叙されているため、修理職併合との何らかの関連性が考えられる。満足が技能者であっ

たかは不明ではあるが、外位でありながらも四等官に任ぜられているため、技能的に長じていた側面を有していたのではないか。外位の技術者による四等官の補任例は、近いものでは先の三嶋嶋継のほか、上述の大同元年（806）東大寺検使の外従五位下造西寺次官兼木工少工・秦宿禰都伎麻呂がいる。

6. 僧侶

僧綱については上述の通りであるが、護命が「前大僧都」とあるのは、弘仁14年（823）に大僧都を辞退して隠棲したためである。僧綱から外れていたことになるが、天長3年3月には桓武天皇の仏寺に請われて講師を務め、翌4年11月に僧正に補任されるため、継続して僧界において影響力を有していた。護命が僧綱を辞したのは、南都勢力の代表として反対していた大乘戒壇の設置が認可されたことを受けてであるが、戒壇設立に際しては伴国道が延暦寺の俗別当として働いた背景があり、対立する立場にある。しかしながら、両者の関係は今回の裁定に影響はないとみて良い。

次いで、柱の切断に反対した僧侶たちについて述べる。平法は、『三会定一記』では承和5年（838）に維摩会講師として、『大安寺別当次第』では補任年は不明ながらも大安寺の初代別当として名が見える。大安寺別当については、天長9年（832）10月3日の太政官符に別当「平等」が大安寺に法華經会を設けることを願い出たとあり、これを「平法」と同一視する見解もある¹⁶（『類聚三代格』巻二）。ほか、延暦寺の『叡岳要記』には、承和5年（838）1月3日に行った四王院供養に際して「堂達 平法大法師 大安」とある。史料批判はあるものの、大安寺を代表する高僧の一人と考えられる。平智、葉上、泰智は、『東大寺要録』巻第四諸院章第四に引く延喜5年（905）の「唐禅院師資次第」によると、いずれも唐禅院の系列に連なり、平智は景深の弟子、泰智は安暨の弟子、葉上は恵雲の弟子とある。平智は、空海自筆の神護寺「灌頂歴名」に見える。弘仁3年（812）12月14日に、東大寺から願澄、靈寵とともに胎藏界の灌頂を受けたが（平補247）、東大寺内での活動は不明である。葉上は、上述の延暦23年（804）の寺地相換の際に、造寺所知事の一人として見え、造寺所の運営に従事したことが知られる。弘仁13年（822）3月26日には寺主であり（平4423）、翌弘仁14年（823）4月14日まではその座にあったことが知られるが（平4425）、上述の通り天長3年（826）9月の時点での寺主は慈光とあるため、それまでに退いていた。また、空海作の「空海戒牒案」に、空海が具足戒を受けた戒師として記されている。泰智については史料が乏しいが、師の安暨が、葉上と同じく空海の受戒の戒師の一人として見えるため、葉上より若年であっただろう。これら3名の天長4年時点での東大寺内での立場が不明だが、天長3年9月の前後に三綱が同時期に職を辞すことや、三綱内で意見が分かれるとは考えがたいため、3名は上座・

寺主・都維那からなる東大寺三綱の連名として著したものではないと考えられる。もし三綱の職にあるならば、上述の僧別当を中心とした寺院運営体制上、別当と異なった上申もできないだろう。いずれも三綱の座にはなかったと推測される。彼らは、実忠が「東大寺権別当実忠二十九箇条」にて述べるところの、「老宿大法師」「寺内大衆」に相当する存在と考えられ、三綱や知事とは別に、寺内の「集会」の場において発言力を有する高僧であったのだろう。唐禅院を出自とする小集団を形成し、意志の実現を図っていた可能性もある。唐禅院推定地の発掘調査からは、8世紀中頃に造営され9世紀前半に解体された建物があることが判明しているが^{参17}、唐禅院の存亡は不明である。

7. 結語

以上、雑多に論を進めてきた感が否めないが、以下に段階を追ってまとめ、結語とする。

- ・ 太政官牒に直接記された議論の参画者は、議政官を含む官人、僧綱、寺僧、工人与多岐にわたるが、議論に政争としての影響は見られない。
- ・ 造東大寺所は、土地経営や知事補任において、僧別当のみならず三綱からも干渉を受けた。しかし、三綱と造寺所はともに別当のもとにあるものの、三綱が造寺所を管轄下に置いた訳ではない。俗別当が成立すると、土地経営や知事補任には俗別当が大きく関与した。
- ・ 造東大寺所の造営における基本的な体制は、承和5年（838）の時点で、知事僧、工人、僧別当と俗別当という僧俗が入り交じったものを想定することができる。
- ・ 天長の論議の論陣においては、三綱は僧綱と、造寺所は工人・三嶋嶋継と同調しており、三綱と造寺所の双方を監督する僧別当もこれに加わっていたと考えられる。
- ・ 検使たる官人は俗別当ではなかったが、それぞれ寺院からの上申すなわち寺院の要望を受けて行動する点は後に登場する俗別当と類似しており、造営面における俗別当性の胎動として考え得る。

参考文献

- 1 筒井英俊校訂『東大寺要録』、1971.1
- 2 伊藤延男「大仏背後の山」『研究論集Ⅰ』、1972.3
- 3 伊藤延男「東大寺大仏背後の山の築造をめぐって ―文化財保護の原点を探る―」『仏教芸術』131、1980.7
- 4 堀池春峰「東大寺大仏々後山」、『日本歴史』212、1966.1
- 5 福井俊彦「淳和朝の官人」、『早稲田大学高等学院研究年誌』11、1966.12
- 6 長山泰孝『律令負担体系の研究』、1976.2
- 7 大河直躬「造東大寺所と修理所」、『建築史研究』35、1965.1

- 8 永村真『中世東大寺の組織と経営』、1989.2
- 9 土谷恵「平安前期僧綱制の展開」、『史艸』24、1983.11
- 10 所京子『平安期「所・後院・俗別当」の研究』、2004.4
- 11 湯浅吉美「東大寺の俗別当について」、『国史研究会年報』5、1984.12
- 12 身深晃「俗別当制の機能と展開 一東大寺の事例を中心に」、『九州史学』115、1996.9
- 13 飯塚聡「平安前期東大寺修理造営と造寺使に関する覚え書」、『財団法人群馬県埋蔵文化財 調査事業団研究紀要』6、1989.3
- 14 浅香年木『日本古代手工業史の研究』、1971.3
- 15 松原弘宣「修理職についての一研究」、『ヒストリア』78、1978.3
- 16 追塩千尋「平安朝における大安寺の大勢」、『日本古代中世の政治と宗教』、2002.5
- 17 林部均・鶴見泰寿「東大寺唐禅院跡の発掘調査」、『仏教芸術』281、2005.7

注

- 注 1) 公卿補任では天長4年の直世王の年齢は42歳とあり、これは吉野の年齢と同じとなるが、公卿補任の天長2年まで50歳と順次年齢が数えられており、また承和元年(834)には59歳とあるため、天長4年では52歳の誤記である。なお『続日本後紀』の卒伝には58歳とある。
- 注 2) 仁明朝初期には、嵯峨朝の寵臣が再度重用されている。
- 注 3) 造寺に関わる俗別当として、『東宝記』第七「東寺俗別当初例」では、東寺・神護寺・金剛峯寺の俗別当は、承和5年以前に設置されていたものの、「造作之事」のみの職務に限られるためなので、延暦寺と同じ職掌をもつ俗別当の設置を申請している。

本論 第5章

思託の西大寺八角塔の様

思託の西大寺八角塔の様

1. はじめに

本章では、『延暦僧録』にある思託の造った様について検討を加える。『延暦僧録』は思託自身の筆録によるものであり、完本は現存していないものの、『日本高僧伝要文抄』に逸文が所収されている。そのうち「従高僧沙門釈思託伝」との朱書きが見られる思託の自叙伝中に、自身が様を造ったことが記されているが、作文的な自己顕彰ではなく記録として信憑性があるものとして一般に認められている。それは、思託伝の多くが鑑真和上に随行した渡海行や伝法に関する記述で占められる中において、数少ない自身の業績に関する記述であることから、そのように認められて良いであろう。その記録を以下に挙げる。

景雲年勅西大寺造八角塔様

すなわち、神護景雲年に勅によって西大寺八角塔の様を造ると読める。西大寺は、恵美押勝の乱に伴い孝謙太上天皇が建立を発願した寺院であり、乱の鎮圧後に上皇が称徳天皇として重祚し、実際に造営が開始された。西大寺は、亡父・先帝であった聖武天皇の発願による東大寺に対応するかたちで、もしくは対抗意識として、西大寺の造営にも称徳朝の精力が傾注されることとなる。建造物としても、薬師金堂と弥勒金堂の二つの金堂を中心として、諸院が営まれた。その中で、本章では塔に関する考察となる。

西大寺には、実際に東西双塔形式の仏塔が造られたことが知られている。宝亀11年(780)勸録の『西大寺資財流記帳』(主たる伝本として西大寺本と内閣文庫本が確認されているが、塔の記載については相違は見られない)に明記され、説話的性格の強い『日本霊異記』にも西大寺塔は登場し、また、近年における塔跡の発掘調査結果からもその存在が明らかにされている。しかし、西大寺の塔は、当初に八角七重塔として着工されながらも、結果的に実現された形式は四角五重塔であり、その間に計画変更

都下十四日乙未水浸水過小崗見一池有清冷好汲水上龍明
更取水但見池地知是化出に耳又於一時暇至打兒李波鳩、
有石溪唐僧教薛入中在釋隨慈鑑失心思託日鉢標標見杖得
長辭上取其日壯疲脈實六年辰丙子二月四日主聖朝勅令
於東大寺行經法此乃得取回復后通釋律師請大在寺唐院釋
大際匠也慶和五年甲子思基等從此已東本國祇律通傳燈
願請復真和上移住唐寺被入釋讓思託述和上行託無請凌海
真人元開述和上東行傳空則楊秀德流若後託雲年勅西大
寺造八角塔樣實臨年勅思託東大寺釋定大佛頂行通勅請入
因思水散佛提及大官今法入從高僧傳錄以呈万代天

図 5.1 『延暦僧録』「従高僧沙門釈思託伝」
(東大寺図書館本)

があったことが認められている。すなわち、造営過程は単純ではなく、複雑な過程があったことが窺える。

この塔の造営に対して、思託が作成した八角塔様がどのように機能もしくは影響し、延いては思託個人がどのように関与したのかという点について明らかにすることが本章の目的である。そのため、造営の工程、思託の様の内容、またどのような状況下で思託の様が造営されたのか、順に述べてゆく。

なお、「雛型」もしくは「雛形」という語は、小建築や模型、さらにそれに参考となるもの、フォーマット、と多義的であり、混乱を招く。先行研究においても、それぞれその指すものが異なって使用されているよう見受けられる。したがって本稿ではこの語は基本的に使用しないものとする。ただし、先行研究を引用する場合にはその限りではない。

2. 西大寺塔の造営過程

2.1 造営過程の記録

まずは造営の進行の状況を確認し、そのスケジュールから見て、思託の様が機能したかをはかる。西大寺造営に関する記録は、表 5.1 に示したとおりである。ただし、造営状況についても、先行研究ではいくつかの点において意見の相違が見られ、史料の不足から見解の一致にはいたらない状況である。したがって、本節では、まずはそれぞれの記録と内容を確認しつつ、先行研究の見解を加えて、個々に述べてゆく。

・天平宝字 8 年（764）9 月 11 日

いわゆる恵美押勝の乱が勃発し、『西大寺資財流記帳』によれば、この日に孝謙太上天皇が戦勝を祈願して、金銅四天王像の造立と西大寺の建立を発願したと記されている。そのため、一般的にはこの日が西大寺建立発願の日とされている。四天王像の造立は、聖徳太子が同じく四天王の加護により物部氏を打ち破り、四天王寺を開いた事例になぞらえたものと考えられる。

・天平神護元年（765）

乱の鎮圧後、孝謙上皇は称徳天皇として重祚する。天平宝字より天平神護へと改元され、『西大寺資財流記帳』には、この年より造営が開始されたとある。具体的には、金銅四天王像の鑄造を開始し、伽藍を開くという。

・天平神護 2 年（766）10 月 8 日

大毘盧遮那経の奥書により、吉備由利が、西大寺へ納入する目的でこの一切経の書写を発願した日として知られる。『西大寺資財流記帳』では、この一切経は寺内の四王堂に安置されたと記

表 5.1 西大寺伽藍造営年表

和暦	西暦	事項		
		月	月事項	年事項
天平宝字 8 年	764			
		9 月	恵美押勝乱、金銅四天王像と寺院建立を発願（資財帳）	
天平神護 元年	765			この年、四天王像を 鑄造（資財帳）
2 年	766			この年、封戸などを 西大寺へ施入。寺地 の百姓に家地を給す べき旨の右京職の解
		10 月	吉備由利が一切経の写書を発願（四王堂へ奉納）（大毘盧遮那経発願奥書）	
		12 月	西大寺へ行幸、叙位（続日本紀）、大安寺東塔に落雷	
神護景雲 元年	767	2 月	国公麻呂、猪名部百世など叙位。造西大寺司の長官次官を任命（続日本紀）	
		3 月	元興寺、西大寺、大安寺、薬師寺へ行幸、叙位（続日本紀）	
		9 月	西大寺へ行幸（続日本紀）	
2 年	768			神護景雲年、思託が 八角塔様を造る
3 年	769			
		4 月	西大寺へ行幸、造西大寺司官人叙位（続日本紀）	
		6 月	弥勒浄土堂を建立（扶桑略記）	
宝亀元年	770	2 月	東塔礎石の祟り（続日本紀）、兜率天邪鬼の説話（七大寺巡礼私記）	百萬塔完成
		8 月	称徳天皇崩御	
2 年	771			
		10 月	兜率天堂（弥勒金堂）の造営賞	
3 年	772	4 月	西塔に落雷、小野社の祟り、焼失せず	
4 年	773			良弁没
5 年	774			公麻呂没
6 年	775			
7 年	776	7 月	西塔に落雷、焼失せず	
8 年	777			
9 年	778	8 月	記録に見る最後の造西大寺司官人の任命	
10 年	779			
11 年	780		『西大寺資財流記帳』 勘録	

されているが、その納入の時期までは明らかではない。

- ・天平神護 2 年（766）12 月 12 日

『続日本紀』によると、西大寺への行幸があり、清原王、気多王、梶嶋王、乙訓王らの皇親をはじめ、藤原田麻呂、大伴伯麻呂、豊野出雲、豊野奄智、豊野五十戸、多治比若日女、桧前部老刀自への、

叙位があった。太田博太郎氏をはじめ、多くの既往研究では西大寺四王堂が完成したとする（『奈良六大寺大観』）。一方で近藤有宜氏は、あくまで寺地の提供と造成事業に対しての褒賞であり、四王堂の竣工には至らないと考察されている。

- ・天平神護2年（766）

『西大寺資財流記帳』『官付図書第五』に「一卷 右京職解文 檢西大寺堺内在百姓家地応給帳 天平神護二年」と見られる。割註より、この年に右京職が西大寺の寺地内に家屋敷がある百姓の代替地の供給について検録したと読める。すなわち、寺地の確保が行われたことを示すが、前年の金銅四天王像の鑄造より遅い点には着目されるべきである。

- ・神護景雲元年（767）2月4日

称徳天皇が東大寺へと行幸し、国中公麻呂・佐伯真守・猪名部百世などが叙位に与る。東大寺行幸の記事であるが、後述に通り西大寺造営に関係すると考えられるため、ここではひとつの画期として取り上げておく。

- ・神護景雲元年（767）2月28日

『続日本紀』によると、造西大寺司の長官および次官として、佐伯今毛人と大伴伯麻呂の両名が任命されたとある。同時に長官と次官とが就任しているため、この時に造西大寺司が発足したと見られる。

- ・神護景雲元年（767）3月3日および9月2日

『続日本紀』によると、称徳天皇の西大寺法院への行幸があり、文士に曲水の詩を読ましめたとある。曲水とあるため、この時には西大寺に何らかの池庭が完成していたことが推測される。また同年9月にも西大寺嶋院へ行幸があり、嶋院との名称から、同じく何らかの池庭の存在が窺われる。福山敏男氏は、これら行幸には造営の催促の意味があったと推測されている。

- ・神護景雲3年（769）4月24日

『続日本紀』によると、称徳天皇が西大寺に行幸し、佐伯今毛人、大伴伯麻呂、息長丹生眞人大国、弓削大成、栗田公足、益田縄手、大野我孫麻呂が叙位に与るとある。造西大寺司の官人たちと判断されるため、中心的な堂である薬師金堂の完成をうけてのことと推測されている。また、この神護景雲3年（769）は、東大寺僧・実忠が御齋会に際して幡の木をつくるとあり（『東大寺要録』）、『資財帳』の寺宝のなかにも同年の施入物も見られるため、実際に法会が営まれたと考えられる。

- ・神護景雲4年（宝亀元年・770）2月

『続日本紀』に、東塔に心礎を据えたが祟りにより破却した記事が見られる。

丙辰（23日）、破却西大寺東塔心礎。其石大方一丈餘、厚九尺。東大寺以東、飯盛山

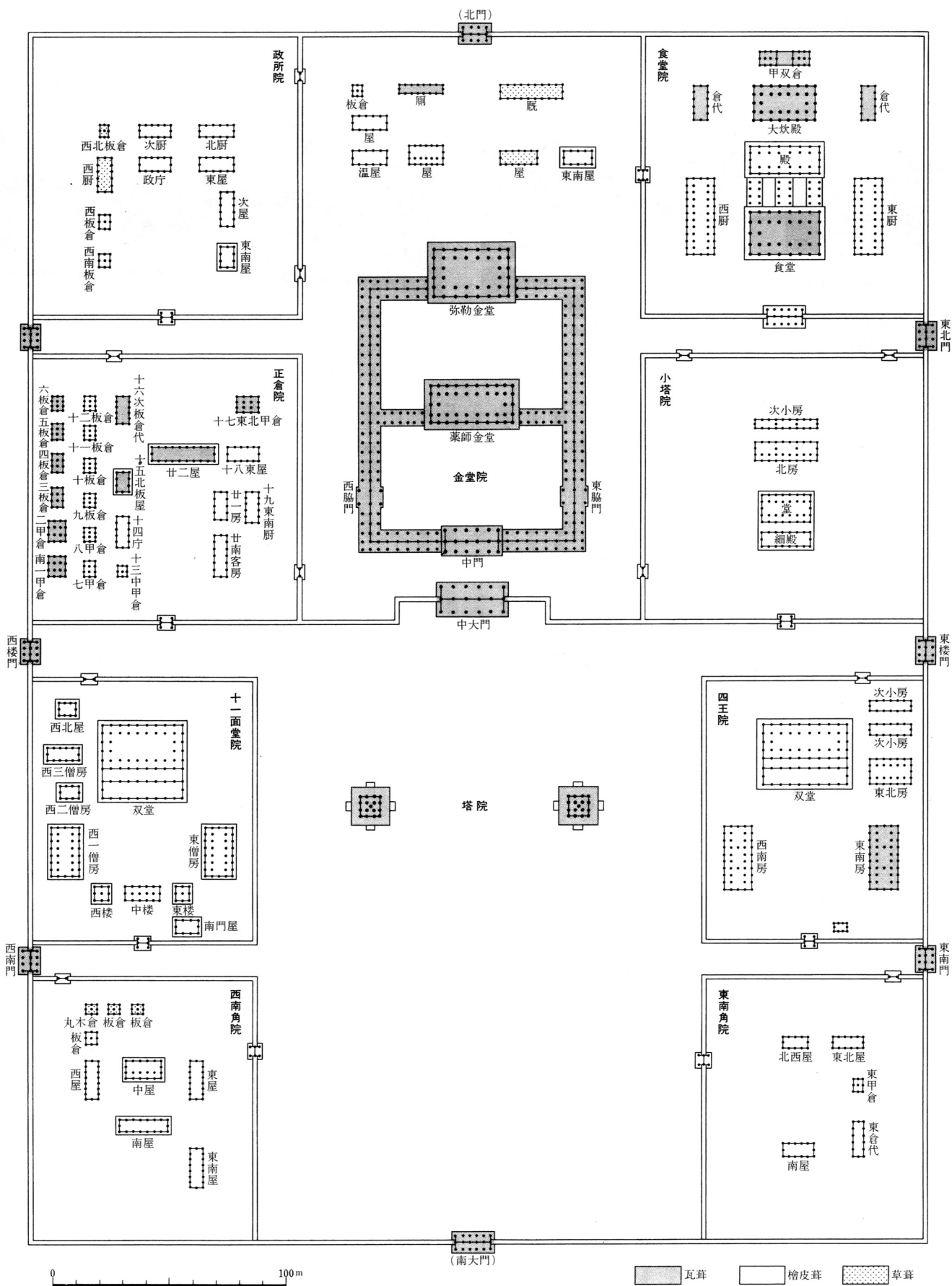


図 5.2 西大寺伽藍復原図

之石也。初以数千人引之、日去数歩。時復或鳴。於是、益人夫、九日乃至。即加削刻、築基已畢。時巫覡之徒、動以石崇為言。於是、積柴燒之。灌以卅餘斛酒、片片破却、棄於道路。後月餘日、天皇不忿。卜之、破石為崇。即復拾置淨地、不令人馬踐之。今其寺内東南隅数十片破石是也。

比較的長く引用したが、礎石の具体的な寸法値なども示されているため、後に詳しく検討する。

・神護景雲 4 年（宝亀元年・770）8 月 4 日

称徳天皇が崩御する。同時に道鏡も下野薬師寺へと送られて失脚し、これまで仏教政策を敷いてきた朝廷の方針は、光仁朝となることで大きく転換することとなる。西大寺の造営についても画期となったことが推測されるが、造営は継続されたことが窺える。

・宝亀 2 年（771）10 月 27 日

『続日本紀』によると、光仁朝のもとで、兜率天堂（弥勒金堂）の造営賞として正六位上の英保首代作に外従五位下が授けられた。

・宝亀 3 年（772）4 月

『続日本紀』によると、西塔に落雷があったという。その理由として、近江国滋賀郡の小野社の木のため祟ると記されている。

四月己卯、震西大寺西塔、卜之、採近江国滋賀郡小野社木、構塔為祟、また、西塔はその後の宝亀 7 年 7 月にも落雷がある。

・宝亀 11 年（780）12 月

『西大寺資財流記帳』が勘録される。なお、西大寺本と国会図書館本とで日が異なる。塔に関しては、『資財帳』では「塔二基 五重。各高十五丈」と記されており、ともに四角五重塔であり、完成していたことが分かる。

なお、造西大寺司はその後も存続しており、官人の任命は宝亀 9 年 8 月まで確認できる。佐伯今毛人も就任しつづけたことが、宝亀 5 年の西大寺図に署名があることから窺え、おそらく遣唐大使に就任する宝亀 6 年までは就任していたと思われる。

そのほか、工程に関する記事としては、西塔跡からは、寛政 6 年（1794）に「開基勝宝」「万年通宝」「神功開宝」が発掘されている点が挙げられる。これらは地鎮と思われる。このうちもっとも新しい「神功開宝」は天平神護元年（765）9 月から鑄造されているため、それ以降の造営であることは確かである。

2.2 造営計画の変更

次いで、塔の計画変更について述べたい。まずは『日本霊異記』巻下における藤原永手の説話（「滅塔階。仆寺幢。得悪報縁」第三十六）を紹介する。以下は、藤原永手が語ったこととして、

我令仆乎法花寺幢、後西大寺八角塔成四角、七層減五層也、

このように、藤原永手が八角七重塔を四角五重塔へと変更したことが記されている。なお藤原永手は宝亀2年に没しているため、上記の西大寺造営の時期と照合すると、永手の存命期と塔の造営の時期は一致しており、説話でありながらも年代には矛盾があるわけではない。

ほか、護国寺本『諸寺縁起集』に所収の『西大寺縁起』では、旧流記帳のこととして以下のよう

に記される。

旧流記帳云、(中略) 有八破七重塔破壊云々、

文中にある「八破」は「八角」の誤写と考えると、記録は八角七重塔がかつてあったことを示しており、『日本霊異記』にある七層の八角塔との記載と合致する。上述の通り、宝亀11年の『西大寺資財流記帳』では四角五重塔と記されるため、二つの流記において変更が示されることとなる。

次いで、現存遺構および発掘調査の結果について述べる。現在、現地で確認できる塔の遺構は東塔跡のみであり、これは四角平面塔跡で、方56尺ほどの基壇と、17個の礎石が残る。基壇は版築であり、表面の石積みは古代のものとは思えないが、礎石は（ひとつを除き）当初のものと考えられる。四角塔の初層平面規模は天平尺にて方28尺とみられ、その柱間寸法は、中央間10尺、脇間9尺と判断される。ほか、心礎は八角形に造り出されているため、心柱は八角であったものと考えられている。（この点より、この八角形の礎石が八角平面塔の時の心礎のままであるとする見解があるが、一般には四角平面の塔でも心柱が八角となる事例が多いため、以上のような見解は成り立たない。）

また、塔跡の発掘調査からは、八角塔が、四角塔より先行していたことが判明した。対辺長が90尺ほどの八角形の基壇の跡が、東西両塔ともに見られ、四角塔の基壇の下にある。この平面の大きさより、塔は五重ではなく七重と考えても良く、また東大寺七重塔への対抗意識からも七重塔として企画されたものと想定される。

以上のように文書記録と発掘調査の結果を照合すると、八角七重塔から四角五重塔への変更があったと考えてよく、上記の『日本霊異記』の説話にある計画変更は、藤原永手に起因するかどうかは別としても、事実であったことが認められる。

3. 思託の八角塔様と八角塔の造営

それでは、以上の造営過程の観点から、思託の八角塔様について検討を加える。この様については、古くは板橋倫行氏が、思託の様でもって実際の塔が造営されたとの見解を示されている。

板橋氏は、「惟ふにこの八角七層といふ珍奇な構造も思託その人が齎し来つた新智識に基いたものではなかつたらうか。そしてこの珍奇な構造こそ建立後数年を出でぬ宝亀元年に破壊の運命に陥らせた原因ではなかつたらうか。」と述べられているとおり、思託の影響の程度を推測されている。思託の様が実際の八角七重塔へ影響したことは、その後の研究においてもおおむね認められている。後述の足立康氏や福山敏男氏は若干異なる見解を示しているが、これらは後に検討したい。

西大寺東西両塔の造営については、当初八角塔の着工、八角塔から四角塔への計画変更、四角五重塔の竣工の、それぞれの時期判断が問題であり、また、東西それぞれ両塔の造営過程期も一致するか不明瞭でもある。

太田博太郎氏は、西塔については、神功開宝が地鎮に用いられている点や、宝亀3年や7年の落雷の時にはある程度は完成していたと考えることから、「思託の伝と併せ考えると、神護景雲の初めに着工し、宝亀初年に完成したものであろう」とされている。一方の東塔については、上述の神護景雲4年（宝亀元年・770）に心礎を据えたが破却した記事より、「西塔より遅れて造営されたい」と述べられている。また計画変更については、宝亀3年の落雷、藤原永手の没年は宝亀2年、現存する東塔心礎が八角形という点から、「称徳天皇が崩御されたときには、ある程度工事が進んでいたのを、急遽、設計変更をして縮小したのであろう」と述べられており、設計変更が称徳天皇の崩御以後に行われたものと判断されている。

当初着工については、神護景雲4年（宝亀元年・770）2月にある東塔心礎の据え付けと破却が参考となる。心礎は一丈の巨石と記される、この礎石は大きさからも八角七重塔のものと判断され、この時点では八角塔が着工して間もない段階と考えて良い。

ならば、西塔についてもこの時点では計画変更が可能な程度の進行具合である必要がある。すなわち、あまり進行していない。太田氏は、西塔は宝亀3年には落雷をうける程に完成していたことから工期を逆算して、「神護景雲の初めに着工」と判断されているが、着工が地業工事を指すのであれば、やや早すぎる。

神護景雲3年（769）4月の行幸が、薬師金堂の完成とすると、それ以後に塔の造営に本格的にかかったのではないだろうか。その場合、東塔心礎の工事が翌年の神護景雲4年（宝亀元年・770）2月というのは、造営の時期としては辻褄は合う。思託による塔の様は、必ずしも神護景雲の初めに完成しなければならないということにはならない。

いずれによせ、工程から考えて思託の記述には矛盾はない。また、八角平面が事実なので、思託の八角塔様は実際になんらかの参考とされたと認めて良い。これは「様」の一般的な用例とも矛盾しないという点においても重要な事実である。

計画の変更は、発願主体である称徳朝の方針が転換されることを意味しており、衰退や天皇崩御が考えられよう。神護景雲4年（宝亀元年・770）8月の崩御の以前にも、前年の初秋には宇佐八幡宮神託事件があり、朝廷指針の混乱や撤回は見られる。したがって、設計変更は2月の心礎の祟り以降あたりまで、引き上げて考えることも可能ではないか。この点は、以下の四王堂八角小塔と関係する。

4. 四王堂の小塔

思託の八角塔様は、『西大寺流記資財帳』の四王堂に安置された小塔との関係が先行研究では取り上げられる。すなわち、同じものに比定しうるかという考察があり、議論は分かれている。

四王堂

八角塔一基 五重 露盤木押金薄
火頭菩薩像二軀 各高一丈一尺一寸 壘在拳身光
金銅四王像四軀 各高七尺（後略）

この記述には、八角塔の高さなどの法量は記されていないが、堂内に安置された点、相輪（露盤）が木製であり、金箔を押して鋳物を模している点などから、小塔であると認められる。なお、割註の記述については、「露盤未押金薄」とする史料が確認されているが、資財帳に「未だ押さずと」記されることは不自然であるため、「未」は「木」の誤記と考えて良いだろう。

四王堂内の安置仏は、一基の八角小塔、二体の火炎菩薩像、四体の金銅四王像との体数なので、これらは堂内の何らかの須弥壇上において、記述の順番にて中央から安置されたことが推察される。町田甲一氏は「四王堂内には、中央に八角五重の宝塔が一基安置され、その左右に拳身光をそなえた高さ一丈一尺に余る乾漆の火頭菩薩像が随侍し、さらにその須弥壇の四隅をまもって、（中略）金剛四天王像が配置されていたようである」と述べられている。すなわち、八角小塔は四王堂の中央に安置されていたと認めて良いだろう。なお、西大寺の諸尊には密教系が含まれており特異であることが知られているが、とりわけ四王堂の安置仏の火頭菩薩は非常に稀有な例であることが近藤有宜氏によって指摘されている。

この四王堂の八角五重小塔について、紹介以上の検討を加えている先行研究を以下に挙げて、思託の八角塔様との関係について改めて検討したい。

足立康氏は、思託の八角塔様を小八角塔という模型と考え、これを『資財帳』にある四王堂の八角五重小塔に比定されている。しかし、この思託の様は「中止した八角塔の雛形でないことは

明らか」と見なし、八角七重塔とは「なんら関係がなく、結局本問題から全く切り離して扱うべき」とされ、実際の七重塔の雛型とはなり得ないという。すなわち、足立氏の解釈は、思託の八角塔様とは、七重塔の設計を直接的に目的としたものではなく、礼拝対象のためのものと見なすこととなる。この場合の「様」の語義は、規範性・手本等を含むものではなく、「小建築」という意味として解釈されていると考えられる。

福山敏男氏も、同じく四王堂内の八角塔は思託の手によるものとする見解を示されており、四王堂の安置仏について、「堂内にはこの寺の縁起に出て名高い金銅四王像四体があつた。同じ堂内にあつた五重の八角塔は、その露盤（相輪）が木造で金箔を押したものと記され、足立康博士の推測のように、思託が作った八角塔様（延暦僧録）に相当するものであろう。」と述べ、足立氏の見解を踏襲されている。一方で、規範性・手本等としての「様」の語義について、「延暦僧録の思託の自伝に、景雲年間、勅命をうけて西大寺の八角塔の様を造つたとある。これは早く板橋倫行氏によって注意されている。様はタメシとよみ、手本とか試作の模型とかいう意味である。元興寺極楽坊の五重小塔などは五重塔の様の一例であらう。」とされており、西大寺の八角七重塔の計画に思託の八角塔様が手本として機能したことを推測されているように見られ、この点に関しては足立氏と異なる。

しかし、建築史からの見解は、上記2名によって占められている訳ではなく、岡田英男氏は以下のように異なった解釈をされている。

『延暦僧録』思託伝によると思託が神護景雲年中、勅により八角塔の様を造っているが、様は「タメシ」であり、八角七重塔の雛形であつたかもしれない。宝亀11年の『西大寺資財流記帳』によると四王堂に八角塔1基があつたがこれは五重であり、思託の「タメシ」とは別のものであろう。」

このような岡田氏の見解は、以下に挙げる各氏の見解と同じである。

まず田中重久氏は、四王堂の完成を天平神護2年と見なし、そのため神護景雲に作成されたという思託の様とは時期が合わないとする。これは四王堂八角五重小塔は四天王像と同時に作り始められ、四王堂の完成時に、四天王像とともに安置されたという点を前提としている。また、岡田氏と同様に層数の差を指摘し、「四王堂の小塔は五重で、八角七重塔の雛型として造られたものではない。雛型でもないものを「塔様」とは言はない。」と述べられる。四王堂の八角五重小塔が安置された目的としては、「創立当初の西大寺、即ち四王院が、別に塔を有たなかつたのは、四王堂の中央に小塔を置いたからで、之は実に名案であつたと思ふ。四王院には塔あり、仏堂あり、礼堂あり、僧房あり、立派に一寺の体をなしてゐた訳である。」と述べられており、その根拠は、四王堂がひとつの完備された当初西大寺を代表する院であつたという根拠に基づく。

また、近藤有宣氏は、計画変更後および称徳没後に、称徳の霊を鎮める目的で、称徳由来の八

角塔という観点から四王堂八角五重小塔は安置されたと解釈されている。

これらを踏まえて、以下に整理を行いつつ、検討を加えてゆく。両者は同じであるとする、思託の様とは模型であることとなり、設計計画後には礼拝対象となったことになる。これに対する反対意見を述べてゆく。

まず、神護景雲と時期が一致しない点を田中重久氏が指摘している。これは、八角小塔は四王堂の竣工と同時に安置されたと考えることが前提であり、四王堂の完成が天平神護2年12月、思託の八角塔様が神護景雲年のため、竣工後に遅れて八角小塔が安置されることはありえず、四王堂内の小塔は思託の八角塔様とはなりえない、とする。しかし、上述の近藤氏の指摘の通り、四王堂の竣工は必ずしも天平神護2年12月の竣工とはなりえず、翌年の神護景雲以降に想定することもできるため、四天王像の完成も遅れたという説話もある。

次いで、四王堂竣工と同時に安置だと、東西八角両塔を造営するにもかかわらず、四王堂にも小塔を納めることとなり、西大寺には八角塔が重複して存在する構想であったこととなる。その場合はなぜ重複して安置するかという意図が不明である。しかし、結果的には四角五重塔と八角五重小塔が併存したという事実になるため、重複することをもって否定する強い根拠は与えられない。また四王堂は、西大寺発願の由緒たる金銅四天王像のための堂であり、八角五重小塔はより従属的と考えられたとすると、四王堂の八角小塔の意義は薄く、重複と考えるほどには当たらないという解釈もある。

また大きな矛盾点は、小塔の五重と実施の七重との相違である。四王堂の八角小塔は五重塔であるため、『日本霊異記』の記述や発掘調査から推測される七重塔と一致しない。

層数が異なれば、規模をはじめ、全体の形姿や材取りなども大きく異なる。その場合は、様とは別に、より実施に則した計画が必要となるため、様が寄与する計画性が限定的となり、田中氏が「雛型でもないものを「塔様」とは言はない」と述べるところである。しかし、層数が異なるとしても相互に強い影響関係が見られるものに、法隆寺五重塔と法起寺三重塔の例があり、この場合は法起寺三重塔が五重塔を参考としたことが窺える。また、各層逓減率にしたがって、五重小塔から二層を増して七層の塔を計画できるという見方もできる。

足立氏が、この両者の層数の差から、思託の様は「中止した八角塔の雛形でないことは明らか」であり、八角七重塔とは「なんら関係がなく、結局本問題から全く切り離して扱うべき」とされながらも、「されど別な意味に於いて、これら両者の間に全然交渉が無かったとは断言することができないように思う」と記す「別な意味」とは、そのような建築計画上での融通を認めた解釈かと思われる。また、太田博太郎氏が「新たに八角塔を建立しようとしたとき、(中略)すでに四王堂に八角小塔があったのであれば、(勅によって思託へと・・・筆者加筆)改めて設計を依頼する

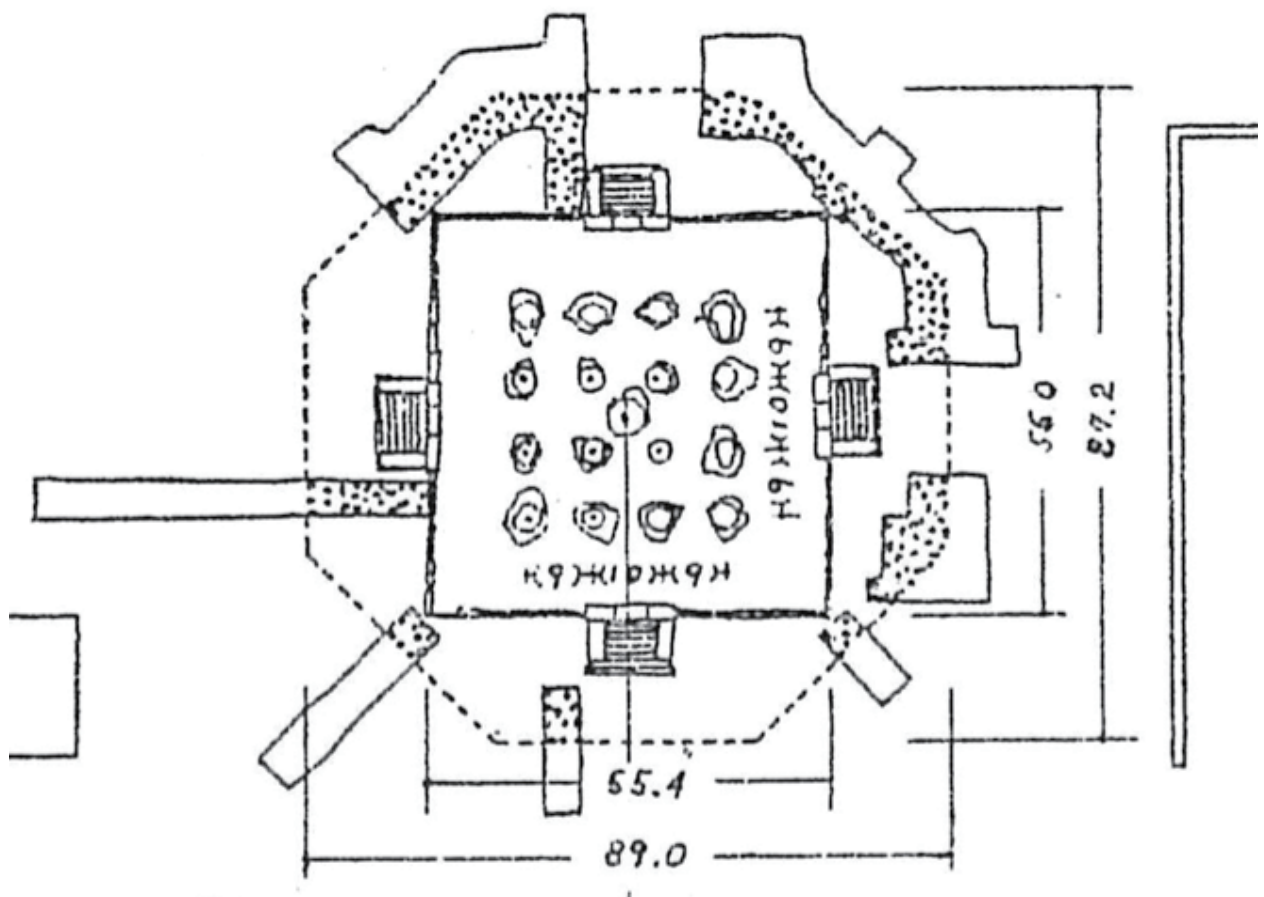
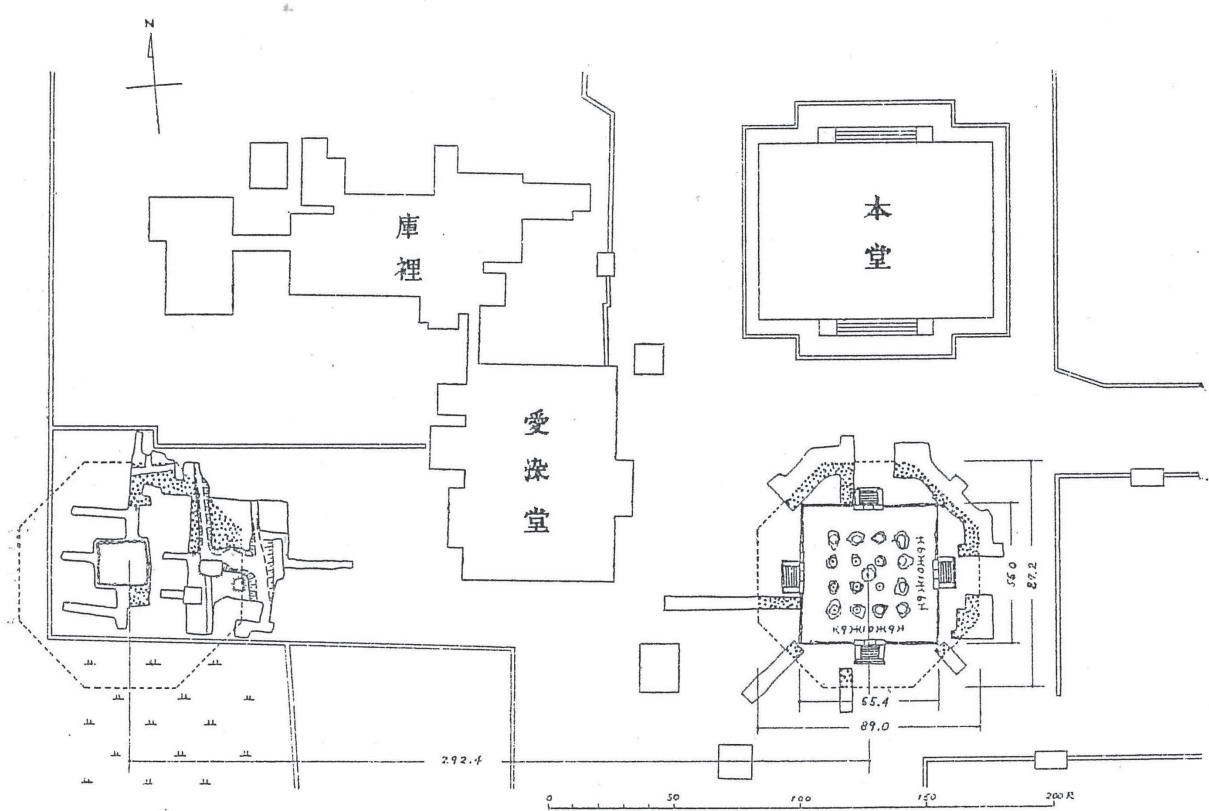


図 5.3 西大寺東西塔跡発掘調査図（上：全体、下：東塔部分拡大）

必要はないものと思われる」と述べられる見解も同じであり、ここには、四王堂の八角五重小塔は、西大寺の東西八角七重塔の設計に対して参考となりうるという視点があることになる。つまり、これら両名は、層数の差を認めながらも、設計計画としての規範性・手本等の性格は失われないという点を述べており、機械的に七重と五重とが異なるため参考にならず「様」とは言い得ないという判断を退けている。

あるいは、層数の差は別としても、八角塔の意匠上の形容・様態についても、参考となりうるという見解でもある。これは「様」の語義あるいは示す状況についての検討であり、様の概念の拡張を求める。従来は、様とは、忠実な複写、そのまま機械的に参考とすることなどとして考えられていたが、しかし必ずしもそうではなく、様の融通性についても認めている視点である。それは様の資料形態によっても異なり、粉本や文書様式などは忠実さが求められようが、建築においては融通があり、例えば元興寺極楽坊五重小塔は実際に全く同じく照合する五重塔が発見されていない以上は、そのような例として考えて良いだろう。

以上、資財帳に見える四王堂内八角五重小塔が、思託の様とした場合の検証を行った。

次いで、異なるものとする、八角五重小塔の造立の由来が不明となる。完成時期も不明となるが、近藤氏は、称徳天皇の崩御以後に、八角七重塔の建設が変更となり、称徳天皇の鎮魂の意味を込めて造られ、四王堂内に安置されたと推定されている。

この場合は、当初は四王堂内部には八角小塔がないことになり、それにも関わらず八角小塔は四王堂安置仏の一番目に挙げられている点が気にかかる。心礎破却の記事が神護景雲4年（宝亀元年）2月であり、少なくともそれまでは計画変更はなく八角塔造営で進行していたと考えられるが、その時に四王堂は未完とは考えがたい。そもそも神護景雲3年4月には造営上の大きな画期があり、行幸や御齋会が行われているため、遅くともこの時までには四王堂は完成していたと見て良い。すなわち、四王堂完成後に八角小塔は遅れて安置されたということになる。近藤氏は火頭菩薩像が十一面堂院から移されたとするため、小塔も後から安置とすることの妥当性を提示されている。火頭菩薩は密教系であり、道鏡の影響があるという。八角小塔も称徳天皇ゆかりであり、火頭菩薩も道鏡ゆかりとするが、小塔は最勝王経の世界観と通ずるのではないか。この問題は次節にて改めて取り上げたい。

5. 四王堂の堂内空間

八角五重小塔は、当時の小建築の通例として尺度1/10で造られたと考えられる。すなわち、相応の高さであったと考えられる。そこで、以下では堂内空間の高さについて検討する。

四王堂は、双堂で総8丈6尺なので、梁行は4丈ほどの堂と考えられよう。奈良時代後期の堂

としては、新薬師寺本堂が梁行 5 丈であり、基壇床より天井棟木まで 26.5 尺ほどであるが、実際には壇 (3 尺) があるため、天井高さはより低い。次いで東大寺法華堂では壇上より天井まで 23 尺、唐招提寺金堂 (三手先組物) は、梁行 49 尺 (天平尺・造営尺にて) に対して、室内高さは内陣床上より天井格縁まで 27 尺である。

庁堂形式である新薬師寺本堂を基準とすると、4 丈の堂で野垂木が天井までのびる状況を考えて、床上から天井棟木下まで 23-24 尺ほどではないか。ただし、新薬師寺本堂は瓦葺き、四王堂は檜皮葺なので、四王堂の場合は屋根勾配を急にでき、より高い天井高さ寸法を確保できることとなる。

したがって、安置できる小塔の限界としては 2 丈以下ではないか。実際に建立となった資財帳にある四角五重塔も高 15 丈である。

これより、室内の八角小塔が五重である理由は、室内高さに起因する。もし初層 60 尺ほどの八角七重塔による小塔だとすると、2 層を減じた五重としてもその初層はおおまかにでも 50 尺であろう。したがって総高さは 20 丈、1/10 としても 2 丈となる。八角小塔の脇侍である火頭菩薩も高さが 1 丈 1 尺と記されており、非常に大きな立像であるが、それより小塔が高い方が荘厳としても成立するだろう。これより、思託の様は、室内に安置しうることが分かる。

6. 八角塔の技術

発掘調査より、西大寺両塔とも基壇は八角と判明し、その径すなわち対辺長は 90 尺程 (一辺 37.3 尺程) と測ることができた。そのため報告では「塔初層の径は 60 尺を下らぬことゝなろう」とし、総高 300 尺と推測されている。しかし、単純に 5 倍しているが、遞減が四角塔とは異なるはずである。

比較のために平安時代の院政期に造営された法勝寺八角九重塔について述べる。古記録により高さが 270 尺と伝えられているが、発掘調査からは八角形の基壇の一部が確認されており、八角径約 32m、一辺長 12.5m ~ 14.5m、である。基壇だけでも西大寺八角塔よりも大きい。さらに、層数も九重であり、より規模が大きかったことが窺える。それでも、その高さが 270 尺なので、基壇がより小さく層数も七重と少ない西大寺八角塔の高さが 300 尺を超えることはない。

また、「塔初層の径は 60 尺を下らぬことゝなろう」とあるが、変更後の四角五重塔では、基壇の出は 14 尺、軒長はそれより大きい。塔の柱間寸法と基壇の出については、箱崎氏の表より比較ができる。八角基壇の径が 90 尺なので、八角塔の初層平面は対辺長は 60 尺以下かと考えられる。

もっとも、西大寺八角塔の構造形式については、史料や遺構からはまったく不明である。特に、内部の入側柱の位置やその身舎の平面は重要でありながら、四角 (栄山寺八角堂や檜原廃寺) か、

八角（法隆寺夢殿）かが考えられる。また、身舎部分の梁も対辺に繋ぐかどうか問われ、四角塔ではそれが標準であり、後世の安楽寺八角塔では繋ぐものの、中国の応県木塔では繋がない。

計画変更によって、塔の規模は小さくなったとは言いが、もちろん平面でも面積、総高、材の量など、総じて規模の大小は明瞭ではあるものの、平面上として見ると、かえって八角平面では、全体径が60尺の場合で八角各辺の一辺長は24尺8寸となり、四角五重塔の初層一辺長の28尺より大きくはない。四角五重塔の柱間寸法は9、10、9尺であり、八角塔の側柱は、七重までである以上、各辺は三間としたであろう。また柱間寸法は、隅一組物形式に類似させるため、中央間を脇間より大きく取ったはずである。したがって、柱間寸法は、四角塔のそれよりも小さいはずである。軒出も、隅行き方向でも四角が延べとなることと比べると、より短くなる。

したがって、計画変更によって、桁や貫などは、より長い材が必要となる。すなわち、発掘調査から窺える八角塔の平面から考えると、八角七重塔と四角五重塔とは寸法計画に親和性があったと推測したい。八角七重塔から四角五重塔への変更は、大きな規模を減じることで、材取りなどを有効に移行できるように工夫されたものと考えられよう。礎石も、心礎は破却されたが、そのほかの側柱や入側柱の礎石は、転用されたことが推測される。

また、様の形態についても、渡来層である思託の製作によるものであるため、おそらく唐風のものであったと推察される。安藤更生氏は「『資財帳』に見える薬師金堂や弥勒金堂に異国情緒豊かな唐風様式の多いのは、思託の技と関係があるのだろう。」と述べられており、思託は塔のみならず、西大寺の全般について意匠的指揮を取ったものと推察されている。その真偽は定かではないが、少なくとも、当該時において八角塔は諸寺には存在せず、ただ八角堂のみであり、また確かに薬師金堂や弥勒金堂が特異な意匠をとっていたことを考えると、思託の様も異国風であっただろう。なお安藤氏は「思託が建築術に関係のあったことは、西大寺に営まれようとした八角五重塔の模型を造っていることで知られる。」（安藤更生『鑑真』）と述べられ、「五重塔の模型」という記述からは、四王堂内の八角五重小塔を思託の様に比定されているようにも考えられる。七重については触れられていないが、「この塔は作りかけで終に実現せずにしたようだが」とあるのは、四角五重塔と混同されている可能性もある。

7. 思託と造営関係者

思託は、様を作成したとされる神護景雲年間には、大安寺唐禅院に止住していた。思託は、唐招提寺の諸尊や、諸堂の造営に携わったという伝承もあり、また師の鑑真の伝承にも、塔にて寺院を多く修造したとあり、特に揚州の崇福寺では八角七重塔（九重塔）の修造に関与したとあり、その弟子である思託も関与した可能性もある。

西大寺八角塔の計画に際して、思託が選ばれた理由も上記に由来する可能性もあるが、しかし、あくまで僧侶である思託が単独で作成できるわけではなく、工匠等の協力があっただろう。

その場合、考えられる組織が、造西大寺司である。あるいは、西大寺の造営は、造西大寺司の設置までは造東大寺司が担ったことが知られるので、造東大寺司とも関係があったとも考えられる。特に、造西大寺司長官であった佐伯今毛人は、当然のことながら思託と関わったはずである。そもそも思託撰述の『延暦僧録』に佐伯今毛人は掲載されている。

また、思託と早良親王との関係も窺える。早良親王は、はじめ東大寺にて修行したが、後に大安寺へと移住し、その時期は神護景雲2年か3年と記録されている。記録に差があるが、そのいずれかの神護景雲の初めであったのだろう。早良親王は文人との繋がりがあり、後に淡海三船と親交を深めている。淡海三船は、思託が鑑真の伝記である『大唐東征伝』の執筆を依頼している関係があるため、早良親王と淡海三船との関係は、思託が仲介したものと考えられる。すなわち、そこに唐文化を旨とするひとつのグループができていたことが窺える。

それら関係が、様の作成された神護景雲まで遡れるかは疑問ではあるが、早良の移住の時期から判断すると、考えられよう。特に早良親王は、「大安寺碑文」によって大安寺修繕に携わったことが知られている。したがって造営関係に関与した人物である。大安寺における立場として「造寺別当」の性格が窺え、かつての道慈を引き継ぐ存在であったと考えられる。すなわち造営に造詣が深い人物であるため、思託の八角塔様の製造に当たっては、佐伯今毛人や造寺司との協業について、便宜を図った状況が窺える。

8. 結語

以上の考察をまとめると、神護景雲年間（767 - 770）に渡来僧・思託が製作した西大寺の八角塔の様は、西大寺伽藍造営の進捗状況と照合した結果、称徳朝のもとで八角七重塔として着工した西大寺の東西両塔の計画に寄与したと考えて良い。また西大寺四王堂にかつて存在した八角五重小塔は、着工した八角七重塔とは層数の相違はあるものの、思託が制作した様へと比定できる可能性を提示した。

注

注 1) 西大寺八角塔造営に関する基本的な論考として、以下がある。板橋倫行「日本寺院史雑攷（一）」、『東洋美術』1、1929.4、足立康「西大寺八角七重塔に就いて」、『東洋美術』12、1931.7、大岡実・浅野清「西大寺東西両塔」、『日本建築学会論文報告集』54、1956.10、浅野清「西大寺東西両塔跡の発掘」、『仏教芸術』62、1966.10

注 2) 『西大寺流記資財帳』「四王堂」の項

注 3) 叙位関係者を検討した近藤有宜氏により、神護2年の時点では四王堂は未着工とする見解が出された。

近藤有宜「創建時西大寺の伽藍造営の初期の様相について」、『奈良美術研究』5、2007.3

- 注4) 『扶桑略記』より。なお町田甲一氏は、四天王像四体が1年で完成するのは困難とし、すべてが完成したのは宝亀8、9年(778、9)とされる。「四天王立像」『奈良六大寺大観 西大寺』、1973.5 初版、2001.11 補訂版
- 注5) 佐藤信「西大寺と奈良時代の歴史」、『西大寺古絵図の世界』、2005.2
- 注6) 吉村怜「西大寺八角塔について」、『綜合世界文芸』13、1958.1
- 注7) 足立氏は、西塔は七重塔として、東塔より先行して造営されていたという。以後に造営された五重塔は、七重塔とは併存し得ないため、七重塔は計画変更の際に破壊されたとする。上述「西大寺八角七重塔について」
- 注8) 橋本政良「僧尼令とその施行について」、『続日本紀』127、1965
- 注9) 鷺森浩幸「奈良時代の僧綱の展開 - 官司機構との関係における -」、『日本史研究』294、1987.2
- 注10) 森郁夫「造営技術僧の活躍」、『日本古代寺院造営の研究』、1998.2
- 注11) 加藤優「良弁と東大寺別当制」、『文化財論叢』、1995.2
- 注12) 牛山佳幸「諸寺別当制をめぐる諸問題」、『古代史研究の最前線』2、岡野浩二「俗別当の造寺・寺領監督と檀越の動向」、『国史学』185、2005.2
- 注13) 『続日本紀』における満誓、および『延暦僧録』に佐伯今毛人と良弁を「造寺別当」とすることによる。加藤氏は「造寺別当とは官職名というより、造寺を担当するものという意味での通称的な名称に近いもの」とされる
- 注14) 鷺森浩幸「奈良時代における寺院造営と僧 - 東大寺・石山寺造営を中心に -」、『ヒストリア』121、1988.12
- 注15) 注5) に同じ
- 注16) 仁藤敦史「太上天皇の『詔勅』について」、『律令制国家と古代社会』、2005.5
- 注17) 吉川真司「奈良時代の宣」、『史林』7-4、1988.7
- 注18) 斉藤孝「孝謙太上天皇勅願鏡について」、『史泉』16・17、1959.12
- 注19) 注11) に同じ

本論 第6章

国分寺および大安寺造営における図と様の関係

国分寺および大安寺造営における図と様の関係

1. はじめに

本研究は、古代建築界にて造営資料として記録される「様」に着目し、その造営上果たした機能を明らかにすることで、建築形態などの決定および情報伝達の状況を明らかにすることを目的としている。本章では、「様」の解釈の拡大を意図し、一般的な造営資料である「図」との関係について述べるものである。

2. 国分寺造営における「図」と仁寿舍利塔の「様」

仏法による鎮護国家を祈願し諸国に寺を建造する国分寺建立の事業は、天平勝宝4年(752)に総国分寺である東大寺にて大仏の開眼供養があったが、完了には時間と労力を要し、地方諸国では遅滞が見られた。天平感宝以降、朝廷からの造営の直接的指導が積極的となるが^{注1)}、とりわけ天平宝字3年(759)11月辛未には諸国へ国分寺と国分尼寺の「図」を配り、造営の促進をはかったことが知られる(『続日本紀』)。

頒下国分二寺図於天下諸国

この「図」に対する検討としては、角田文衛氏が想定される資料形態の可能性の候補をまとめられており、結果としては伽藍配置図とされている^{注2)}。古代の伽藍図としては、現存する「東大寺四至図」や「東大寺講堂院図」(呼称は『奈良六大寺大観』に従う)、「額田寺伽藍並条里図」などが想定されるだろう。各国分寺の発掘成果からは、伽藍は東大寺の配置から塔を一つに改めた例が多いことが判明したが、一方でその他の形式の例も多くあるため、「図」が伽藍図とすると頒下の成果に疑問が持たれる。かえって、金堂や塔の平面形式には一致する傾向があり、特に塔の平面は寸法値も共通する例があるため^{注3)}、また、国分寺造家の後期という建造の時期として塔の構造図とも考えられる。しかし、尼寺に塔はないため、この節も確証できない。性質の異なる図をまとめて配布し、総称した可能性も考えられるが、依然として比定は困難である。

中国隋朝の文帝による仁寿舍利塔の造営は、仁寿元年(601)、同2年、同4年と三回にわたって、全国各地に111件の舍利塔が建立された^{注4)}。『広弘明集』巻十七所収の「隋国立舍利塔詔」によると、塔の建立に際して「様」を配布したことがわかる。

分道送舍利、往前件諸州起塔、其未注寺者、就有山水寺所、起塔依前山、旧無寺者、

於当州内清静寺処、建 立其塔、所司造様、送往当州

小杉一雄氏は、この「様」の存在をもって塔の建築様式 が規定され、二回目、三回目の造立もこの形式が踏襲されたと解釈される^{注5)}。その形式については、憫忠寺(現・法源寺)へ舍利を移した景福元年(892)の記録である『金 石萃編』卷百十八所収の「重蔵舍利記」に、もとの仁寿の舍利塔について、

創造五層大木塔、飾以金碧

とあり、また『攝山志』卷三には

隋文帝所造舍利塔歳久剥蝕金碧毀落

とあるため、舍利塔は木造五層の建築形式にて統一されたとされる。しかし、近年陝西省周至県にある仙游寺の法王塔が現存する唯一の仁寿舍利塔の例として報告され^{注6)}、これは密檐式の磚造七層塔であるため、報告が正しければ形式に差があることになる。ここで問題とするべきは「様」の形態であるが、舍利塔の形式は不明のため、様との関係も推定できず、その資料形態の比定は難しい。

以上より国分寺造営の「図」と仁寿舍利塔造営の「様」を比較するが、まず造営全体の性格として、主に以下の類似点を見出すことができる。

- ・ 仏教政策上の造営事業として類似する。仁寿舍利塔建 立事業が国分寺建立事業へ与えた影響については直接的には不明であるが、入唐僧を介して情報は伝えられていたと推測される。
- ・ 仏教建築という建築種類が類似する。特に立地条件を指定するという点も共通する。
- ・ 全国規模で、中央から各地の造営建立に下した資料として共通する。場合によっては啓蒙的な意味も含め、促進や支援、指導的な性格が類似する。

異なる点としては、国分寺造営は寺院そのものが対象で あることに對し、仁寿舍利塔は塔単体に限られ、造営の規模が異なることが挙げられる。しかし上記の通り資料の機能する条件としては同じである。よって、国分寺造営に頒下された「図」は、仁寿舍利塔の事例と引き合わせて、「様」に極めて類似する存在と考えられる。

表 6.1 国分寺造営年表

年		月	事項	出典
和暦	西暦			
天武14年	685	3月	諸国の家毎に仏舎を作り、仏像、経を置き礼拝供養させる	『日本書紀』
持統8年	694	5月	諸国に金光明経を送り、毎年正月の上弦に読ませる	『日本書紀』
大宝2年	702	2月	諸国に国師を任ずる	『続日本紀』
神亀5年	728	12月	金光明経を諸国に頒つ	『続日本紀』
天平9年	737	3月	国毎に釈迦三尊像を造らせ、大般若経を写させる	『続日本紀』
天平12年	740	6月	国毎に法華経を写させ、七重塔を建てさせる	『続日本紀』
天平12年	740	9月	国毎に観世音菩薩を造らせ、観世音経を写させる	『続日本紀』
天平13年	741	2月	国分寺・国分尼寺建立の詔を発する 国毎に七重塔を造り、金光明最勝王経・法華経を写し塔に納めさせる 僧寺を金光明四天王護国之寺、尼寺を法華滅罪之寺と命名する	『類聚三代格』
天平15年	743	10月	毘盧舎那仏金銅像造立の詔を発する	『続日本紀』
天平16年	744	7月	国毎に国分寺・尼寺に正税各二万束を割き、出挙の利を造寺料に充てさせる	『続日本紀』
天平16年	744	10月	国分寺の造営を督励するため、国師も関与させる	『類聚三代格』
天平19年	747	11月	国分寺の造営の遅滞を国司郡司に督励する さらに田地を開墾させ二寺に施入させる	『続日本紀』
天平勝宝4年	752	4月	東大寺盧舎那仏の開眼供養を行なう	『続日本紀』
天平勝宝8年	756	5月	聖武天皇崩御	『続日本紀』
		6月	諸国に使工を遣し、国分寺丈六仏像を催検させる	『続日本紀』
		6月	聖武天皇の一周忌までに国分寺造営を終えるように命ずる	『続日本紀』
		12月	丹後、伯耆、出雲、備中などの26国に、国別に灌頂幡などを頒下す	『続日本紀』
天平宝字3年	759	11月	国分二寺の図を諸国に頒下す	『続日本紀』

3. 大安寺造営における「図」

平城大安寺の造営は、『続日本紀』天平 16 年 10 月辛卯条にある「道慈卒伝」が著名である。

属遷造大安寺於平城、勅法師勾当其事、法師尤妙工巧、構作形製皆稟其規摹、所有
匠手莫不歎服焉

道慈が大安寺の造営に関係したことは『大安寺碑文』や『懷風藻』に残るが、特に造営において「図」の記述が見られるのは、諸資料のうち大安寺が西明寺を模倣したと述べる箇所に限られる。服部匡延氏はこれを「西明寺模建説」として、資料群の整理、説成立の経緯や影響、大安寺と西明寺の遺構の比較などから検証を加え、結果として「模建説」には潤色があり、西明寺の模倣とは言えないことを明らかにした^{注7)}。以下は西明寺図の記述を抜粋し、その文面にて分類を試みたものであるが、服部氏による資料分類と一致するため、氏の分類名称を便宜上援用した。

A (「大安寺縁起」という独立した書名を持つ資料群)

・『諸寺縁起集(醍醐寺本)』、「大安寺縁起」

自唐国来此朝、但有一宿念、欲造大寺ヲ、偷図取西明寺結構之體

- ・『諸寺縁起集(護国寺本)』、「大安寺縁起」

自唐国来聖朝、但有一宿念、欲造大寺、偷図取西明寺結構之體

- ・『扶桑略記』天平元年条

自唐国来、但有一宿念、欲造大寺、偷図取西明寺結構之躰

B (独立した書名を持たない資料群)

- ・『七大寺巡礼私記』、大安寺の項

養老二年帰朝、奏文云、道慈渡唐之時、心中誓願、若安〔穩〕帰朝者、可立大寺、為
遂其志図於唐西明寺之〔様〕所持来也云

- ・『建久御巡礼記』、大安寺の項

大唐ヨリ我朝ニ還ル、但一ノ有リテ宿念、造ラムト大寺ヲ思テ、唐西明寺ノ様ヲ遷
取りテ来レリ

- ・『諸寺建立次第』、大安寺の項

而ニ大唐ヨリ此ノ朝ヘ還カヘル、但一ノ宿願アリ、大ル寺ヲ造立セムト思フ、即唐
ノ西明寺ノ図ヅヲ移シテ取テ持来レリト申ス

- ・『三宝絵詞』下、「大安寺大般若会」

心の中に大なる寺をつくらむと思て西明寺の構へ作れるさまをうつしとれり

上記 A 群と B 群それぞれの資料間には明らかな相関関係が認められるが、両群資料の文面の差も明白である。服部氏は、A 群および B 群資料の元となる「原縁起」の存在を推察し、「模建」の記述自体をこの祖本にあるとされた^{注8)}。そのため、「原縁起」の成立時期は遡り、「大安寺縁起」が注進されたとある寛平7年(895)にはその内容は確たる事実のように流布していたとされ、「西明寺模建説」の伝承の古さを指摘されている。

その一方で、服部氏は、「模建説」には潤色があるが全くの虚実とは言い切れず、必ずしも西明

寺のみを手本としたのではなく、長安諸寺からいろいろな手法を取り入れたとも解釈されている。唐の寺院を模倣すること自体は自然であり、三蔵法師玄奘が延康坊を測量して西明寺の造営に資したとする記録^{注9)}に道慈が影響されたことも妥当であるため、手本としていることは大いに考えられる。ならば、なぜ手本としての性格を持つ「様」として記述されなかったのか。

考察の結果、参考とした西明寺図の存在は疑われることになったが、これは道慈の卒伝や『懷風藻』に記述がないことから蓋然性が高い。すなわち「様」との関係から述べると、図のような特定の資料がないために「様」と記述されなかったと考える。卒伝にみる「構作形製」というのは、造営資料を指すのではなく、造営にまつわる行為一般と思われ、したがって造営資料の代わりとして記述されたのではないか。「規摹」とされるものが特定の資料形態をとった場合、その資料が「様」となることを暗示すると考える。

なお、『弘法大師年譜』巻三之上に所収される「唐西明寺図」は内容に疑問があるが、道慈が造営に当たって写した図と説明されるように、当時において造営の参考となるような図資料のほどが推し量れるため貴重である。

4. 結語

以上、国分寺造営の例では、「図」は「様」と近い性格を持つことを示し、大安寺造営の例では、「図」の不在から「様」の性格が推測できることを述べた。古記録に残る造営資料である「図」も、状況により「様」とされる。これより「様」は特定の建築図書の形態を表すのではなく、機能により呼称されるものであると考えられよう。

注

- 注1) 井上薫『奈良朝仏教史の研究』、吉川弘文館、1966年7月
- 注2) 角田文衛「国分寺の創設」、同編『新修国分寺の研究』第六巻 総括、吉川弘文館、1996年3月
- 注3) 奈良国立博物館編『国分寺』（特別展図録）、奈良国立博物館、1980年4月、齊藤忠「国分寺跡の規模と建物」、角田文衛編『新修国分寺の研究』第六巻
- 注4) 佐々木功成「仁寿舍利塔考」、『龍谷大学論叢』第283号、1928年12月
- 注5) 小杉一雄「仁寿舍利塔の様式に就いて」、『中央美術』第8号
- 注6) 中村伸夫「仁寿舍利塔銘に関する一考察 - 羅振玉旧蔵〈大隋皇帝梓州舍利塔銘〉をめぐって -」、『筑波大学芸術研究報告 第45輯、芸術研究報25』、2005年2月
- 注7) 服部匡延「大安寺は西明寺の模建という説について」、『南都仏教』第34号、1975年7月、服部匡延「大安寺伽藍配置の成立に関する一考察 - 道慈による防災措置の面から -」、『考古学雑誌』58巻3号、1972年12月、服部匡延「大安寺縁起の成立について」、『早稲田大学図書館紀要』第3号、1961年12月、服部匡延「大安寺碑文の偽作年代について」、『早稲田大学図書館紀要』第4号、1962年12月
- 注8) この関係は福山敏男氏が『校刊美術史料』の「諸寺建立次第」解題で示したものと一致する。藤田経世『校刊美術史料 寺院編』上巻、中央公論美術出版、1972年3月

注 9) 「唐長安西明寺塔碑」、『欽定全唐文』卷二五七

本論 第7章

古代における駅家建築の様

古代における駅家建築の様

1. はじめに

本章では、『日本後紀』大同元年5月丁丑(14日)条にある駅家建築に関する様の性格について考察する。

勅、備後、安芸、周防、長門等国駅者、本備蕃客、瓦葺粉壁、頃年百姓疲弊、修造難堪、或蕃客入朝者、便従海路、其破損者、農閑修理、但長門国駅館者、近臨海辺、為人所見、宜特加勞、勿減前制、其新造者、待定様造之、

すでに知られるとおり、令制における駅制は、通信連絡のため全国に東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道の駅路を開き、これらを大路・中路・小路に分けて駅家を三十里を基準に置き、諸道各駅にはそれぞれ二十疋・十疋・五疋の駅馬を配することを原則として成り立っていた。駅家には駅戸を配して駅馬を飼養させ、駅戸から駅子が出て通送を中心とする駅務に従事し、これを駅長が管理し、全体としては地方国司、中央では兵部省の管轄下にあった。上記の四国は山陽道

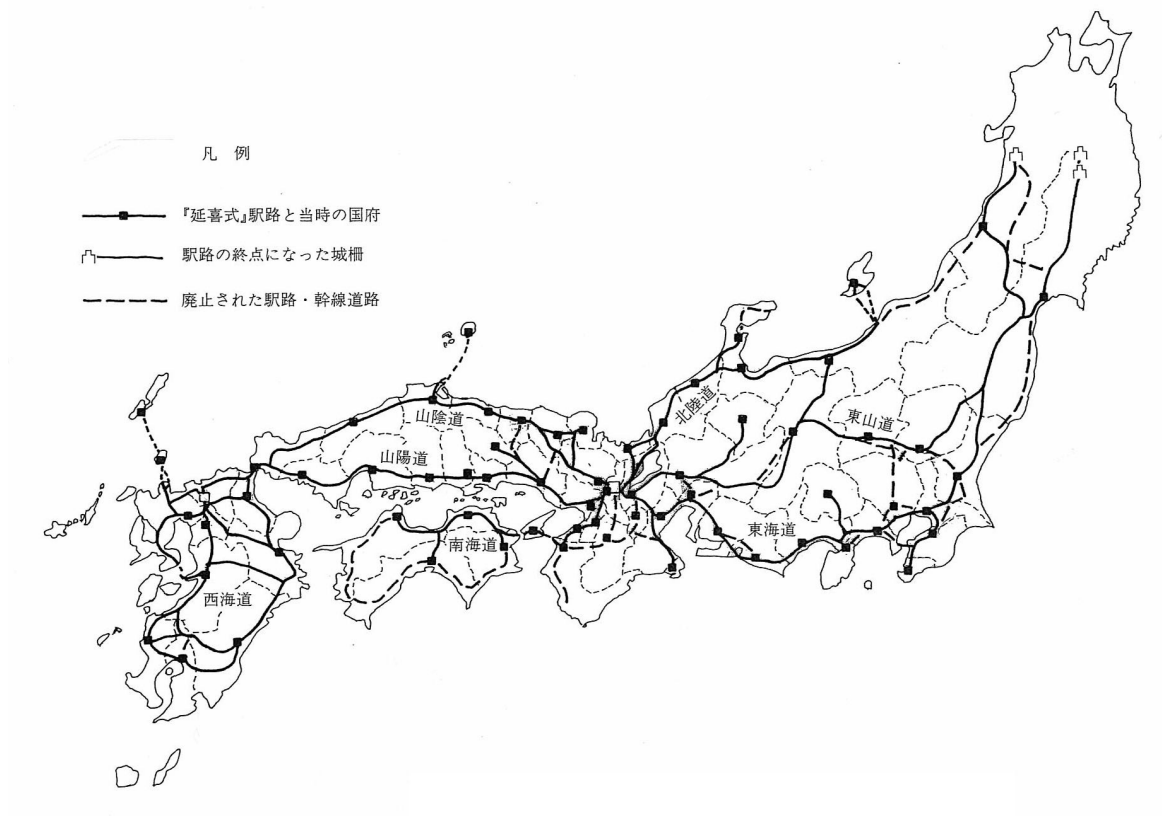


図 7.1 古代七道

にあたり、山陽道は西海道の一部からなる太宰府路とともに大路に分類され、京と太宰府との連絡路として重視されたため、特に駅家建築の修造について勅があったものである。文中の新造とは、新たに駅家を置くのではなく、駅家の建築を新たに造営することであり、様はその際に参照される資料と推測することが妥当である。この様を駅家建築の状況に合わせて、以下に考察する。

2. 駅家の形式について

駅家建築の形式について文献史料から確認すると、まずは神亀年間から天平初年にかけて、瓦葺建築として整備する方針が立てられたことが知られる。

仍宮飾京邑及諸駅家、許人瓦屋楮聖渥飾、（『家伝』武智麻呂伝）

令五位已上及庶人堪營者構立瓦舍、塗為赤白奏可之、

（『続日本紀』神亀元年(724)十一月甲子条）

すなわち瓦葺、赤塗、白壁の建築が推測され、そのほか倉、楼、門などがあったことが知られているが^{注1)}、駅家は簡単な屋からなる一群としても捉えることができ^{注2)}、詳細は不明である。

遺構としては、駅家として確認できる事例が少ないが、山陽道播磨国の布勢駅家である小犬丸遺跡^{注3)}、野磨駅家に比定される落地遺跡（飯坂地区）^{注4)}が挙げられる。その両遺跡にて、礎石建、瓦葺、丹やベンガラ塗、白土壁の遺構群が発掘されており、史料に記載された瓦葺粉壁と合致する形式が確認されている。

両遺跡を比較すると、築地塀にて矩形に区画された一群をなし（駅館院とも呼称される）、区画内には南に開いたコの字型あるいは品字型に殿舎を配し、区画内の面積がおおよそ等しいなど、共通する点がある。また、ともに八脚門が発掘されているが、八脚門は国庁遺構が基本形式としていたとみられ^{注5)}、造営に伴う国府の関与が認められる。建物の規模や柱間寸法などは一致せず、配置も正確に一致しているわけではないが、全体としては、厳格ではないが何らかの造営基準があったことは想定できるだろう。

野磨駅家飯坂地区の瓦葺建築遺構は、8世紀後半から9世紀中頃までの時期に造営され、布勢駅家は8世紀末までには瓦葺建築に建て替えられたと考えられている。したがって、両駅家の遺跡は、大同元年条にある様によって造営されたとは言い難く、遺構から様の具体的な内容を推測することは困難である。しかしながら、落地遺跡では、近隣の八反坪地区から掘建柱遺構がコの字型に並ぶ区画が発掘されており^{注6)}、この八反坪地区の遺跡は野磨駅家が瓦葺となる前の駅家遺構

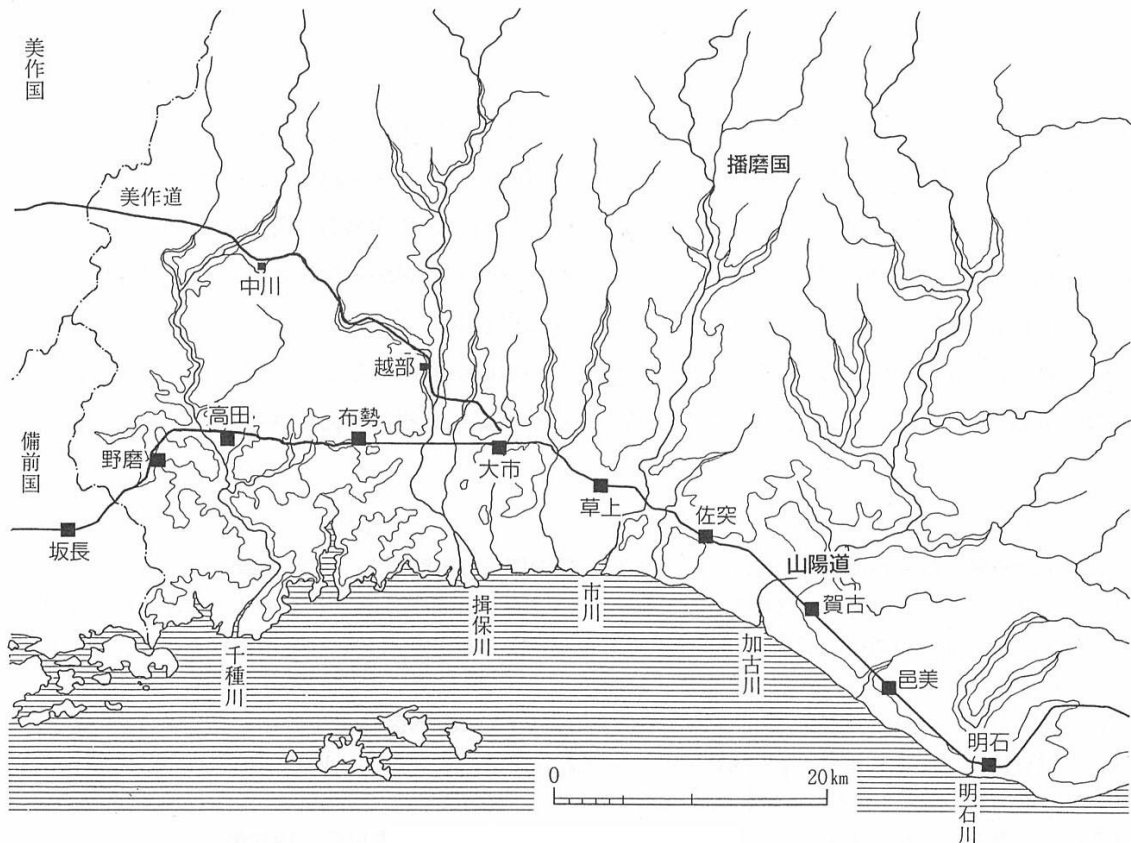


図 7.2 山陽道播磨国駅家

と考えられているが、前後の遺構を比較すると、飯坂地区では造営計画や礎石建といった技法の進展が見られ、瓦葺にする際にも上記のような何らかの指針が示されたことが推測される。これは、大同元年条にある長門国の現状駅館について「前制」と書かれることからもうかがえる。

3. 駅家の利用

駅家において、以上のような瓦葺粉壁の形式がとられたのは、「万国所朝、非是壯麗、何以表徳（先述『続日本紀』神亀元年条）」、「本備蕃客」から分かる通り、外国使節の往来に備えたことによる。

律令の規定には、陸路にて入京する使節に関する条文が見受けられる。賦役令「車牛人力条」に、車牛人力にて伝送する公事の例として「蕃客来朝」の時とあり、儀制令「五行条」も、五行器を使用する有事の時として「入朝蕃客」を挙げる。

しかし玄蕃令式には、京へ向かう進路として、陸路のほか に海路を選択できたことがわかる。さらに、太宰府から京を往還した新羅使や唐使などの外国使節が、陸路ではなく海路をとり、山陽道を利用しなかった例も推測されている^{注7)}。大同元年条に「或蕃客入朝者、便従海路、」とあることも、その一つと考えられよう。

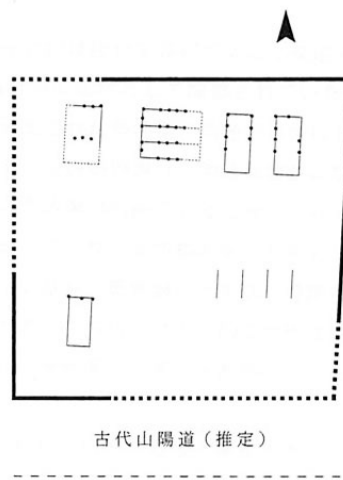
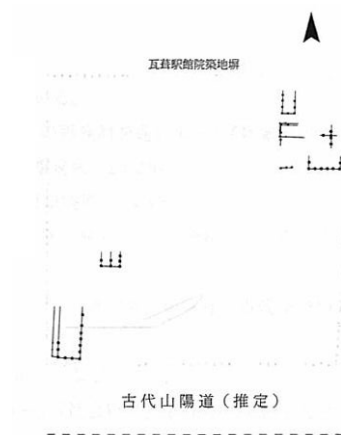
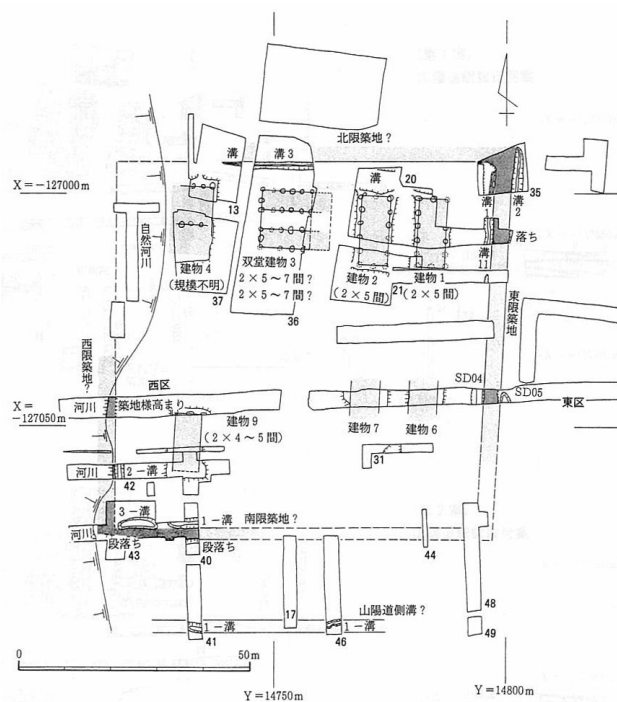
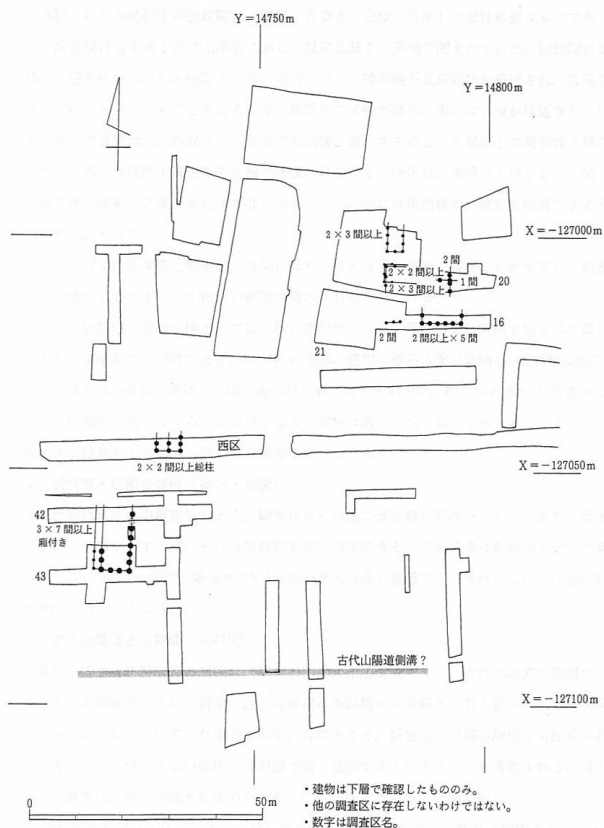


図 7.3 小犬丸遺跡（山陽道布勢駅家跡）

左上：前身遺構発掘図

右上：後身遺構発掘図

左下：前身遺構模式図

右下：後身遺構模式図

図 7.4 落地遺跡（山陽道野磨駅家跡）

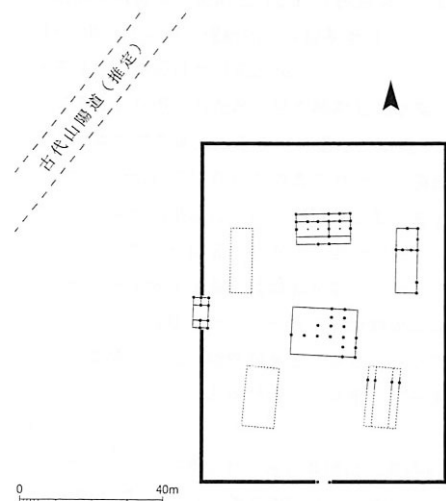
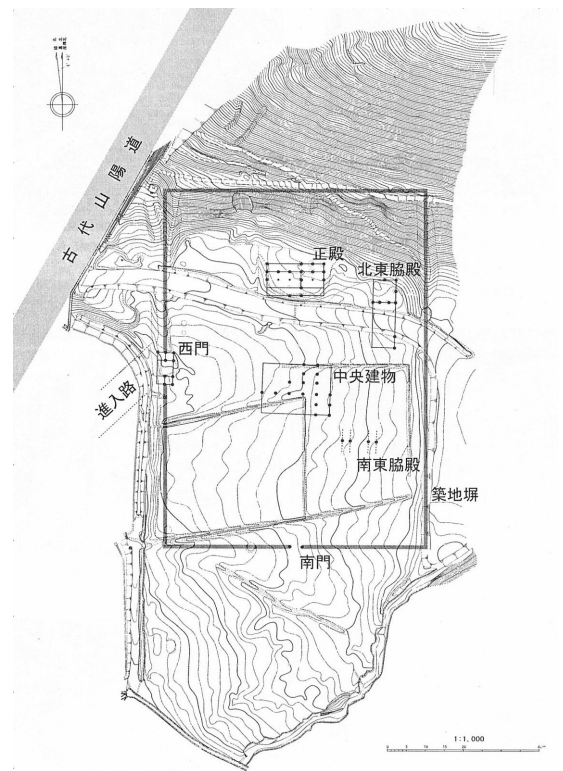
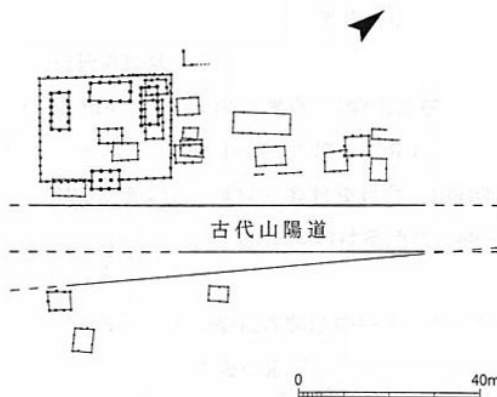
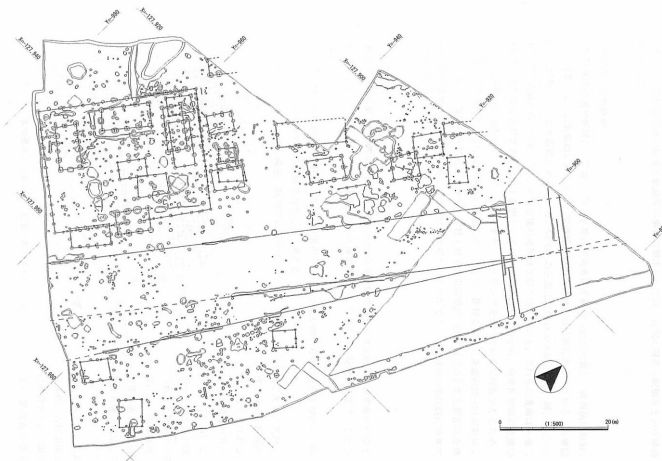
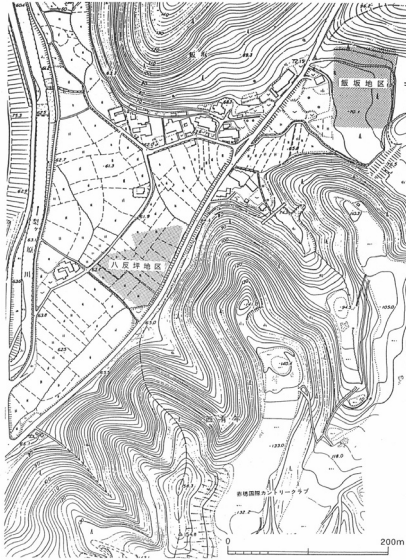
左上：落地遺跡配置図

左中：落地遺跡八反坪地区発掘図

左下：落地遺跡八反坪地区模式図

右中：落地遺跡飯坂地区発掘図

右下：落地遺跡飯坂地区模式図



律令政府は、8世紀中以降、租税(春米)や庸調の輸送に海路を指定し^{注8)}、海運の充実をはかった。また、山陽道では神護景雲2年に伝馬が廃止され、大同元年(806)には新任国司の赴任も海路が指定され、海路の整備が進んだことも言えよう。

このように瓦葺粉壁として諸外国の施設に壮麗を示すべく計画された駅家建築は、実際にはその役割を十全には果たしていなかったと考えられる。そもそも、大同元年条に長門国の駅館は海からの眺望のために労を加えることが特記されているが、駅馬を配し、陸路通送を目的とする駅家の建築の形式が、陸路ではなく海路により考慮されている点は示唆的であろう。

4. 駅家建築の維持管理

では、駅家建築の管理はどのように行われていたか。『延喜式』兵部省式に以下とある。

凡諸国駅家舍屋及舗設等帳、与去年帳計会、若有欠損者、随即返帳、

すなわち、「駅家舍屋舗設等帳」を毎年進上し、昨年との状態と勘会のうえ、もとの状態から欠損なく維持することが求められていた。この帳は、天平5年(733)進上の『出雲国計会帳』に見られる「駅家舗設帳一卷」と同内容と考えられる^{注9)}。

駅家運営の財源としては、大宝・養老令において、駅家に駅起田(駅田)が置かれ、収穫される駅起稻(駅稻)があり、(養老田令駅田条「凡駅田、皆随近給、大路四町、中路三町、小路二町、」)駅家の新造および修造もこの駅起稻が充てられたことが知られている(『続日本紀』天平元年4月条)。しかし、天平11年(739)に駅稻が正税に混合され、駅家独自の経営基盤はなくなり、一般財源による運営へと移行する。唯一の大路である山陽道においては、『延喜式』主税寮式の諸国本稻条に「修理駅家料」と明記される国もあるが、大同元年条にある備後、安芸、周防、長門には見られず、駅家の修繕が困難であったことを窺わせる

また、駅家建築の管理は、国司交替に際する解由制度にみることができる。『延暦交替式』の延暦19年(800)9月2日の太政官符に、「応修理駅家常令全固交替国司分明付領事」として、国司の交替時に駅家の破損があった場合、前任国司が修理を終えるまでは解由状は発行しない旨が命じられる。背景には駅家が破損のまま放置される状況が多くあったことが分かる。弘仁4年(813)には、官舎正倉器仗などが未修理のままに交替期限を終えることを現実的に認め、後任国司が前司の料物にて修理することになるが、駅家のみは延暦十九年の制度が継承されて、欠損を認めない方針が厳格にとられていた^{注10)}。しかし『貞観交替式』承和8年(841)2月22日格では、駅家修造が改善されないで、後司は前司に催促すると同時に、駅家についても任期中に前司料物を使っ

ての修造を果たすことが明言される。

このように駅家建築の維持は、「国威全存」を目的とする中央政府と国司との間で課題となっていた。国司には駅家運営の権限が強化され、同時に上記のような責務も課せられるが、「頃年百姓疲弊、修造難堪」とあるのは、弘仁5年(814)6月23日太政官符^{注11)}に「禁制国司任意造館事」として過度の力役を避け、官舎帳進上による修理に努めることが命じられていることと類似する。

したがって、大同元年条の駅家新造のための様とは、建築の廃絶・欠損を防ぐことを促し、直接的には造営に伴う参考として意図されたが、その後の維持・修造を継続してゆくうえでも指針とすることも期待されたと考えられる。ただし、駅家建築の修繕はその後に改善されることはなかったことが、その後の交替に伴う規定からうかがえる^{注12)}。

5. 結語

以上、大同元年条にある様について検討を加えた。様の具体的な内容は不明であるが、その目的として、駅家を整備する二つの方向、すなわち外国使節のために「国威」を示しうる「壮麗」な空間を整えることと、修理や維持が困難ななかで、現実的な状況に合わせるがあったと考えられる。

新たに造営された駅家建築もその方針に従ったはずであり、様にその具体的な基準が反映されていたと考えられるため、この点は今後の遺跡の発掘状況を待ちたい。

注

注1) 高橋美久二『古代交通の考古地理』、大明堂、1995.4

注2) 永田英明「古代駅家の成立」、『古代駅伝馬制度の研究』、吉川弘文館、2004.1、p.168

注3) 龍野市教育委員会編『布勢駅家：小犬丸遺跡発掘調査概報』、龍野市教育委員会発行 1994.3

注4) 上郡町教育委員会編『古代山陽道野磨駅家跡：落地遺跡飯坂地区ほか発掘調査報告書』、上郡町教育委員会発行、2006.1

注5) 山中敏史「国庁の構造と機能」、奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』、奈良文化財研究所発行、2004.3

注6) 上郡町教育委員会編『落地遺跡(八反坪地区)』、上郡町教育委員会発行、2005.12

注7) 平野卓治「山陽道と蕃客」、『国史学』135、1988.5

注8) 『続日本紀』天平勝宝八歳十月丁亥条、『類聚三代格』巻八、神護景雲三年三月廿四日左大臣宣

注9) 『大日本古文書』1-584

注10) 『類聚三代格』巻十二、弘仁四年九月二十三日太政官符

注11) 『類聚三代格』巻七、弘仁五年六月二十三日太政官符

注12) 『延喜交替式』など

参考文献

- ・ 木下良『事典日本古代の道と駅』、吉川弘文館、2009.3

- ・ 木本雅康『遺跡からみた古代の駅家』、日本史リブレット 69、山川出版社、2008.2
- ・ 岸本道昭『山陽道駅家跡』、日本の遺跡 11、同成社、2006.5
- ・ 奈良文化財研究所編『駅家と在地社会』、2004.12
- ・ 永田英明『古代駅伝馬制度の研究』、吉川弘文館、2004.1
- ・ 木下良『古代を考える 古代道路』、吉川弘文館、1996.4
- ・ 加藤友康「交通体系と律令国家」、『講座・日本技術の社会史 第八巻 交通・運輸』、日本評論社、1985.6
- ・ 古代を考える会編『古代山陽道の検討 古代を考える 17』、古代を考える会発行、1978.11

本論 第8章

石山寺造営における長上工と将領の作材

石山寺造営における長上工と将領の作材

1. はじめに

天平宝字 5 年から 6 年 (761-762) にかけて実施された石山寺の拡張造営では、主要な建材は木材伐採地である山中の杣にて荒削りされ、石山へと運送されて、施工現場である足庭にて据えられる工程で進められた^{注1) - 5)}。この杣には組織として山作所が置かれるが、造石山寺所とは異なり別当は派遣されず、代わって造石山寺所の将領 (領とも) が監督者として派遣された。造石山寺所は山作所へ符式文書を下すため、造東大寺司 - 造石山寺所 - 山作所の所管関係となるが^{注7) ,8)}、造石山寺所と山作所とは別個の工程・別地にある組織ながらも、全体としては物資・人物・情報が密接にやりとりされ、建材作製については「法」や「様」が存在したことが知られる^{注9)}。本稿ではその作材における技術的情報の交換の様相を明らかにすることを目的に、技術監督である長上工と山作所の監督である将領を対象として述べる。

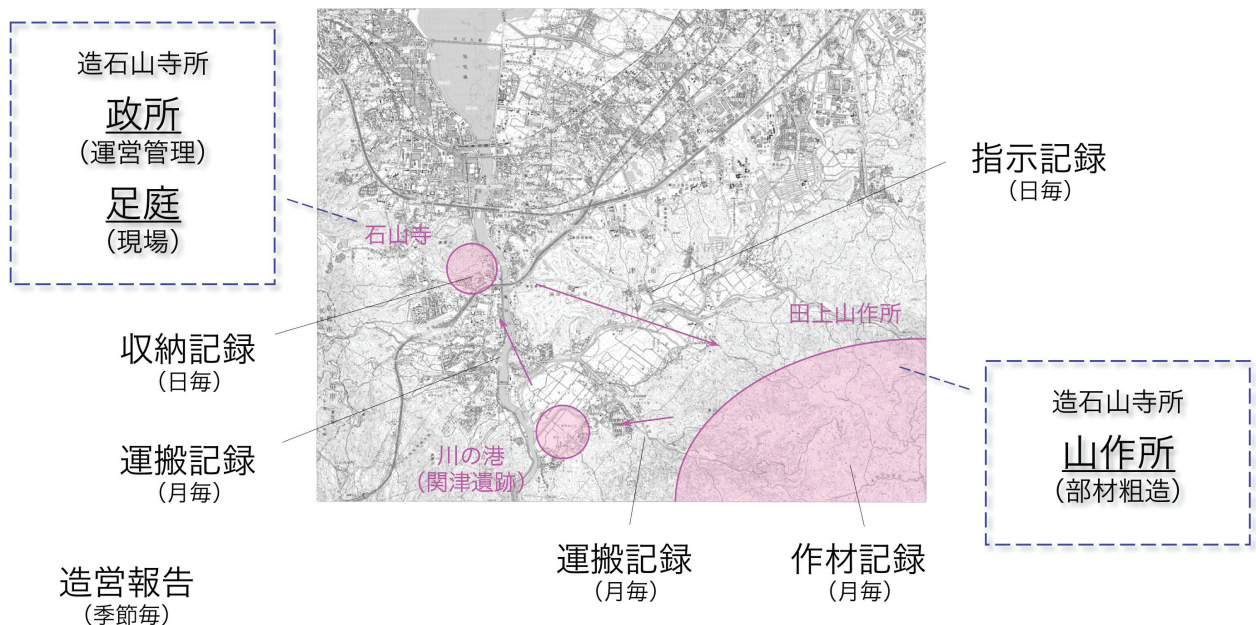


図 8.1 石山寺造営関係地図 (組織所在地と文書記録の流れ)

2. 長上工と作材

山作所において造東大寺司長上工・船木宿奈麻呂の従事した内容は、田上山作所正月告朔解に「教廻木工等作物」と記されており、木工に作材を指導・指示したことが知られる^{注5)}。宿奈麻呂は12月26日に食物や食器等を携えて甲賀山作所へ向かい、9日間勤務したため、26日から正月5日まで(もしくは27日から6日まで)滞在した。また田上山作所には正月16日に向かい8日間勤務したが、16日は山入り日として幣帛を用意して山神祭の儀式を行ったため、17日から23日までの滞在であった。では、それぞれの期間における宿奈麻呂の作材に対する活動を追う。

甲賀山作所は12月22日から正月14日の期間のみ作材活動を行ったが、その間に253材を製造している。宿奈麻呂は上述の通り5日(もしくは6日)まで滞在していたため、これら作物は、滞在中の宿奈麻呂による直接の指示によって進められたと想定される。造石山寺所が作成した公文案帳「解移牒符案」は1月15日以降からしか残存していないため、造石山寺所から甲賀山作所への作材を指示した記録史料は見られないが、上記の活動期間の都合からそもそも甲賀山作所に作材を指示する下達文書は作成されなかったと思われる。

田上山作所については、宿奈麻呂は正月23日に田上から足庭に戻るが、早速28日には柱・桁・歩板などの作物が田上より石山へ収納されている。この間の24日に田上の将領宛に作材指示の文書が送られたが、指示には柱は記述されていないため、これは上述の甲賀山作所における作物と同様に、宿奈麻呂が直接山作所にて指示したものと考えられよう。また、24日の文書には、桁・木舞・掬首材については「依員并様」、机板は「依先様」と指示され、宿奈麻呂に付されて運ばれた釘の検収では「不如様」と記される。宿奈麻呂は開山日から田上山作所にいたため、これら「様」は彼が現地にいる間に伝えられたことが明らかである。以上、各山作所の設置当初は宿奈麻呂の滞在中の指示に従って作材を進めたと言える。

一方、7月25日の「造石山院所解 申考中行事事」には、宿奈麻呂の「行事十四条」のひとつとして「侮催か令山作材 九百十二物 柱桁梁架等類」とある。912材は上記の滞在期間に指示したと考えられる量を越えている。その後の山作所宛の下達文書として、建材種類・数量・寸法が記された作材指示が4月に至るまで継続して発給されており、これは建築技術的な内容を含むため、長上工による指示と考えて良い。すなわち、山作所を離れたのちも、石山にいる宿奈麻呂が山作所へ向けて作材を指示したこととなる。特に本堂は新規造営ではなく三間四面を五間四面へと改修する造営であったため、石山の現地から必要な建材を逐次指示したと考えられる。

3. 将領と作材

また船木宿奈麻呂は、将領的な活動を行っていたことも指摘されている。すなわち、甲賀山作

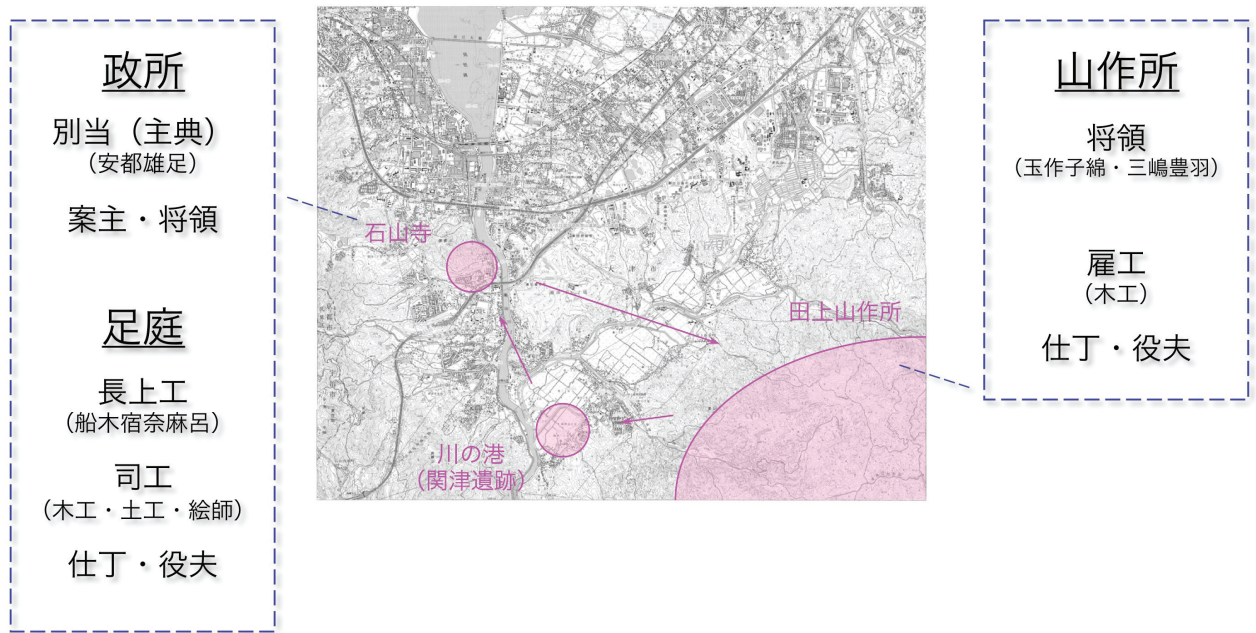


図 8.2 石山寺造営関係地図（組織構成員）

所十二月・正月告朔では将領橘守金弓とともに連署し、また桧皮葺や壁塗の様工の手実に證者として将領とともに署名している。告朔解や上日帳等では、主典、長上、領、工人の順に記載され、事務官人としての性格も見受けられる。ならば、逆に将領が長上に準じて技術管理的性格を有していたことも想定できるのではないか。その状況について、田上山作所における作材活動を通じて明らかにする。

田上山作所の将領は、正月 16 日に宿奈麻呂とともに派遣された阿刀乙万呂と玉作子綿が務めたが、乙万呂は道豊足と交替して 2 月に造石山寺所へ所属を移し、また 3 月には三嶋豊羽が田上に出仕している。山作所の領の職掌は、田上山作所正月告朔解に「木工并役夫等催使」とあるが、上述の考中行事解案では「領催令山作并運漕田上山材一千五百二物 柱桁架梁等類」(三嶋)、「令山作并運漕材」(玉作)とあり、石山にて案主として活動した下道主の行事「検収雑材一千五百廿二物」と比較すると、より長上工に近いことが分かる。そもそも阿刀乙万呂は造石山寺所へ出仕する前は雑物所の木工であった^{注9)}。また、3月6日には本堂の造営に取りかかるにあたり工匠と将領に浄衣が下されたが、これは実際に造営に従事する工匠と将領のみを対象とした宗教色の強い特別な給付ながらも、足庭が本務地ではない山作所の将領も含まれている^{注11)}。工匠と領、足庭と柚との差を越えた協業性が認められる。

次に、山作所将領と造石山寺所との間で交わされた実際のやりとりを確認してゆく。石山からは紙、銭、米や塩・海藻等の食料、雑器等の物資や指示が充てられ、山作所からは申請や作物が

上申される。これらやりとりの軌跡について、公文案帳や食用帳、錢帳、材納帳等から抜き出したものが右表である。表からは、雇工等に充てられた錢は必ず将領に付されたことが分かるが、進上としては、桧皮は仕丁や役夫が担うことに対し、柱や桁・架等の主要躯体材はほぼ必ず将領が、特に玉作子綿と三嶋豊羽が石山まで赴いていたことが判明する。また、山作所から材を運送した人物は、復路に石山から物資や文書を持ち帰る場合が多く、物資・情報・人物が合わさって活発に往還していた様子が窺える。

注目したい点は、造石山寺所から将領宛に作材を指示した符式下達文書を将領自身が付して山作所に伝達する場合が生じることである。すなわち2月8日、3月15日および30日に作材を指示した文書は、玉作子綿自身が山作所へ持ち帰った可能性が高い。一方、3月8日の下達文書の場合は、書出が「符 山作領嶋^{ママ}豊羽等」、書止が「今具状、附即豊羽、以符」とあるため、豊羽が伝達することを予定していたようである。いずれにせよ、これらの場合は作材指示の内容を直に案主から、延いては長上工・船木宿奈麻呂から伝達されたこともあったのではないか。また文書発給と将領の石山往還が同日ではない場合として、3月19日には棉柶の寸法を緊急に改める旨の文書が下されており、翌20日に桁や架等を進上した玉作子綿は、その重大な修正内容について直接石山の足庭にて詳細情報を得ることもできたであろう。躯体材は将領自身が石山に進上する点と、作材指示は山作所将領から山作所工人に伝えられる点が延長され、足庭の技術的指示が山作へとより有機的に伝達された可能性を指摘したい。

4. 結語

以上、作材工程を中心に、長上工と将領のそれぞれの関わり方について考察を加えた。長上工は山作所にて直接作材指示をし、山作所を去った後は下達文書にて指示をした。将領は文書による指示を受け司工や雇工の作材を監督したが、自身が石山へ材を進上した際に、直接作材の情報交換を行うことができたと考えられる。

注

注1) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」、『日本建築史の研究』、1943.10

注2) 筒井迪夫「奈良時代における山作所の管理と労働組織」、『東京大学農学部演習林報告』48、1955.3

注3) 岡藤良敬「造石山寺所の造営過程(Ⅰ)- 甲賀山作所での作材労働力 -」、『長崎造船大学研究報告』8、1967.10

注4) 岡藤良敬「造寺司木工について」、竹内理三編『九州史研究』、御茶の水書房、1968.6

注5) 岡藤良敬「造石山寺所の造営過程(Ⅳ)- 田上山作所での作材経過(1)-」、『長崎造船大学研究報告』10、1969.3

注6) 西山良平「奈良時代『山野』領有の考察」、『史林』60-3、1977.5

注7) 松原弘宣「『所』と『領』」、『律令制社会の成立と展開』、1989.12

表 8.1 造石山寺所政所と山作所の往還記録

日付	下付・下達内容	運送者	進上	運送者
1月16日	食料・銭・鉄物 他	阿刀乙万呂 玉作子綿		
24日	作材指示・食料	額田部広浜		
26日	食料	弓削伯万呂		
28日			軀体材	玉作子綿等
30日か			佐須	私部広国
2月1日	作材指示・食料	宇治乙万呂		
2日			机・温船板等	
3日	食料・銭・紙墨	玉作子綿		
4日	作材指示他	道豊足		
5日	作材催促			
7日			軀体材	玉作子綿等
8日	作材指示	玉作子綿		
9日	作材指示	仕丁1人雇夫6人	検皮・温船板等	玉作子綿・雇夫7人
11日	食料	道豊足	検皮	雇夫・仕丁2人
18日	銭	道豊足		
21日	食料	阿刀乙万呂		
23日	食料	玉作子綿		
17～30日			軀体材	
28日	作材指示・催促		検皮・屏	仕丁・雇夫
銭・食料	泰足人			
30日	銭	玉作子綿		
3月1日			検皮	雇夫
2日	食料	玉作子綿	軀体材	玉作子綿
3日	食料			
4日	作材指示	付調乙万呂		
6日	作材指示・食料	額田部広浜		
7日	食料	私部広浜 (62389-3)	樋・松	私部広国
8日	作材指示	三嶋豊羽	軀体材	三嶋豊羽
9日	食料・銭	三嶋豊羽		
12日	作材催促・食料	額田部広浜		
13日	墨	太郎親犬		
14日	食料	額田部広浜		
15日	作材指示		軀体材	玉作子綿
食料	額田部広浜	比蘇	額田部広浜	
食料	玉作子綿			
16日	作材指示		検皮	額田部広浜
食料	額田部広浜		検皮	末石万呂

日付	下付・下達内容	運送者	進上	運送者
19日	作材修正		検皮	額田部広浜
食料	額田部広浜			
20日	銭・食料	玉作子綿	軀体材	玉作子綿
21日	作材指示			
22日	作材指示		検皮	夫
23日	食料	額田部広浜	検皮	夫
23日か	作材催促・食料			
24日	銭	玉作子綿	軀体材	玉作子綿
食料				
26日	食料	三嶋豊羽	検皮	
28日	作材催促・食料	私部広国	検皮	私部広国等
30日	作材指示		軀体材	玉作子綿
銭	玉作子綿		検皮	
4月1日	食料	額田部広浜等	検皮	額田部広浜
2日			検皮	夫
4日			検皮	刑部黒人
5日			軀体材	玉作子綿
7日	作材指示・食料	春米水取	検皮	額田部広浜・雇夫
食料	額田部広浜			
8日			検皮	額田部広浜
9日	作材指示他	額田部広浜		
10日	食料	春米水取	検皮	夫
13日	食料	玉作子綿		
15日	食料・銭	玉作子綿		
17日	作材指示			
19日	食料		検皮	私部広国
21日	食料	私部広国		
22日			軀体材	玉作子綿
23日	食料	私部広国	検皮	私部広国等
26日	作材指示・食料	私部広国	検皮	私部広国等
5月2日	食料・銭	三嶋豊羽	軀体材	三嶋豊羽
10日	銭・食料	玉作子綿	軀体材	玉作子綿等
12日			検皮	
13日	食料	春部沙弥万呂 春米水取		
16日	食料	三嶋豊羽	軀体材	三嶋豊羽
19日			軀体材	

- 注 8) 鷲森浩幸「天平宝字六年石山寺造営における人事システム - 律令制官司の一側面 -」、『日本史研究』354、1992.2
- 注 9) 梅村喬『『所』の基礎的考察 - 正倉院文書の主に造営所の検討から -』、『日本律令制論集』上、1993.9
- 注 10) 矢越葉子「造石山寺所の文書行政 - 文書の署名と宛先 -」、『正倉院文書研究』11、2009.2
- 注 11) 鷲森浩幸「造石山寺所の給付体系と保良宮」、『正倉院文書研究』12、2011.11

本論 第9章

石山寺造営における良弁の改作指示

石山寺造営における良弁の改作指示

1. はじめに

正倉院文書として残る天平宝字5年から6年(761-762)にかけて行われた石山寺の拡張造営は、東大寺僧良弁が深く関与したことが知られ、自身による多くの指示が見られることから、僧侶による建築造営の理解を表す事例として注目される。なかでも本堂の造営に際して、部材の木作りを改めるよう山作所に指示した事実がよく知られている。この良弁の態度について、福山敏男氏は「建築の細部の点にまで良弁が干渉したという事実には驚かされる」^{参2}とされ、鷲森浩幸氏は「良弁による用材の検査の結果、規格変更が命じられたもので、まさに意匠について指示を与えた事例である」^{参7}と述べられている。そこで本稿では、この木作りの改作を指示することの背景にどのような建築の理解があったのかを確認する。なお本稿では、原史料に合わせて本堂を「仏堂」と呼ぶ。

2. 造営の経緯

以下に良弁の指示を示すが、改作とは飛炎棉栢すなわち茅負の寸法を広さ5寸高さ5寸へと改めることであった。

応停止飛炎棉栢事

右大徳下坐之更改事、宜承知状、如先様勿令作、但尸如先令作、而広五寸高五寸^厚令作、
若作了者、勿^令運持、後符侍、(後略)

前後の事情を概観すると、仏堂は規模を拡大する改修工事で、桁行五間・梁間二間の単層の堂に周囲一間の庇を設けて桁行七間・梁間四間としつつ、柱を替えて総高さを上げるものであった。作材は、田上山作所にて行われ、天平宝字6年2月8日には仏堂用の柱、桁、隅木の作材が指示される。工事は3月10日をもって開始し、13日には身舎の柱立ては完了したとある。上記の棉栢の作材の指示はもとは3月16日にあり、20日までに収納するよう言われていたところ、3月19日に良弁より改作の指示があった。また21日に新たに4枝の棉栢の作材を指示し、結果14枝となる。その後催促があり、再び28日の催促を受けて、ようやく3月30日に14枝ともに収納となった。同日に棉栢用の釘が下されているため、即日取り付けられたと考えられる。屋根は4月から桧皮にて葺かれ始め、中旬には葺き終えたと考えられる。その後、壁塗りなどを経て、8月初旬に仏堂の造営は終了したと見られる。

3. 棉栢の部材寸法の検討

棉栢とは、木負・茅負を表し^{参3}、この「棉栢」は「飛炎棉栢」とあることから茅負であり、反りがあったことが分かる。この棉栢について確認される記載事項を次頁の表にまとめ、検討を行う。

棉栢は、造営全体としては37枝が作材され、広さが4寸と5寸のもの、直材と反りがあるものとして、大きく分けることができる。最終的な秋季告朔では、31枝が使用され、19枝を仏堂に、12枝を僧房3宇にあてたとある。切妻造の僧房の規模に必要な茅負も併せて、内訳は表の通りと考えられる。福山氏の考定^{参1}と異なる点は、2丈1尺の長さの棉栢6枝が広4寸と5寸の2種類存在したと考える点である。具体的には3月21日に作材が指示され30日に収納された棉栢4枝がいずれかであったかという点であり、秋季告朔では4寸、作材指示では5寸とある。5寸とするのは、秋季告朔は棉栢の寸法誤記が多い点と、30日に収納された14枝は、後述の通りまとまった組と考えるべき点からである。

今回良弁が改作を指示した棉栢は、当初「広五寸高七寸」と表記されるが、通常は「広」に対して「厚」と表記され、「広」が高さを「厚」が幅を表している。「高」という表現は見られないため、表記の混乱があったと考える。また、棉栢の寸法としては、垂木は方3寸であり、隅木の成は6寸(その後6寸半もしくは7寸に改められた)に対して、成が7寸は大きい。この造営で食堂として再利用された五丈殿は、板葺きの切妻造りであるが、垂木方5寸に対して棉栢は方5寸である。

以上を考えると「高七寸」はなんらかの混乱から生じた誤りだったのではないだろうか。福山氏は瓦葺きの茅負の成と混同した可能性を指摘されている^{参2}。

4. 軒の検討

また、この改作とは、棉栢の寸法を改めたに留まらない。すなわち、先に述べた3月21日の指示では以下とある。

棉栢拾枝 先仰遣飛炎者 宜更四枝 作加並

先後并十四枝作進上、但運漕可重者、宜高二寸者、削下五寸定進上、又、

架卅枝 先仰遣架可欠、仍佐加如件、(後略)

これは、棉栢と架が改作に伴って必要な員数が追加されたと考えられる。ならば良弁の改作の影響は、部材の寸法のみではなく建築の規模や形式にも及ぶものだった様子である。

それでは、ここでの形式とはどのようなものであったのか。この造営は、既存の建築の改修で

あり、部材の再利用もあって用材の経緯が複雑であるが、以下、棉栢のみから分かる復元を試みたい。

14 枝の棉栢は総長さが 290 尺となり、4 枝が加わる前のもとの 10 枝では 206 尺となる。仏堂の柱間は 1 丈であったため、五間二間から七間四間への拡張に伴い、既存の棉栢に新材を加えたとするならばこの長さは必要ない。上記の棉栢は 14 枝と 10 枝のいずれの場合も新たに据える計画であったと考えられる。14 枝は七間五間の平面に最大で 8 尺の軒出を想定できるが、10 枝の場合では足りず、かえって五間二間に 7 尺の軒出ならば合う^{参2}。この 10 枝については上掲の通り「堂宗屋飛炎棉(栢)」ともあるため、良弁による改作の前では、身舎の飛檐軒に廻らすと想定されていたと推測される。庇の屋根と別れた二重屋根が想定されるが、結果的には仏堂の屋根形式は「東屋」とあるため、屋根は寄棟造となった。したがって、良弁は屋根の形式についても指摘したと考えられる。最終的な軒の出は、上記の棉栢長さのほかに、隅木の長さが 2 丈 4 尺のため、柱真から茅負まで 7 尺以下であったと考えられる。なお、修理工事報告書によると、永長元年（1096）再建の本堂では、7 尺 7 寸と復元されている。

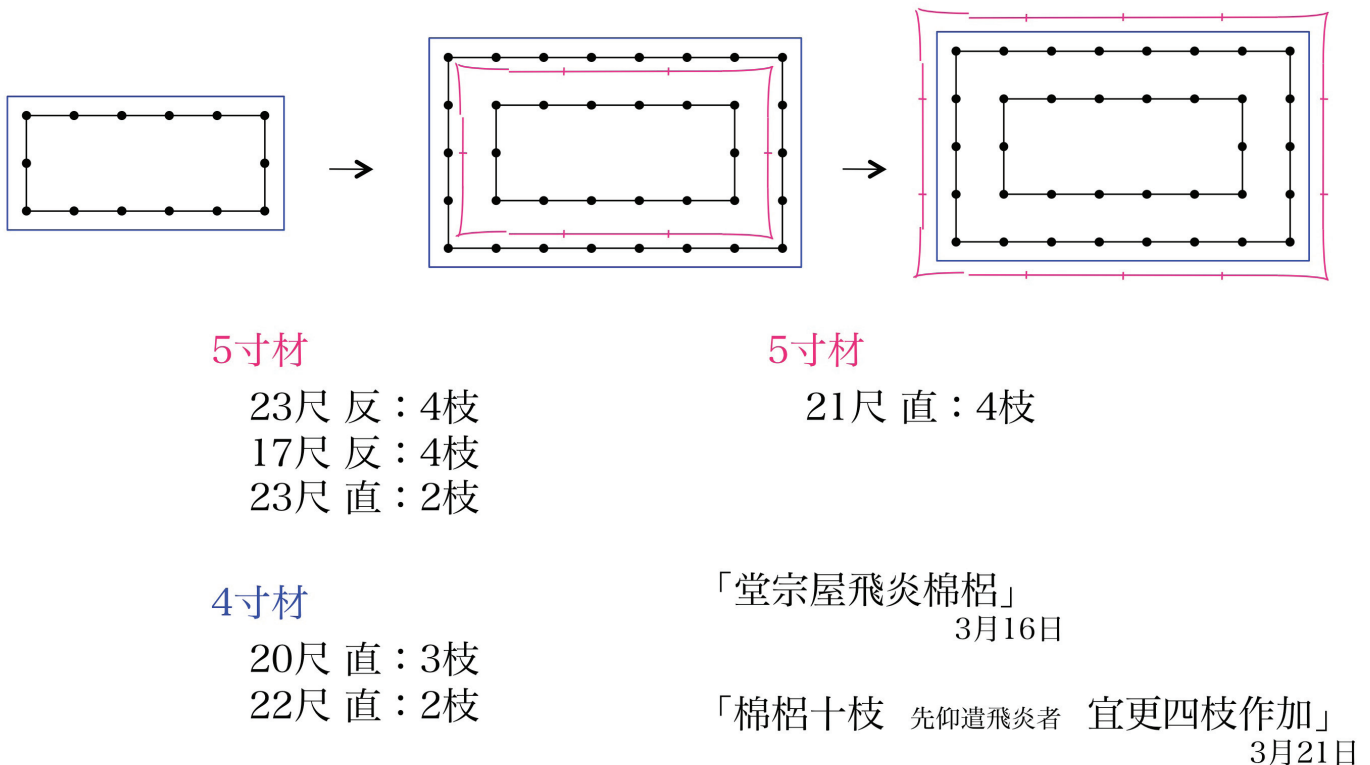


図 9.1 棉栢の供給過程の復原からみた石山寺本堂

表 9.1 棉柁の記載一覧

[illegible]

5. 結語

以上、良弁の棉栢改作指示にみる意図について考察した。改めた意図とは寸法の誤記の修正であった可能性が考えられるが、そののみにとどまらず、軒、延いては屋根の形式という建築の全体像が念頭にあったと考える。非工人たる僧侶の、建築への理解を示す事例として特記されよう。

参考文献

- 1) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」、『日本建築史の研究』、1943年10月
- 2) 福山敏男「石山寺・保良宮と良弁」、『南都仏教』31、1973年12月
- 3) 福山敏男「正倉院文書に見える建築用語」、『正倉院年報』8、1986年3月
- 4) 岡藤良敬「造石山寺所の造営過程(Ⅱ) - 東大寺大僧都良弁の役割 -」、『日本建築学会九州支部研究報告』17、1968年2月
- 5) 岡藤良敬「造石山寺所の造営過程(Ⅳ) - 田上山作所の作材経過(1) -」、『長崎造船大学研究報告』10、1969年3月
- 6) 岡藤良敬「造石山寺所関係文書・史料篇」、『福岡大学総合研究所報』100、1987年3月
- 7) 鷲森浩幸「奈良時代における寺院造営と僧 - 東大寺・石山寺造営を中心に -」、『ヒストリア』121、1988年12月

本論 第10章

古代における建築の様態の記述

古代における建築の様態の記述

1. はじめに

平安前期に撰集された『令義解』や『令集解』では、「宮繕令」に記された「様」の釈義として(1)「様者、形制法式也」と、(2)「様、物之形様也」とが挙げられている。前者は取り決め、式、法(のり)、型であり、規範や形式を意味するが、後者は様態、形姿、相貌といった、かたちの状態を直接的に示し、ひいては有形物ではない「有様」の「さま」事情・状況などの意にも通ずるものである。公式令に定めるような公文書の様式・書式と、平安期に成立する「今様」や奈良時代の『法隆寺東院縁起資財帳』にある尺杖の「古様」「新様」といった、両者の用法が併存している。「様」の用法として、いずれもかたちが根底にありながらも、この両者の説明のされ方はそのままでは直接的につなげて説明できないが、その及ぼす影響を見ることで、両者の性格や相互関係がより解明されるものとする。手本や規範などの一定のかたは、再現性・再生産を前提に成立する概念であり、一方で、生産された造形物が別の生産の際に参照されるがために、かたとなる。そのような見倣し・所見・見立てと、再現・生産とを関係付けることが「様」の概念の解明には必要と考える。

そこで本章では、(2)であるところの形様が、どのように(1)の模範や型となりうるかを推し量ることを目的に、文字史料に残る建築の様態の記述のなされかたに着目する。そのため現場における見聞が主たる目的となる、巡礼記録を対象に選び、二題について検討を試みた。

2. 『七大寺日記』にみる建築様態の記述

『七大寺日記』は大江親通が嘉承元年(1106)に南都諸寺を巡礼した際の、縁起や堂舎・仏像・仏画・宝物などの見聞の記録と考えられている。ただし冒頭の大仏殿碑文等の抄録のほかに、「高名之物」などの記載も見られるため、予てからの知見や引用など、実地見聞以外の情報も含まれる。その記載は、逐一対象物を挙げつつ親通の評を加えるものであり、「(対象物)」「(対象物)アリ」「(対象物)立給へり」などに「可見」「神妙」「日本第一」「奇特」や、「言語道断セル也」「不可思議也」などが続き、「可尋」「不審也」など疑問を呈する記述もある。また「是金銅也」など、具体的な説明や伝承などが入る場合もある。

日記中に見られる諸寺の建築を表10.1に挙げた。多くの堂塔は名称のみが挙げられるに留まり、その中に安置される仏像などが記載されるため、建築について直接言及することは少ない。記述される場合は具体的な形式などを示す場合と自身の評とに分けることができる。前者は、間数などの規模、重層、裳階、屋根葺(瓦葺のみ)などに加えて、「八角」や「宝形造」といった形式性に

基づく記載も見られる。後者は親通自身の見解に基づく点でそれらとは区別されるべきと思われるが、その際には「造様」という記載のなされ方が取られている点は留意するべきと考える。単なる形容のみではなく、あくまで技能をもって造られた結果としての様態であることが意識されており、例えば『七大寺日記』に「甚奇特也」とある興福寺西金堂の婆羅門立像足下の木形は、『七大寺巡礼私記』では「其木腐爛之体、不可思議也、不似構造之物、尤奇物也」と書かれ、この「構造之物」もまた類似した視点である。「造様」は仏像や工芸物などにも用いられ、また「彫様」なども見られるように、造形物に対して共通した視点であっただろう。

建築の様態を造る点は、薬師寺条にある龍宮の様を見て造るという文言にも見られる。この記事は薬師寺本『薬師寺縁起』に掲載されており（『奈良六大寺大観 薬師寺』「薬師寺縁起」項）、親通はこれを参照したものと思われ、伝承化の方向性が見られるが、薬師寺の建築形式が「龍宮様」あるいは「龍宮造」として定着して呼ぶ記録は見当たらない。法隆寺の南大門は中門を指すと考えられるが（『奈良六大寺大観 法隆寺 1』「中門」項）、「不審」とされた点は梁行が三間であることに帰因し、親通の印象は実際に則していると知られる。薬師寺と法隆寺では他寺に比べて建築の記述が多く、特に間面記法に基づく形式が書かれる点などは、検録帳などが参照されたことが窺える。

なお『七大寺巡礼私記』との比較は本稿では対象としないが、建築形式や由緒についての記載が補われ、また新たに院・建築が挙げられるなど、他の文献からの所引が多く、親通が『七大寺日記』にて記した評については、基本的には変わらない。元興寺の金堂は「斯寺院之中、金堂造様尤神妙也」「惣堂礎并甍等勝諸寺、柱絵等同神妙也」とあり、鐘楼は「件楼造様勝於諸寺、尤奇妙也」と記載されており、ほぼ同文・同内容である。薬師寺については、建立の次第が「見龍宮口（之カ）様令学造云、仍粧嚴之美楸操之妙勝諸寺」、また東西両塔は「不似余処之様」と加えられる。興福寺南円堂について「八角、宝形造、東向」とある点はほぼ変わらないが、新たに「抑此堂形火炎伏釜（鉢カ盤カ）之様又勝諸寺」と加えられている点が、建築評における差である。

3. 『入唐求法巡礼行記』にみる建築様態の記述

『入唐求法巡礼行記』（以下『行記』）は慈覚大師円仁が遣唐請益僧として入唐した際の記録であり、困難に遭いながらも入唐求法を遂げる過程には、仏寺における堂舎・仏像・仏画・宝物などの造形物に対する記録の意識があったと考えて良い。『行記』には、仏教文物のみならず都城や自然地形も記録されており、様態を示す語として、構、容、形、様などのほか、体、貌などが使用されている。様態を示す「様」については開成4年（839）正月15日の燃燈会の記録に「無量義寺設匙燈竹燈、計此千燈、其匙竹之燈樹構作之貌、如塔也、結絡之様、極是精妙、其高七八尺許」と記される。

表 10.1 『七大寺日記』における建築の記述

寺院	条	建築形式・具体の記述	特殊用辞
東大寺	大仏殿、中門、鐘堂、絹索院三昧堂、荒室、講堂、礎礎亭、大湯屋、戒壇院、西面三門	—	—
興福寺	金堂、講堂、東金堂、塔、大湯屋、西金堂、南大門、浄名院、菩提院	—	—
	南円堂	八角堂也、	—
	北円堂、食堂、中門、西大門等	—	無差事、
元興寺	金堂	—	造様尤妙也、可見、
		斗形、肘木等、皆木絵伏物アリ、	其体甚妙也、見可、
		凡堂ノ礎等并疊等勝諸寺、得心可見、	
	食堂	十一面、／ 堂棟之木ハ、一支ヲヒタワリニセリ、	—
	鐘楼	—	造様勝諸寺、日本第一ノ鐘楼造様也、
	南大門、中門、講堂、塔、極楽坊	—	—
	吉祥堂	金堂ノ坤角ニアリ、三間四面之堂也、	—
大安寺	金堂、塔	—	—
西大寺	金堂(破)、食堂、興福院金堂中門	—	—
唐招提寺	金堂、宝蔵	—	—
	瓦葺舎	三間一面、瓦葺舎アリ、	—
薬師寺	(建立次第)	見龍宮様ヲ所造也、	—
	金堂	二蓋、重閣各有之、仍造様四蓋也、	—
		毎層有木絵、	可見、
	東西兩塔	各三重、毎層各有裳層	—
	唐院	—	—
	(東院) 八角瓦葺宝形造堂	八角瓦葺宝形造堂アリ、	—
法隆寺	講堂	有裳層、仍重閣講堂也、	堂之内無損事、
	金堂	二蓋、瓦葺、三間四面、	—
	塔	一基、五重、瓦葺、	—
	鐘楼、経蔵	—	—
	南大門(中門か)	二蓋、四間二面、	此二ヶ造様、尤不似諸寺、不審也、
	上宮王院・夢殿	八角瓦葺、宝形造也	—
	上宮王院・七間亭	東端二間宝蔵、／ 西端三間絵殿、／ 中間一間馬道、一間拝殿也、	—

一方で、形式性を示す「様」の用法も見られる。留住を画策していた際の取り調べでは「県京都使来請状、依昨様、作状而与之」（開成4年4月6日条）とあり、また五台山大花嚴寺普賢堂院の大聖文殊菩薩像の造仏に際しては「方知先所作不是也、便改本様、長短大小容貌髣髴所現之相、（中略）今五台諸寺造文殊菩薩像、皆聖此像之様、然皆百中只得一分也云々」（開成5年5月17日条）とある。この文は伝え聞きによるものであるが、基準となる仏様を本様と呼び、そうして造り改めた文殊菩薩像のさまは、また五台山諸寺の規範となったことが知られる。円仁の『入唐新求聖教目録』にも将来した「壇様」などが見られ、開成4年（839）正月3日の条には、揚州竜興寺の瑠璃殿にあった南岳・天台両大師の影について「乃令大使僉從栗田家繼写取、無一虧謬、遂於開元寺、令其家繼図絹上、容貌衣服之体也、一依韓幹之様」として、名画手であった韓幹の原面を写し取ったことから規範として「様」と記している。したがって「様」の用法は変わらないため、以下に建築の様態を見てゆく。

『行記』に見られる堂塔閣樓などの建築の記述を表10.2に挙げた。名称のみが見られる院・建築が多くあり、「瑠璃殿」や「三間堂」などの例は建築の様態が窺えるが、ここでは挙げていない。また退転した堂舎についての記述も見られるが同じく省く。『七大寺日記』と同じく、仏像や仏画などに比べて建築の様態の記述は少ないが、より多くの観点からの記述が見られる。

まずは規模についての記録が見られる。三間堂、五間堂、九間の閣、六間樓など、建築物の基本的な規模や形式のほか、戒壇や塔などは寸法値が記される。ほか、都城の広さの記録や、揚州開元寺では「越二壁」「第三廊」など、伽藍が意識されている。建築の形態については、八角、六角、円形塔、四角塔などが記載され、特に戒壇の八角や、転輪蔵が六角と注記されている。

一方で、高さに関する記述も多く見られる。塔は、級数や高さ寸法、五台山中台の塔は「其体一似覆鐘」と記され、容体が表現されている。そもそも高樓や重閣といった高層の建築について多く挙げられ、それらに登る、上がるという記述が散見される。高さを意識した記述は武宗に関する記録中にも多く見られる。

高さとともに挙げられる点として、景観の記述がある。建造物のみならず地勢も対象となるが、特に五台山の様子は詳述されており、宿願を成し得て到達した「聖靈之地」（開成5年5月16日条）に対する感慨が窺える。大暦法花寺では、斜面に堂舎が続き並び建つ様子を記述している。

建築の荘嚴については「堂内莊嚴」「内外莊嚴」として舗設の状況を含めて記されることが多く、「殿に満ちる」とある表現とも対応する。「棟梁椽柱」「壁簷椽柱」といった部材の彩画が指摘される点は『七大寺日記』にも見られる。評としては「精妙」「珠麗」などのほか、「嚴麗」（会昌4年3月条）「尅飾精妙」（会昌5年3月3日条）などと表現される。

なかでも五台山金閣についての記述は、以上の要素がすべて含まれており、「顯然として独り杉

表 10.2 『入唐求法巡礼行記』における建築の記述

条	建築・場所等	記述
開成3年 (838)	7月23日 揚州西池寺	其塔是土塔、有九級、七所官寺中、是其一也、
	8月24日 揚州開元寺	詣開元寺、既到寺裏、從東塔北、越二壁、於第三廊中間房住、
開成5年 (840)	2月28日 登州件台村件台館(ママ)	館前有二塔、一高二丈五層、鐫石構作、一高一丈、鑄鉄作之、有七層、
	3月15日 萊州龍興寺	仏殿前有十三級塼塔、基階頽壞、周廊破落、
	4月6日 濟州醴泉寺	齋後巡礼寺院、礼拝誌公和尚影、在瑠璃殿内安置、戸柱塼砌、皆用碧石構作、宝幡奇彩、尽世珍奇、鋪列殿裏、
	4月14日 貝州開元寺 (原文唐州)	晚際、入戒壇院、見新置壇場、塼塼二層、下階四方、各二丈五尺、上階四方、各一丈五尺、高下層二尺五寸、上層二尺五寸、壇色青碧、時人云、取瑠璃色云々、
	5月2日 竹林寺 貞元戒律院	上樓、礼国家功德七十二賢聖諸尊曼荼羅、綵画精妙、
		次開万聖戒壇巡看、純以白玉石作、高三尺而八角、壇底築填香泥、壇上張一綵毯、亦八角造、闊狭与壇恰齊、棟梁椽柱粧画微妙、
	5月16日 大花嚴寺 涅槃院	見法賢座主、於高閣殿裏、講摩訶止観、有四十余僧、列坐聴講、便見天台座主志遠和上、在講筵聴止観、室内莊嚴精妙難名、
	5月17日 大花嚴寺 菩薩堂院	其堂内以七宝傘蓋、当菩薩(=大聖文殊菩薩像)頂上懸之、珍彩花幡、奇異珠鬘等、滿殿鋪列、宝装之鏡、大小不知其数矣、
		大花嚴寺 閣院
	5月20日	共衆僧上閣、礼拝功德、閣之内外莊嚴、所有宝物、与菩薩堂相似也、
		閣前有塔二層八角、莊校珠麗、
		中台
		頂上近南有三鉄塔、並無層級相輪等也、其体一似覆鐘、周円四抱許、中間一塔四角、高一丈許、在兩辺者円円、並高八尺許、
	西台	於池東南、有則天鉄塔一基、円形無級、高五尺許、周二丈許、
		西台 (文殊与維摩対談処)
	西台 (文殊与維摩対談処)	巖前有六間樓、面向東造
		又於此樓前、更有六間樓相对矣、
	5月21日	北台
		台頂之南頭、有龍堂、堂内有池、其水深黑、滿堂澄潭、分其一堂為三隔、中間是龍王宮、臨池水、上置龍王像、池上造橋、過至龍王座前、(中略) 龍宮左右、隔板牆、置文殊像、
	北台	台頭中心、有則天鉄塔、多有石塔困遶、
	5月22日 東台	近堂(=台頂三間堂) 西北有則天鉄塔三基、体共諸台者同也、
	5月23日 金剛窟	当窟戸有高楼、窟門在楼下、人不得見、於樓東頭、有供養院、窟戸樓上有轉輪藏、六角造之、
	7月2日	金閣寺金閣
		閣九間三層、高百尺余、壁簷椽柱、無処不画、内外莊嚴、尽世珍異、顚然独出杉林之表、白雲自在下面變隼、碧層超然而高顯、次上第二層、(中略) 礼金剛頂瑜伽五仏像、斯之不空三藏為国所造、依天竺那蘭陀寺様作、(中略) 次登第三層、(下略)
	金閣寺普賢堂	堂内外莊嚴、綵画鏤刻、不可具言、
	7月4日 大曆法花寺	重閣於峻崖上建立、四方崑面尽是花樓宝殿、任地高低、堂舎比櫛、経像宝物、絶妙難言、
	7月16日 太原府(并州)開元寺	上閣觀望、閣内有弥勒仏像、以鉄鑄造、上金色、仏身三丈余、坐宝座上、諸寺布設、各選其勝、
	7月26日 太原府(并州)童子寺	於兩重樓殿、滿殿有大仏像、
開成6年= 会昌元年 (841)	2月13日 長安慈恩寺	兼登慈恩寺塔、
	4月7日 長安大興善寺	往大興善寺、入灌頂道場隨喜、及登大聖文殊閣、

林の表に出ずる」などは、特別に閣の偉容を示した修辞と考えられる。

そのほかの建築の記述として、具体的にその構成や構築が窺えるものもある。五台山北台の龍堂は、堂内に池があるとし、三間を隔てる、橋を設けるなどが記録される。また、材料に関する注記も多く見られ、磚、鉄（鉄塔や鉄仏）、石（石塔）、碧石、白玉石などが挙げられ、絹画や金銅仏などもある。これらは「鑄石構作」「用碧石構作」「以白玉石作」などの記述から、構作することに関わる意識が見られるが、具体的な構作を意味するものであり『七大寺日記』における「造様」とはまた異なる。

4. 結語

以上、建築の様態の表し方について、巡礼記に見る表現方法を事例に取り上げた。「三間堂」や「八角」、「五層（重）」といった記載は形式を示すものとして定型化していることが認められるが、そのほかの様態についても「精妙」や「神妙」など同様の表現が見られた。しかし『行記』では具体性を描写した記録や、それに「珠麗」などの修辭的な文言を付して表現することに対し、『七大寺日記』では「造様」という表現が見られ、差も認められた。今後はそれぞれの表現の伝承のされ方や影響性を量って行きたい。

参考文献

- ・巡礼記研究会編『巡礼記研究』1、2004.12
- ・藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇 上』、中央公論美術出版、1972.3
- ・田中稔「七大寺巡礼私記と十五大寺日記」、奈良国立文化財研究所編『研究論集Ⅰ』（奈良国立文化財研究所学報21）1972.3
- ・奈良国立文化財研究所編『七大寺巡礼私記』（奈良国立文化財研究所史料22）、1983.3
- ・植木朝子「大江親通『七大寺巡礼私記』」、『国文学解釈と鑑賞』70(5)、2005.5
- ・小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究 1-4』、鈴木学術財団、1964.2 - 1969.3
- ・塩入良道校注『入唐求法巡礼行記 1-2』、平凡社、1970.2 - 1985.2
- ・佐伯有清『円仁』、吉川弘文館、1989.3
- ・藤井恵介「初期比叡山の建築に関する幾つかの課題」、『仏教芸術』300、2008.9

結論

結論

本研究は、奈良時代を中心とした古代日本を研究対象とし、「様（ためし）」と記録に残る計画資料の内実や授受関係、機能の検討を通じて、当該期における建築造営の状況を示し、その社会的特徴について解明することを目的とするものであった。その目的に則して、以上の本論（10章）にて述べてきた点を改めて要約し、それらを踏まえて当該期の様から判明する建築生産像を俯瞰的に述べ、また様についての定性的評価を述べたうえで、結論とする。

本論第1章「日本古代の建築の様に対する解釈」では、文献史料に残された様の事例収集を行い、それらに対する既往研究の解釈の仕方について、問題提起と新たな方針提示を行った。建築の様は、書付け・図・模型などの諸形態があったと推察されるものの、史料上では具体的な資料形態までは明瞭ではなく、また現存する事例もない。既往の見解では、その資料形態を比定する研究姿勢が中心的に取られてきたが、当該期の他史料から導かれる様の原義が手本・見本・模範・規定・標準などであることと照合し、様とは特定の資料形態を指す語ではなくはるかに広範な内容を持つものであり、工程上における影響関係によってそのように呼称された資料である点を指摘した。同時に、その機能・影響性の解明が当該期の建築生産像の把握へと繋がる点を指摘し、以下の各章の研究に対する指針とすることを述べた。

第2章「実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式」では、神護景雲年間(767 - 770)に東大寺僧・実忠が制作した小塔殿の様の影響力について述べた。小塔殿とは称徳天皇勅願の百万小塔を納める堂であり、現存遺構は存在しないものの、奈良諸大寺にそれぞれ建立されたことが諸記録より知られる。実忠の事績が集められた自伝的顕彰文である「東大寺権別当実忠二十九ヶ条事」には、自身の様により諸寺に小塔殿が建立されたと記されるが、文献史料に残るそれぞれの小塔殿の記録を比較検討した結果、諸寺の建築形式は必ずしも一定していない点を明らかにし、この場合の実忠の様の規範性には融通性があった点を指摘した。

第3章「実忠の東大寺における造営事績とその活動形態」では、同じく東大寺僧・実忠が「東大寺権別当実忠二十九ヶ条事」にて記す多数の造営活動の具体を検証し、その参画形態を造営体制・関係性の側面から考察した。一般に、僧侶による造営への関与は役僧に就くことではじめて可能となるが、実忠の造営活動は、役僧としての活動のほかにも、高僧の良弁や朝廷が造営への参画を保証した点を明らかにした。また、その実忠の造営参画のあり方のひとつとして、計画資料で

ある様の製作や提出が挙げられる点を指摘した。

第4章「天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係」では、具体的な工程が窺える記録が残る天長4年(827)の東大寺大仏修理を事例に挙げ、特に企画や計画のなされ方に着目して、造営の状況について述べた。本造営は、破損状況のとらえ方の相違から、修理方針の策定について紛糾した事例であり、その経緯が窺い知れる記録である。勅使、官人、工匠、僧侶などの多岐に渡る検討参画者について、それぞれの立場や相関関係について明らかにし、論議の場面を復原して、当該期における造営過程の状況のひとつとして提示した。

第5章「思託の西大寺八角塔の様」では、神護景雲年間(767 - 770)に渡来僧・思託が西大寺の八角塔の様を制作したとする『延暦僧録』の記録を取り上げ、様の内容や機能について述べた。西大寺の東西両塔は、称徳朝のもとで八角七重塔として着工するが、後に四角五重へと変更して実現された経緯がある。その工程を踏まえ、西大寺伽藍造営の進捗状況と照合しながら、思託の様はその当初計画に寄与したことを述べた。また西大寺四王堂にかつて存在した八角五重小塔は、着工した八角七重塔とは層数の相違はあるものの、思託が制作した様へと比定できる可能性を提示した。

第6章「国分寺および大安寺造営における図と様の関係」では、図や様といった建築計画資料の古記録上の表記のなされかたについて検討した。奈良時代における国分寺および国分尼寺の造営では、造営の促進を目的として中央政府から諸国に宛てて「図」が頒下されたが、類似した事業である中国随朝の文帝による仁寿舍利塔の造営では「様」が配布されたとあり、大安寺の造営では、留学僧・道慈が将来した唐西明寺の「図」によったとあるが、一部の史料には「様」と書かれる点を指摘し、両者が記録によっては近いものとして捉えられていた可能性を指摘した。

第7章「古代における駅家建築の様」では、山陽道に配された長門国の駅家造営における様について論じた。大同元年(806)に律令政府は、山陽道の各駅家建築について修理の労力負担を軽減するよう勅を下すが、長門国の駅家新造にあたっては中央から様を送ることとした。その背景としては、財政逼迫による駅家建築の修理や維持整備が困難ななかでも、山陽道長門国駅家が外交使節の海上通過ルート近くに当たっていたために壮麗を示す目的があったことが挙げられ、そのための標準や指針を有効に示すために、様が具体的な情報媒体と考えられて用いられた可能性を指摘した。

第8章「石山寺造営における長上と将領の作材」では、天平宝字5年から6年（761 - 762）の石山寺造営において、建材製造の指示の場面における様について論じた。建材の準備は、石山寺近くの田上山にある山作所にて行われたが、実質的な現場監督者であった長上工・船木宿奈麻呂は、石山寺の工事現場にありながら田上山へと逐次必要な部材の製造を指示していた点を明らかにし、その伝達資料が様と呼ばれていた点を指摘した。また、情報伝達は事務官人である将領が担っていた点を検討し、将領も工匠に準じた一定の技術的理解を有していた可能性を指摘した。

第9章「石山寺造営における良弁の改作指示」では、同じく天平宝字年間の石山寺造営において、東大寺僧・良弁の指示によって仏堂建築の計画変更が行われた点に着目し、情報伝達の経緯と内容について検討した。変更は、軒先部材である「棉杢」の寸法値を修正するかたちで示されており、製作部材に関する指示のみではあるが、工程と仏堂建築の形式を復原した結果、屋根架構形式を変更する全体形状に関するものであったことが判明した。良弁は、その全体を理解して変更を指示したことが窺え、前章で述べたような工匠が部材製造を指示した様を、僧侶が撤回・修正を行った状況が明らかとなった。

第10章「古代における建築の様態の記述」では、後代の平安時代における様の語の用例に着目し、奈良時代との相違点について検討を加えた。平安時代に編纂された養老令の注釈書『令集解』では、前代にあたる奈良時代の様に対して「物之形様」および「形制法式」との説明がなされるが、前者の説く形容・ありさまの意味と、後者の規範・規定としての性格の間では、解釈に差が見られる。この状況を踏まえ、平安時代末期の大江親通による南都諸寺の記録『七大寺日記』に頻出する様の表現を取り上げ、用法を検討した結果、前者の形容・ありさまの意味に相当することを指摘した。奈良時代においては、単純に形容・ありさまのみを意味する用法は見られないため、「形制法式」としての様の語義は失われつつある点を指摘した。

以上、造営の過程における様の授受関係や果たした役割を通して、当該期における造営関連機関・人物の相互関係について論じてきたが、下記にこれを改めて俯瞰する。様は、企画構想段階における検討の対象、計画から工事实施への情報伝達資料、造営工事中における計画変更や建材調達のための資料などとして、工程の多岐に渡る過程で登場していたことが明らかとなり、また、中央・地方政府、工匠、事務官、僧侶といった組織や人物の間で授受されていたことが判明した。そのような様を介した建築造営形態は、既往の生産体制像をより柔軟に拡張することとなろう。設計

施工が統合的であり、職位と技能が結合した職能的専門性が不明瞭・未確立とされる古代建築造営体制において、様は、形容概念が表現されたものとして、影響関係、分業および協業や、造営への参画を保証する資料などとして、さまざまに機能したと言える。

様が生産関係のさまざまな場面で登場することは、取りも直さず、さまざまに異なった目的機能を担った建築的伝達手法が総じて様と呼ばれていたことを示している。すなわち、建築の実現過程における多様性や自由度の高さがさまざまな規範や指示を求めるのであり、結果として目的に沿ったさまざまな様を生み出すことになった。これらを総称して様と表現すること、現在の解説の困難さを生み出している原因こそが、建築生産における様のあり方を示すものだと考えられる。

そのような建築生産像をもとに、様から判明した情報伝達のあり方について整理を行い、様の評価を述べて結語とする。

様が担った情報伝達は、規範や参考から、直写や指示といった具体的な規定にいたるまで、その性格に幅があることが判明したが、この両者は、情報伝達のあり方として、以下に示す双方向・平衡的伝達と、一方向的・垂直的伝達とに対応させて考えることができる。

一方向的・垂直的とは、設計か施工かを問わず、具体的に進行する実施工程のなかで登場する様が当てはまる。上申や下達のかたちでもって情報が様により授受され、この場合の様とは、直接的・具体的な目的実現のための方法として機能しており、指示的・規定的な性格を帯びる。あるいは様が伝達の授受関係を決定し、生産関係を明瞭化させているとも捉えられる。これは、建築造営における組織のあり方や職能・技能、および工程が、ある程度固定化されたかたちに基づくものであることを示しており、手段が技能の専門化や高度化を促進させているとも言う。そのような様は、現代的な建築生産像における設計図書の資料的性格と類似するようにも見えよう。

他方、双方向的・平衡的とは、受け手によってある対象が様とされる場合である。上記の垂直的とは異なり、ひとつの工程内ではなく、異なる造営主体間、造営現場間、時間差などを越えて伝達される様が当てはまる。例えば、既存の造形物が後世に様とされる場合や、あるいは仏画を様として仏像が造られる場合などもあり、これは規範的・参考的な性格と言える。規範や参考とは、規定と比べて指示的性格は薄く、様は直接的・具体的なひとつの目的達成のための手段のみに回収されない。受け手にとってみれば、規定的・指示的な情報伝達とは他律的であるが、規範的・参考的な情報伝達では、受け手側からの積極性と自主性に基づく働きかけが不可欠である。そのために規範の対象には象徴性などの特別な価値基準が付与しうるのだろう。その観点において、規範・参考としての様は、再現・再生産にいたる以前、造営のプロセス以前に、すでにひとつの完結性を有しており、それ自身が指示を強いるものではない。これを規範と見なしうる者が現れ、造営

の意思が作用することによって、はじめて有益な情報が含まれた様となり、組織化や工程化が促されると捉えられる。平衡的・双方向的伝達関係としての様は、造営を決定する可能性を有するが、あくまで可能性に留まるのである。

以上のように、様とは、影響関係や伝達の過程によって存在したもの・そのように称されたものであり、さらに、あらかじめ様となることを意図して制作された場合も、受け手側から様に見なされた場合も、ともに様が創出される契機としてあったことになる。平衡性と垂直性というふたつの性格の情報伝達を、ともに様と呼ばれた媒体が担ったことは、様が取り結ぶ生産関係には、より多様性があったと言えるだろう。結果的に、様という情報伝達手法あるいはその概念は、建築の伝播・受容・生成の反復を緩やかに循環させる領域を形成していたと考えられる。

図版出典・初出一覧

図版出典

図 5.1 藏中しのぶ『「延暦僧録」注釈』、大東文化大学東洋研究所、2008.3

図 5.2 宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」、『日本古寺美術全集 第6巻 西大寺と奈良の古寺』、集英社、1983.1

図 5.3 福山敏男・浅野清「西大寺東西両塔」、『日本建築学会論文報告集』54、1956.10

図 7.1 高橋美久二『古代交通の考古地理』、大明堂、1995.

図 7.2 岸本道昭『山陽道駅家跡』、日本の遺跡 11、同成社、2006.5

図 7.3 龍野市教育委員会編『布勢駅家：小犬丸遺跡発掘調査概報』、龍野市教育委員会発行 1994.3

図 7.4 上郡町教育委員会編『古代山陽道野磨駅家跡：落地遺跡飯坂地区ほか発掘調査報告書』、上郡町教育委員会発行、2006.1

図 8.1 筆者作成

図 8.2 筆者作成

図 9.1 筆者作成

初出一覧

本論

- 第1章 小岩正樹「建築における様の解釈について - 日本古代建築における様の研究 その1-」(日本建築学会『2006年度日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』F-2、2006.9)
- 第2章 小岩正樹「実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式 - 『東大寺権別当実忠二十九ヶ条事』における小塔殿の様の研究 その1-」(日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第685号、2013.3)
- 第3章 小岩正樹「東大寺における実忠の造営事績とその活動形態」(日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第696号、2014.2)
- 第4章 小岩正樹「天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係」(日本建築学会関東支部『日本建築学会関東支部研究報告集 審査付き研究報告集』第7号、2012.6)
- 第5章 小岩正樹「思託による西大寺塔造営について - 日本古代建築における様の研究 その3-」(日本建築学会『2008年度日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』F-2、2008.9)を加筆修正
- 第6章 小岩正樹「国分寺および大安寺造営における図と様の関係について - 日本古代建築における様の研究 その2-」(日本建築学会『2007年度日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)』F-2、2007.8)
- 第7章 小岩正樹「古代における駅家建築の様について - 日本古代建築における様の研究 その4-」(日本建築学会『2009年度日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』F-2、2009.8)
- 第8章 小岩正樹「田上山作所における長上工と将領の作材 - 日本古代建築における様の研究 その6-」(日本建築学会『2012年度日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』F-2、2012.9)
- 第9章 小岩正樹「良弁の石山寺造営における改作指示について - 日本古代建築における様の研究 その5-」(日本建築学会『2011年度日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』F-2、2011.8)
- 第10章 小岩正樹「巡礼記にみる建築の様相の記述 - 『七大寺日記』と『入唐求法巡礼行記』を例に -」(日本建築学会『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』II、2013.3)

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

(2014年2月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
論文	<p>小岩正樹、「東大寺における実忠の造営事績とその活動形態」、日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第 696 号、2014 年 2 月、pp.507-516</p> <p>小岩正樹、「実忠の様と奈良諸大寺の小塔殿の建築形式 - 『東大寺権別当実忠二十九ヶ条事』における小塔殿の様の研究 その 1-」、日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第 685 号、2013 年 3 月、pp.683-692</p> <p>小岩正樹、「天長年間の東大寺大仏修理にみる造営関係」、日本建築学会関東支部『日本建築学会関東支部研究報告集 審査付き研究報告集』第 7 号、2012 年 6 月、pp.165-168</p>
講演	<p>小岩正樹、「奈良時代後期における技術官人の出向について - 木工大工および長上工を中心に-」、日本建築学会『2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』F-2、2013 年 8 月、pp.327-328</p> <p>小岩正樹、「巡礼記にみる建築の様相の記述 - 『七大寺日記』と『入唐求法巡礼行記』を例に-」、日本建築学会『2012 年度日本建築学会関東支部研究報告集』II、2013 年 3 月、pp.641-644</p> <p>小岩正樹、「田上山作所における長上工と将領の作材 - 日本古代建築における様の研究 その 6-」、日本建築学会『2012 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』F-2、2012 年 9 月、pp.867-868</p> <p>Masaki Koiwa, 'Architectural Information Exchange at Nara Period, Japan', UIA2011 TOKYO Congress Academic Program, September 2011, Tokyo (Japan), Poster Session</p> <p>小岩正樹、「良弁の石山寺造営における改作指示について - 日本古代建築における様の研究 その 5-」、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.645-646</p> <p>小岩正樹、「古代における駅家建築の様について - 日本古代建築における様の研究 その 4-」、日本建築学会『2009 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）』F-2、2009 年 8 月、pp.457-458</p> <p>小岩正樹、「思託による西大寺塔造営について - 日本古代建築における様の研究 その 3-」、日本建築学会『2008 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）』F-2、2008 年 9 月、pp.5-6</p> <p>小岩正樹、「国分寺および大安寺造営における図と様の関係について - 日本古代建築における様の研究 その 2-」、日本建築学会『2007 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）』F-2、2007 年 8 月、pp.7-8</p> <p>Masaki Koiwa, 'Current Interpretation of "Tameshi" on Ancient Japanese Architecture', The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), October 2006, Daegu (Korea)</p> <p>小岩正樹、「建築における様の解釈について - 日本古代建築における様の研究 その 1-」、日本建築学会『2006 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2006 年 9 月、pp.83-84</p>
著書	<p>『東アジアの古建築図面の歴史と特徴』、韓国水原華城博物館、2012 年 10 月 （「日本の古建築図面の歴史と特徴」 pp. 31-84 の執筆を担当）</p> <p>渡邊保忠（故人）著 『日本建築生産組織に関する研究 1959』、明現社、2004 年 12 月 （全体の校訂と構成編集を担当）</p>
その他 （博士論文に 直接関係のないもの） （論文）	<p>小岩正樹・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・西本真一・中川武、「エジプト・ダハシュール北部で発見されたパシェドゥの神殿型貴族墓」、日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第 569 号、2003 年 7 月、pp.223-230</p>
（講演）	<p>佐々木昌孝・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯・山岸吉弘、「『木碎之注文』における厩の用語について」、日本建築学会『2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』F-2、2013 年 8 月、pp.333-334</p>

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
その他 （博士論文に 直接関係のないもの） （講演）	<p>佐々木昌孝・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯・山岸吉弘、『木碎之注文』における門の木割について、日本建築学会『2012 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』F-2、2012 年 9 月、pp.795-796</p> <p>山岸吉弘・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯、『木碎之注文』における鳥居の木割について、日本建築学会『2012 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』F-2、2012 年 9 月、pp.797-798</p> <p>山崎幹泰・小岩正樹・米澤貴紀、「高岡市金屋町の町屋の平面分析 ―高岡市金屋町の町並みに関する研究 その 1-」、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.515-516</p> <p>佐々木昌孝・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯・山岸吉弘、「木碎之注文と洲本御大工斎藤家について」、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.655-656</p> <p>米澤貴紀・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・伏見唯・山岸吉弘、「木碎之注文に見られる寺社、建物、年紀、人物について」、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.657-658</p> <p>伏見唯・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・米澤貴紀・山岸吉弘、「大野老松天満社旧本殿と『木碎之注文』の木割」、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.659-660</p> <p>山岸吉弘・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯、『木碎之注文』における柱・組物・垂木の関係について、日本建築学会『2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』F-2、2011 年 8 月、pp.661-662</p> <p>米澤貴紀・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・伏見唯、『木碎之注文』における輿について、日本建築学会『2010 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』F-2、2010 年 9 月、pp.39-40</p> <p>佐々木昌孝・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・小岩正樹・米澤貴紀・伏見唯、『木碎之注文』における枘の寸法について、日本建築学会『2010 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』F-2、2010 年 9 月、pp.41-42</p> <p>小岩正樹・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・米澤貴紀・伏見唯、『木碎之注文』における多宝塔上重の枝割、日本建築学会『2010 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』F-2、2010 年 9 月、pp.43-44</p> <p>小岩正樹・西本真一・中川武・柏木裕之・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩、「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 15 -タの神殿型貴族墓の断面復原案-」、日本建築学会『2005 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）』F-2、2005 年 9 月、pp.423-424</p> <p>江口千奈美・中川武・小岩正樹、『バイヨンシンボジウム』の課題と展望(4) -『バイヨン憲章』の立案-、日本建築学会『2005 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）』F-2、2005 年 9 月、pp.455-456</p> <p>小岩正樹・西本真一・中川武・柏木裕之・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩、「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 13 -タの神殿型石造貴族墓-」、日本建築学会『2004 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』F-2、2004 年 8 月、pp.525-526</p> <p>西本真一・中川武・柏木裕之・小岩正樹・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩、「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 14 -タの神殿型石造貴族墓から出土した建築片-」、日本建築学会『2004 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』F-2、2004 年 8 月、pp.527-528</p> <p>小岩正樹、「建築の仕様とその記載について -慶長・元和期の中井家文書より-」、日本建築学会『2003 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』F-2、2003 年 9 月、pp.37-38</p> <p>小岩正樹・西本真一・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・中川武、「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 9 -パシェドゥの神殿型石造貴族墓-」、日本建築学会『2002 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』F-2、2002 年 8 月、pp.633-634</p> <p>西本真一・小岩正樹・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・中川武、「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 10 -パシェドゥの墓のピラミディオン-」、日本建築学会『2002 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』F-2、2002 年 8 月、pp.635-636</p>

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
その他 （博士論文に 直接関係のないもの） （著書）	<p>『木曾之注文（影印・釈文篇、解題・現代語訳篇）』、中央公論美術出版、2013 年 3 月 （全体執筆および編集を担当）</p> <p>『日本近代建築大全〈東日本篇〉』、講談社、2010 年 5 月 （「山梨県」「長野県」 pp. 246-261 の執筆および監修を担当）</p> <p>『早稲田大学大隈記念講堂保存再生工事報告書』、早稲田大学、2008 年 3 月 （「空間意匠に関する調査」 pp. 88-95 の執筆、および編集総括を担当）</p> <p>『幻都バンテアイ・チュマールの神々』、梧桐書院、2005 年 7 月 （全体編集の補助を担当）</p> <p><i>Master Plan for Conservation and Preservation of Bayon, The UNESCO/Japanese Funds-in-Trust for the Preservation of the World Cultural Heritage, June 2005</i> 『バイヨン寺院全域の保存修復のためのマスタープラン』、(財)日本国際協力センター、2005 年 6 月 （『The Bayon Charter(バイヨン憲章)』 pp. xix-xxvi の共同執筆、および全体の編集を担当）</p>
（報告書）	<p>『両国公会堂実測調査報告書』、早稲田大学建築史研究室、2013 年 3 月</p> <p>『株式会社ジー・エム・イー田中社屋実測調査報告書』、早稲田大学建築史研究室、2012 年 3 月</p> <p>『築地本願寺慈光院本堂実測調査報告書』、早稲田大学建築史研究室、2012 年 1 月</p> <p>『鋳物師の町並み 金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』、金沢工業大学建築史研究室、2011 年 3 月</p> <p>『大乘寺伽藍詳細調査報告書』、金沢工業大学建築史研究室、2011 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区料亭花の里実測調査報告書』、早稲田大学建築史研究室、2011 年 1 月</p> <p>『墨田区文化財建造物調査報告集（平成 21 年度版）』、東京都墨田区教育委員会、2010 年 3 月</p> <p>『墨田区文化財建造物調査報告集（平成 20 年度版）』、東京都墨田区教育委員会、2009 年 3 月</p> <p>『東京都の近代和風建築』、東京都教育庁地域教育支援部管理課、2009 年 3 月</p> <p>『天徳院本堂・観音堂・庫裏・福宝殿・鐘楼・回廊 詳細調査報告書』、金沢工業大学建築史研究室、2009 年 3 月</p> <p>『東京都新宿区宏明館調査概要報告書』、早稲田大学建築史研究室、2007 年 11 月</p> <p>『専長寺本堂・庫裏・鐘楼詳細調査報告書』、金沢工業大学建築史研究室、2007 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区照田家住宅実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2006 年 11 月</p> <p>『東京都新宿区旧中村彝アトリエ調査概要報告書』、早稲田大学建築史研究室、2006 年 11 月</p> <p>『東京都墨田区松本家住宅実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2005 年 11 月</p> <p>『祐天寺建築物文化財調査報告書』、東京都目黒区教育委員会、2005 年 8 月</p> <p>『東京都墨田区福島質店店蔵二棟実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2005 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区三囲神社境内社頭名霊社社殿実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2004 年 10 月</p> <p>『東京都墨田区多聞寺山門実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2004 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区岡田商事社屋実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2004 年 3 月</p> <p>『目黒区近代建築物個別調査報告書』、東京都目黒区教育委員会、2004 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区三囲神社本社実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2003 年 3 月</p> <p>『東京都墨田区弘福寺大雄宝殿実測調査報告書』、東京都墨田区教育委員会、2003 年 3 月</p>